

芦崎土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告Ⅲ

箱崎 21

—箱崎遺跡第26次調査報告(1)—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第815集

2004

福岡市教育委員会

宮崎土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告Ⅲ

箱崎 21

—箱崎遺跡第26次調査報告(1)—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第815集



福岡市教育委員会

序

古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきた福岡市には、有形・無形の優れた文化財が数多く残されております。これらの文化財は、先人が築き上げてきた福岡の歴史と文化を理解する上で欠くことのできない貴重なものです。本市ではこれらを踏まえ、昭和48年に福岡市文化財保護条例を制定するとともに、多岐にわたる文化財を保護・活用してまいりました。

その一方で、近年の都市開発による歴史的環境の変化には苦しいものがあります。本市教育委員会では新たな開発に先立ち、事前に埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録保存に努めております。

本報告書は、筥崎土地区画整理事業に伴い調査を実施した筥崎遺跡第26次調査の内、6・9・10区の成果を報告するものです。申すまでもなく筥崎地区は筥崎八幡宮の門前町として発展してきました。今回の調査でも、筥崎宮創建以降の平安中期から鎌倉期の集落跡を確認し、輸入陶磁器など多数の貴重な遺物が出土しました。また、この時代を遡る古墳時代の遺構も発見することができました。

今後、本書が文化財への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として、内外で活用していただければ幸いに存じます。

末尾になりましたが、発掘調査から本書の作成にいたるまで、費用負担などさまざまな面で多くご協力をいただきました福岡市土木局をはじめ、調査にご理解をいただきました筥崎・馬出地区の住民の皆様等関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成16年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 生田征生

例　　言

1 本書は、福岡市教育委員会が菅崎土地区画整理事業に伴い、福岡市東区箱崎1丁目・馬出5丁目地内において発掘調査を実施した箱崎遺跡第26次調査の内、6・9・10区の報告書である。

2 調査記録の作成および整理分担は、次の通りである。

遺構実測・・・・・・松浦一之介・城門義廣（九州大学学生）

遺物実測・・・・・・久住猛雄・松浦一之介・山口裕平（福岡大学大学院生）

遺構写真撮影・・・・・・松浦一之介

空中写真撮影・・・・・・（株）パスコ

遺物復元・・・・・・木下久美子・田中出紀・藤あい子・宮崎由美子・矢川みどり

金属製品保存処理・・・比佐陽一郎・片多雅樹（福岡市埋蔵文化財センター）

製図・・・・・・松浦一之介・木下久美子・宮崎由美子

写真現像焼付・・・・・・（有）ダイドーカメラ

3 本書の執筆分担は、次の通りである。

本文・・・・・・松浦一之介

付論・・・・・・中橋孝博（九州大学大学院比較社会文化研究院）

4 本書で使用した方位は磁北であり、座標は国上調査法第II座標系に據る。また、標高は東京湾平均海面高度（T.P.）に據る。

5 本書で使用した地図は、国土地理院発行の「1/50,000 福岡」、福岡市発行の福岡市都市計画図を原図としている。

6 本書で使用した遺構の略号は、基本的に奈良文化財研究所の用例に據る。

7 本書で記述する輸入陶磁器と古式土師器の分類・説明については、次の文献を参考にした。

横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」

『九州歴史資料館研究論集 4』1978年

太宰府市教育委員会「付緯・土器の分類」「大宰府条坊跡II」1983年

久住猛雄「北部九州における庄内式併行期の土器様相」「庄内式土器研究XIX」1999年

8 本書に関わる記録・遺物等の全資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。

9 本書の編集は、松浦一之介が行った。

目 次

第1章 はじめに	1
1. 調査にいたる経緯	1
2. 調査の組織	1
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	2
1. 道路の位置と立地	2
2. 周辺の道路と歴史的環境	2
第3章 消費の記録	6
6区の調査	7
1. 概要	7
2. 古墳時代の遺構と遺物	9
(1) 方形周溝墓 (SO-041)	9
(2) 円形周溝墓 (SO-054)	10
(3) 妻棺墓 (ST-056, 060, 088, 086)	14
3. 平安時代から鎌倉時代の遺構と遺物	17
(1) 据立柱建物跡 (SB-001~004)	17
(2) 方形竪穴 (SK-024, 027, 065, 097, 072, 089, 098)	18
(3) 井戸 (SE-015, 021, 080, 083, 090, 095, 103)	24
(4) 溝 (SD-046)	30
(5) 墓 (SX-044, 045, 061, 066, 081, 101, 102)	30
(6) その他の遺構と遺物	38
9区の調査	41
1. 概要	41
2. 平安時代から鎌倉時代の遺構と遺物	43
(1) 方形竪穴 (SK-007, 009, 011)	49
(2) 木棺墓 (SR-005)	45
10区の調査	48
1. 概要	48
2. 平安時代から鎌倉時代の遺構と遺物	49
(1) 据立柱建物跡 (SB-001~005)	50
(2) 棚列跡 (SA-006)	52
(3) 井戸 (SE-023, 024, 335, 347, 376, 407, 466, 477, 500)	52
(4) 土壙 (SK-001~006, 008, 010, 011, 017~019, 022, 061, 235)	60
(5) 溝 (SD-015, 088, 204)	74
(6) 性格不明遺構 (SX-012)	76
(7) その他の出土遺物	78
第4章 結語	81
付 論 福岡市箱崎遺跡第26次調査出土人骨	83

図版目次

第1図	箱崎遺跡位置図（縮尺1/50,000）	2
第2図	箱崎遺跡調査区位置図（縮尺1/5,000）	3
第3図	宮崎土地区画整理事業地と箱崎の景観（南から）	4
第4図	宮崎土地区画整理事業地内調査区位置図（縮尺1/5,000）	6
6区の調査		
第5図	6区調査区位置図（縮尺1/1,000）	7
第6図	6区調査区全景（南から）	8
第7図	SO-041方形周溝墓全景（西から）	9
第8図	SO-041方形周溝墓、周溝土層断面、遺物出土状況、出土遺物実測図（縮尺1/100, 1/40, 1/20, 1/3）	9
第9図	SO-054円形周溝墓全景（東から）	10
第10図	SO-054周溝土層（西から）	10
第11図	SO-054円形周溝墓実測図及び周溝土層断面図（縮尺1/100, 1/40）	10
第12図	SO-054周溝遺物出土状況全景（東から）	11
第13図	SO-054周溝内B群遺物出土状況（北から）	11
第14図	SO-054周溝内D群遺物出土状況（南から）	11
第15図	SO-054周溝内ST-060壺棺出土状況（北から）	11
第16図	SO-054円形周溝墓遺物出土状況図（縮尺1/20）	11
第17図	SO-054円形周溝墓出土遺物実測図（縮尺1/3）	12
第18図	ST-060壺棺実測図（縮尺1/6）	13
第19図	ST-060, 062, 088壺棺実測図及びST-062人骨出土状況図（縮尺1/20, 1/10）	14
第20図	ST-056壺棺墓検出状況全景（南から）	15
第21図	ST-088壺棺墓検出状況（南から）	15
第22図	ST-062壺棺墓検出状況（西から）	15
第23図	ST-062壺棺草人骨出土状況（西から）	15
第24図	ST-056, 062, 088壺棺実測図（縮尺1/6）	16
第25図	SB-001~004獨立柱建物跡及び出土遺物実測図（縮尺1/100, 1/3）	17
第26図	SB-001~004獨立柱建物跡とSK-065, 067, 072, 089, 098方形窓穴（東から）	19
第27図	SK-024, 027, 065, 067, 072, 089, 098方形窓穴実測図（縮尺1/100）	20
第28図	SK-027方形窓穴全景（南から）	21
第29図	SK-027方形窓穴出土状況（西から）	21
第30図	SK-024方形窓穴全景（東から）	21
第31図	SK-067方形窓穴全景（西から）	21
第32図	SK-089方形窓穴全景（東から）	21
第33図	SK-098方形窓穴全景（西から）	21
第34図	SK-065, 072方形窓穴全景（北から）	21
第35図	SK-024, 027, 065, 067方形窓穴出土遺物実測図（縮尺1/3）	22
第36図	SK-072, 089, 098方形窓穴出土遺物実測図（縮尺1/3）	23
第37図	SE-015井戸全景（南から）	25
第38図	SE-021井戸全景（西から）	25
第39図	SE-015, 021井戸実測図（縮尺1/50）	25
第40図	SE-083, 084井戸土層（図上）及び全景（北から）	26
第41図	SE-083, 090, 094井戸実測図（縮尺1/50）	26

第42図	SE-090井戸全景（東から）	27
第43図	SE-094井戸全景（西から）	27
第44図	SE-015.021.083.090井戸上に出土遺物実測図（縮尺1/3）	27
第45図	SE-095井戸全景（北から）	29
第46図	SE-103井戸全景（南から）	29
第47図	SE-095.103井戸及び出土遺物実測図（縮尺1/50, 1/3）	29
第48図	SD-046溝及び土層断面、出土遺物実測図（縮尺1/80, 1/3）	30
第49図	SX-044木棺墓検出状況（南から）	31
第50図	SX-045上層墓検出状況（西から）	31
第51図	SX-044木棺墓、045土壤墓実測図並びに人骨出土状況図（縮尺1/20, 1/10）	31
第52図	SX-044木棺墓出土鉄釘尖測図（縮尺1/2）	32
第53図	SX-061墓人骨・遺物出土状況及び出土遺物実測図（縮尺1/20, 1/10, 1/3）	32
第54図	SX-061墓検出状況（西から）	33
第55図	SR-066木棺墓検出状況（西から）	33
第56図	SR-066木棺墓人骨・遺物出土状況及び木棺想定復元図（縮尺1/20, 1/10）	33
第57図	SR-066木棺墓出土遺物（副葬品）実測図（縮尺1/3, 1/2）	34
第58図	SR-066木棺墓出土遺物（鉄釘）実測図（縮尺1/2）	35
第59図	SX-081土壤墓検出状況（西から）	36
第60図	SX-081土壤墓人骨・遺物出土状況及び出土遺物実測図（縮尺1/20, 1/3）	36
第61図	SX-101上層墓検出状況（南から）	37
第62図	SX-102土壤墓検出状況（南から）	37
第63図	SX-101, 102土壤墓実測図並びに人骨出土状況図（縮尺1/20, 1/10）	37
第64図	その他の遺構及び検出面出土遺物実測図、銅鏡拓影（縮尺1/3, 1/1）	38
第65図	6区出土瓦実測図（縮尺1/4）	40

9区の調査

第66図	9区調査区位置図（縮尺1/1,000）	41
第67図	9区調査区第1面全景（南から）	42
第68図	9区調査区第2面全景（南から）	42
第69図	9区調査区造構配置図（縮尺1/100）	42
第70図	SK-007.009.011方形祭穴及び出土遺物実測図（縮尺1/100, 1/3）	44
第71図	SR-005木棺墓検出状況（東から）	45
第72図	SR-005木棺墓副葬品出土状況（東から）	45
第73図	SR-005木棺墓出土遺物（副葬品）実測図（縮尺1/20）	45
第74図	SR-005木棺墓出土遺物（副葬品）実測図（縮尺1/3）	46
第75図	SR-005木棺墓出土遺物（鉄釘）尖測図（縮尺1/2）	47

10区の調査

第76図	10区調査区位置図（縮尺1/1,000）	48
第77図	10区調査区全景（南から）	49
第78図	SB-001～003掘立柱建物跡尖測図（縮尺1/100）	50
第79図	SB-004.005掘立柱建物跡、SA-006柵列跡及び出土遺物実測図（縮尺1/100, 1/3）	51
第80図	SE-023.024井戸全景（北から）	52
第81図	SE-023.024井戸尖測図（縮尺1/50）	52
第82図	SE-023.024井戸出土遺物実測図（縮尺1/3）	53
第83図	SE-335.347.466.477井戸実測図（縮尺1/50）	54
第84図	SE-335井戸全景（西から）	55

第85図	SE-347井戸全景（東から）	55
第86図	SE-466井戸全景（西から）	55
第87図	SE-477井戸全景（東から）	55
第88図	SE-335, 347, 466, 477井戸出土遺物実測図（縮尺1/3）	56
第89図	SE-376, 407, 500井戸実測図（縮尺1/50）	58
第90図	SE-378井戸全景（南から）	58
第91図	SE-407井戸全景（西から）	59
第92図	SE-500井戸全景（東から）	59
第93図	SE-376, 407, 500井戸出土遺物実測図（縮尺1/3）	59
第94図	SK-001土壤遺物出土状況（東から）	60
第95図	SK-002土壤全景（北西から）	60
第96図	SK-003土壤遺物出土状況（西から）	60
第97図	SK-010土壤遺物出土状況（北から）	60
第98図	SK-001～003, 005, 010, 011土壤及び土層断面実測図（縮尺1/40）	61
第99図	SK-001～003, 005土壤出土遺物実測図（縮尺1/3, 1/2）	62
第100図	SK-010, 011土壤出土遺物実測図（縮尺1/3）	63
第101図	SK-004土壤遺物出土状況及び土層（西から）	64
第102図	SK-004土壤遺物出土状況、土層断面及び出土遺物実測図（縮尺1/20, 1/40, 1/3）	64
第103図	SK-006土壤遺物出土状況（西から）	65
第104図	SK-006土壤遺物出土状況、土層断面及び出土遺物実測図（縮尺1/20, 1/40, 1/3）	65
第105図	SK-008土壤遺物出土状況（西から）	66
第106図	SK-008土壤遺物出土状況及び出土遺物実測図（縮尺1/20, 1/3）	66
第107図	SK-017土壤遺物出土状況（西から）	67
第108図	SK-017土壤遺物出土状況、出土遺物実測図及び銅鏡拓影（縮尺1/20, 1/3, 1/2）	67
第109図	SK-018土壤遺物出土状況（西から）	68
第110図	SK-018土壤遺物出土状況、土層断面及び出土遺物実測図（縮尺1/20, 1/40, 1/3）	68
第111図	SK-019土壤遺物出土状況、土層断面及び出土遺物実測図（縮尺1/20, 1/40, 1/3）	69
第112図	SK-022土壤遺物出土状況（西から）	70
第113図	SK-022土壤遺物出土状況及び土層断面実測図（縮尺1/20, 1/40）	70
第114図	SK-022土壤出土遺物実測図（縮尺1/3）	71
第115図	SK-061土壤遺物出土状況、土層断面及び出土遺物実測図（縮尺1/20, 1/40, 1/3）	72
第116図	SK-061土壤遺物山上状況（東から）	72
第117図	SK-061土壤銅鏡山上状況（北から）	72
第118図	SK-235土壤遺物出土状況（南東から）	73
第119図	SK-235土壤遺物出土状況、SK-375及び出土遺物実測図（縮尺1/20, 1/40, 1/3）	73
第120図	SD-015, 088, 204, 406溝及び出土遺物実測図（縮尺1/50, 1/3）	75
第121図	SX-012性格不明遺構検出状況（北及び東から）	77
第122図	SX-012性格不明遺構及び土層断面実測図（縮尺1/40）	77
第123図	SX-012性格不明遺構出土遺物実測図（縮尺1/3）	78
第124図	その他の遺構及び検出面出土遺物実測図（縮尺1/3, 1/2）	79
第125図	10区出土瓦実測図（縮尺1/4）	80
第1表	井戸枠観察表	25
第2表	SR-044出土鉄釘観察表	32
第3表	SR-066出土鉄釘観察表	35
第4表	SR-005出土鉄釘観察表	46

第1章 はじめに

1 調査にいたる経緯

福岡市土木局宮崎連続立体開発事務所換地課長から、平成6年8月24日付、土管第476号により同市教育委員会文化財部埋蔵文化財課長宛てに、東区馬出・宮松・博多J.R古川本町における福岡都市計画事業宮崎土地地区調整事業（事業面積：27.8ha）に伴う埋蔵文化財事前審査についての依頼が行われた（事前審査番号：7-1-50）。

同事業は、平成4年1月17日に都市計画決定が行われ、同年9月14日の事業計画決定がなされた。その事業目的は、東区の中心地域として位置付けられている箱崎地区の道路や公園等の公共施設の未整備や、土地細分化、家屋密集等による市街地環境の低下、また道路と鉄道（J.R鹿児島本線・篠栗線）の平面交差による踏切事故防止や慢性的な交通渋滞緩和等の問題のため、都市計画道路等の整備・改善や鉄道高架による道路との立体交差化、また高架事業に伴うJ.R箱崎駅の移設を実施し、良好な市街地の形成と都市機能の向上を図るものである。

埋蔵文化財課では、事業地が周知の埋蔵文化財蔵地である箱崎遺跡に含まれていることから、平成6年9月14日より建物移転の終了した箇所を順次試掘調査している。旧箱崎駅2・3番線ホームを撤去した後の、平成15年2月26日に、同構内の試掘調査を実施した。その結果、中世を主体とする遺構が、東側はJ.R鹿児島本線、西側が事業地西端の都市計画道路堅粕・箱崎線（通称：妙見通り）、北側が現J.R箱崎駅西口広場付近、南側が事業地南端の範囲、総面積にして約35,000m²において確認できた。この試掘結果をもとに両課は、当該地の埋蔵文化財保存を前提とした協議を行ったが、1号公園部分（事業面積：2,500m²）を除き事業計画上、遺構の破壊が不可避であると判断したため、平成11年度から本調査を、また平成14年度から資料整理・調査報告書作成を継続して行うことになった。尚、これらに係る費用は事業主体である土木局宮崎連続立体開発事務所が負担した。

2 調査の組織

調査委託：福岡市土木局 宮崎連続立体開発事務所

調査主体：福岡市教育委員会 文化財部埋蔵文化財課

調査統括：埋蔵文化財課長 山崎純男

同課調査第2係長 力武卓治（前任） 田中壽夫（現任）

調査庶務：文化財整備課 御手洗清

調査担当：同課調査第2係 佐藤一郎 松浦一之介（現 同課調査第1係）

調査作業：石橋テル子 金子國雄 金子澄子 唐島栄了 清田厚巳 草場恵子 熊本義徳

小林スエ子 小林義徳 酒井廉江 坂出武 坂田ミネ 杉村百合子 関哲也

田崎アヤ子 辻美佐江 永松トミ子 福田操 吉村智子

城門義慶（九州大学学生）

尚、発掘調査から報告書作成に至るまで土木局宮崎連続立体開発事務所、J.R九州をはじめ、地域住民等関係者各位には多大な御協力と御理解を頂いた。記して謝意を表する次第である。

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

1 遺跡の位置と立地

海の中道によって外海である玄界灘から隔てられた博多湾の沿岸には、箱崎砂層と呼ばれる新砂丘砂層が形成されている。この層は、東区貝塚から早良区の室見川河口に達し、現在の福岡都心域と重複している。この層の形成時期については、少なくとも縄文時代晚期を下らないとする自然科学的知見が得られている。尚、海の中道を形成する海の中道砂層も箱崎砂層と同様、いわゆる新砂丘砂層であり、形成時期は完新世である。

箱崎遺跡は、この砂丘の北端部分に立地する。箱崎砂層の後背部には、これより古い時期に形成された沖積地である広義の福岡平野が広がる。内、箱崎遺跡の後背部は、多々良川とその水系である須恵川・宇美川流域の船屋平野である。

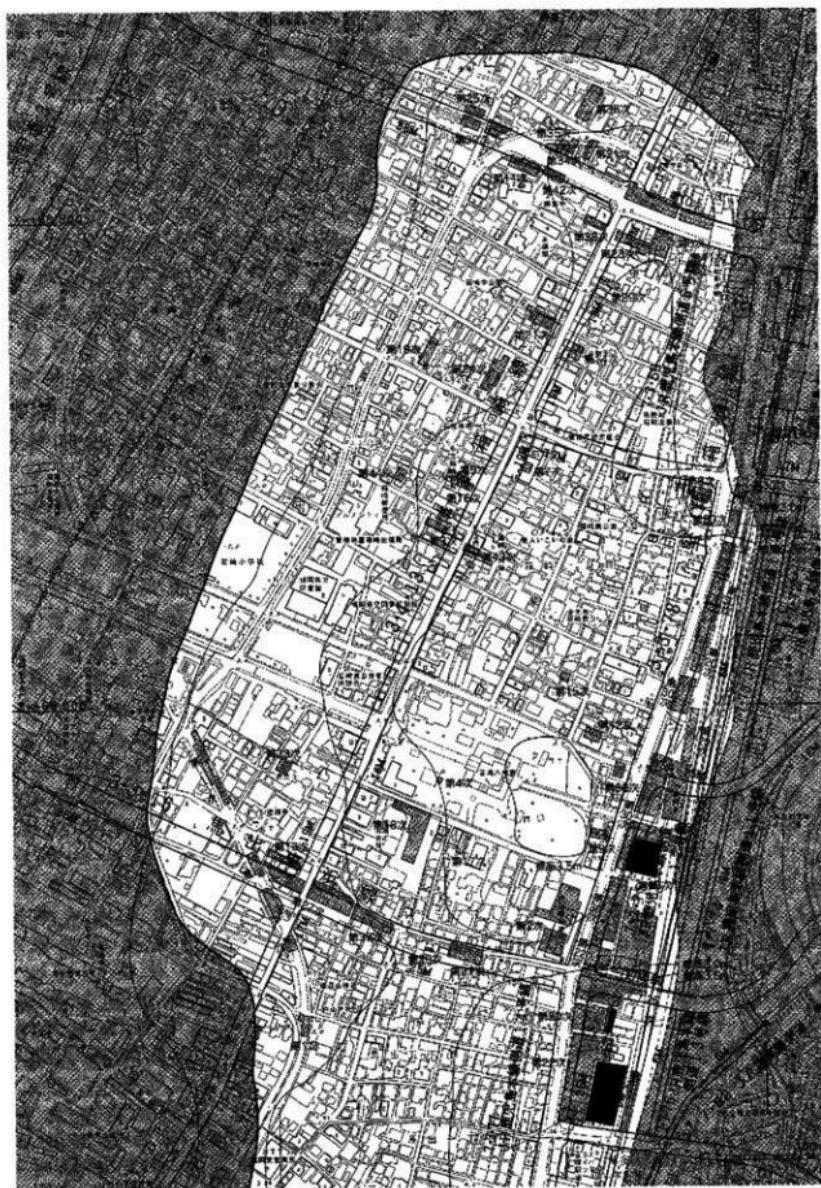
2 周辺の遺跡と歴史的環境

今回の調査で検出された遺構群は、古墳時代前期と平安・鎌倉時代の両者に大別される。

古墳時代には、多々良川下流域と宇美川中流域の二つの地域に墳墓群が築造される。前者には名島古墳、香住ヶ丘古墳、舞松原古墳、天神森古墳、部木古墳群等が、また後者には光正寺古墳、境田古墳、萱葉古墳群等がある。多々良川下流域の当該期集落としては、外来系土器が多く出土した前期の多々良込田遺跡、初頭から後期にかけての堅穴住居址で構成される蒲田部木原遺跡など調査例は多くない。

▶第1図
箱崎遺跡位置図（縮尺1/50,000）





▲第2図 箱崎遺跡調査区位置図（縮尺1/5,000）



▲第3図 宮崎地区画整理事業地と箱崎の景観（南から）

柏屋平野の奈良・平安時代で特筆すべき遺跡としては、柏屋条里 (N-20°-E) に合致する区画溝と規格性の高い掘立柱建物群で構成され、多量の唐代中国陶磁器、国産施釉陶器をはじめ石帯や硯、墨書き土器など官衙的色彩を帯びた遺物が多く出土した多々良込田遺跡がある。平安末期から鎌倉時代にかけては、「コ」の字形溝で区画される屋敷地が多々良遺跡や戸原麦尾遺跡で検出されている。戸原麦尾遺跡は方半町の屋敷が二カ所検出され、内一つは13世紀後半に東西一町に拡張されたことが確認された。また香椎B遺跡では当該期から室町期にかけての屋敷群や禅宗寺院跡が確認されている。

多々良川河口部の丘陵に立地する名島城は、小早川氏入部後の天正16(1588)年から築城が開始され、慶長12(1607)年、黒田長政の福岡城移築で廃城

となった。

一方、湾岸部の砂丘には、北から順に箱崎遺跡、吉塚本町遺跡、吉塚祝町遺跡、堅柏遺跡、吉塚遺跡、博多遺跡群が立地する。これらの遺跡群は、砂丘の鞍部や河川、旧河道により区画されるものと考えられ、それぞれその微高地に立地している。今日まで商業都市であり続ける博多遺跡群では、これまで146次にわたる調査が行われてきた。これにより中・近世の膨大な資料が蓄積され、都市の実像が明らかにされつつある。またこれらの遺跡群の前面には元寇防壁の推定線が走る。

箱崎遺跡は、これまで44次にわたる発掘調査が実施してきた。これまでの調査で最も古い遺物は第6次調査出土の磨製石斧や第20次調査出土の刻目突帯文瓦片である。縄文時代晚期から弥生時代初



頭の所産と考えられるが、後世の遺構からの出土である。古墳時代の遺構としては、第8・20・22・26・30次調査等で竪穴住居や周溝墓、甕棺墓等が検出されている。これらは主に前期の所産だが、中・後期の遺構及び遺物も散見される。これら古墳時代の集落及び墓地群は、何れも本遺跡が位置する砂丘の東側緩傾斜面上に立地していることから、集落形成の際に比較的安定した自然環境を選択したと推定されている。

これ以降、宮崎宮が創建された10世紀までの明確な遺構は、現在確認されていない。

10・11世紀代の遺構は宮崎宮の南東側の調査区、即ち2・9・12・22・26・30次調査で確認されている。更にこれまでの調査の成果から、12世紀中頃以降、西側緩傾斜面の集落としての利用が開始され、後半には遺跡の広範囲で集落が確認されている。また遺跡の南西側、短冊形の屋敷地に沿った第13次調査では、15世紀代の町屋の構造を示す遺構配置が確認されており、箱崎地区の町割りを考察する上で貴重な資料である。

この箱崎遺跡の発展に大きな役割を果たした宮崎宮は、延喜21(921)年、大宰府觀世音寺巫女に八幡大菩薩の託宣があり、延長元(923)年に筑前總波郡大分八幡宮を遷座したものと伝えられる。これは「異賊之来寇」即ち新羅来寇の祈攘と、大宰府官人層による対外交渉の拠点とする目的が大きいと考えられている。尚、「宮崎津」と呼ばれる同宮の港湾施設は、宇美川が砂丘に蛇行する同宮の後背部にあったものと推定されている。保延6(1140)年、宮崎宮は神人らの淫行がもとで香椎宮とともに大宰府領となる。また仁平元(1151)年、大宰府檢非違所別当安清らが500余騎を率いて、宮崎・博多で大追捕を行い宋人王昇後家をはじめ1600家の資財を運び去った際、宮崎宮にも乱入し、神宝を強奪している。宮崎宮の創建以降、神宮寺や今山別所などの宗教施設が建ち並んでいた他、博多に連続してかなりの規模の宋人居留街ができていたものと考えら

れる。

文永11(1274)年の役で宮崎宮は焼失したが、その後も度数にわたり焼失した。14世紀前半に元・慶元府(今の寧波)を船出し、日本への航行中、現在の韓国全羅南道新安沖に沈没した貿易船の引揚げ資料には「宮崎奉加錢」銘の木簡があり、当該期の交易拠点の一つであったことが想起される。

箱崎遺跡は、北側の箱崎地区と南側の馬出地区に跨るが、前者は糟屋郡、後者は那珂郡に属した。和名抄によれば律令期の糟屋郡は、香椎、志珂、厨戸、大村、池田、安曇、柞原、勢門、敷梨の九郷を所管する中郡であり、那珂郡は田来良久、日佐、良久、海部、三宅、山口、板曳、中島の八郷を所管する中郡である。両郡の郡境は席田丘陵から御手洗、下白井を経由して宮崎宮の南側を通り博多湾岸に抜ける。故に、今回の調査区の内6及び9区は那珂郡域、10区は糟屋郡域ということになる。

寛弘二(1005)年十一月十五日筑前国符案には「糟屋西郷司」がみえる。のことから、当時糟屋郡には東郷・西郷の二郷が成立していたと考えられている。石清水八幡宮文書によれば、地名の分布から東郷が、南里等の現糟屋郡南東域に、また西郷が、大多良・阿恵等の西部一帯にあったものと考えられる。和名抄の郷郷は、平安後期の1040年代に大きな改変がなされた。中世の糟屋郡関連史料には和名抄の郷名に由来しない名称も見られるが、これら中世的郷郷がいつ成立したのかは明らかでない。これら両郷と久原郷、青柳郷、乙犬、蒲田別府は糟屋郡内の宮崎宮領である。先述の戸原麦尾遺跡は、この宮崎宮領糟屋西郷戸原村に位置すると考えられ、第II調査区検出の屋敷地は、日野尚志氏の復元案に従うと糟屋西郷北六國八里11坪に位置すると指摘されている。

第3章 調査の記録

1 調査の概要

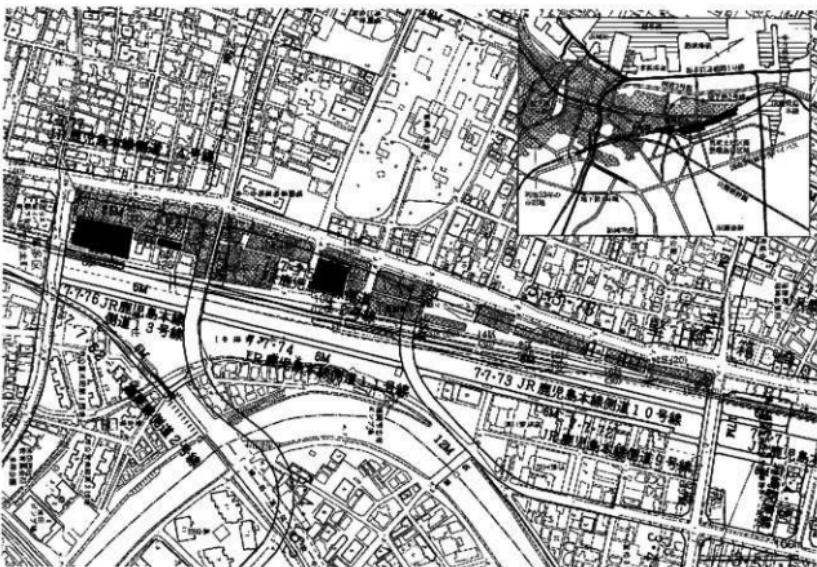
第26次調査は、6～10区の5調査区に分かれている。この内、本書で報告するのは6・9・10区の3地点である。7・8区の報告は、次年度以降に刊行される予定である。尚、芦崎土地区画整理事業に伴う調査については、この調査区呼称を調査次数や調査年度に問わらず、調査着手順の通し番号として使用している。

本報告の発掘調査は、平成13（2001）年6月1日、重機による6区の表土剥ぎ取りから開始し、調査区順に発掘調査を実施した。各調査区では、古墳時代の周溝墓、甕棺墓、古代から中世の掘立柱建物跡、方形堅穴、井戸、土壙等を検出した。平成14年3月31日に器材撤収を行い調査は終了した。調査総面積は都合2,100m²である。

調査時の遺構番号は、各区毎に001から3桁の通し番号を遺構の種別に関わらず付与している。遺構番号は、調査終了後に図面上で復元した掘立柱建物跡で使用した番号以外に重複はない。但し、欠番はある。遺構の記述は、例言に記した遺構略号と3桁の遺構番号、遺構の名称を組み合わせて記述する。

今回の調査は、区画整理という性格上、街区や道路形状が事業施工後に大きく変化するため、国十座標（第II座標系）による調査区管理を行っている。また、6・10区の両調査区には、この座標軸を基準とした10m毎のグリッドを組んだ。グリッドは英字（東から西へA、B、…）と数字（北から南へ1、2、…）で表記している。

次節以下、各区毎に検出遺構と出土遺物について報告する。



▲第4図 芦崎土地区画整理事業地内調査区位置図（縮尺1/5,000）

6区の調査

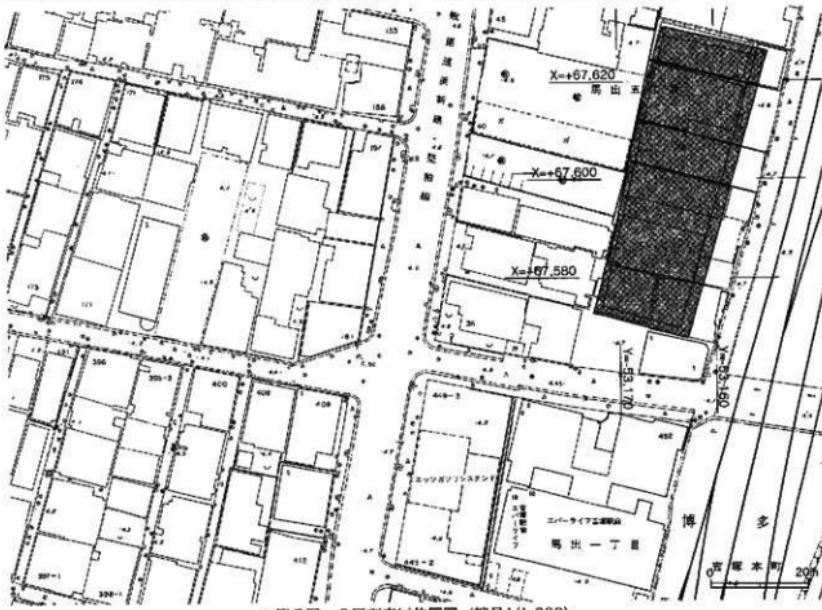
1 概 要

6区は、東区馬出5丁目1番地内に位置し、箱崎遺跡の南東端部の一画を占める。調査前の現況は、専用住宅と中層共同住宅解体後の平地であった。調査区のほぼ南半分は、解体以前の建物基礎による擾乱が著しく、遺構の遺存状況は良好でなかった。遺構検出面（黄褐色砂層）での標高は、北側で約3.5m、南側で約3.2mを測った。調査面積は1,180m²である。

検出遺構は、古墳時代前期と古代から中世にかけての2時期に大別される。古墳時代の遺構は、円形周溝墓1基、方形周溝墓1基、蓋棺墓等である。後世の遺構と近現代の擾乱で、遺構の遺存状況は良好でない。出土遺物は古式土解器がある。古代から中世の遺構は、図上復元した獨立柱建物跡、方形堅穴、

井戸、土壙、溝、柱穴等が検出された。出土遺物には、土師器（皿・壺・高台付皿・高台付壺）、土師質土器（盤台）、黒色土器（皿・壺・托上壺）、瓦器（碗）、国産陶器（縄釉陶器碗・壺）、中国産陶磁器（白磁碗・皿・水注・合子・青磁碗・皿・托・水注・壺、青白磁合子・陶器壺・甕・鉢）、朝鮮半島産陶磁器（新羅陶器壺、高麗青磁碗・皿）、鉄製品（刀子・釘・火打金）、石製品（滑石製石鍋・碁石）、陶製品（碗）、土製品（土鍾）、瓦（平瓦・丸瓦）、埠、炭化米、人骨、動物骨等である。

調査区北側に集中している方形堅穴や独立柱建物群の主軸偏差には、ある程度の纏まりがみられ、一定の規格性が窺える。また、越州窯系青磁15点や初期高麗青磁等の輸入陶磁器、国産縄釉陶器や植葉型瓦器碗などの搬入品、瓦の出土等、一般集落と性格を異にした特殊な機能が窺える。



▲第5図 6区調査区位置図 (縮尺1/1,000)

第6図
6区調査区全景
(南から)



2 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構としては、方形周溝墓1基、円形周溝墓1基、棗棺墓4基（内1基は円形周溝墓の周溝内埋葬）を検出した。中世以降の遺構群と近現代の擾乱により破壊され、遺存状況は良好でない。

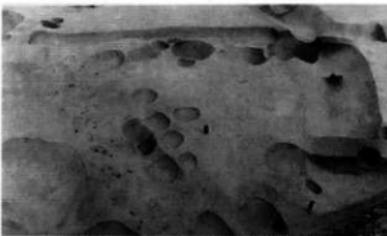
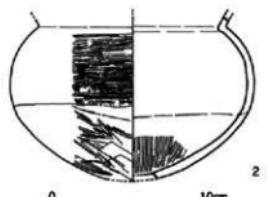
（1）方形周溝墓

SO-041方形周溝墓（第7、8図）

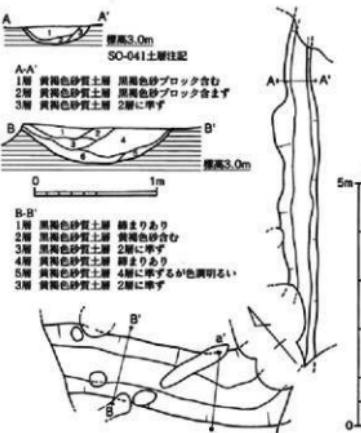
C-5・6、D-6グリッドで検出した矩形に曲がる溝である。北側の一部が遺存するのみである。南北方向は現存長8.5m、東西方向は5.6mを検出し、これ以西は調査区外に延びると考えられる。幅は、南北方向で0.5~0.8m、東西方向で1.2~1.5m、深さは、南北方向で0.15m、東西方向で0.3mを測る。溝断面形は浅い蒲鉾形を呈する。覆土は黒褐色及び黄褐色の砂質土が堆積する。

出土遺物（第8図左下）

1は小型丸底壺で口径14.6cm、腹部最大径14.8cmに復元される。口縁部短く外反。斜めハケの後、胴部から口縁部にかけて横方向のヘラ磨き。頸部は横ナナ。胎土精良で白色細砂を含む。色調純い橙褐色。2は小型丸底壺の胴部片で頭部径11.6cm、腹部最大径15.1cmに復元される。底部に手持ちヘラ削り、胴部上半は斜めハケの後横方向のヘラ磨き。胎土精良で白色細砂を含む。色調純い橙褐色。出土遺物からSO-041方形周溝墓の年代はII期～IIIC期と考えられる。



▲第7図 SO-041方形周溝墓全景（西から）



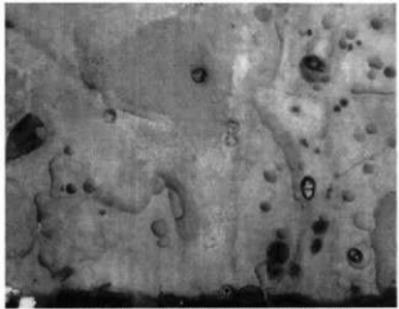
▲第8図 SO-041方形周溝墓、周溝土層断面、遺物出土状況、出土遺物実測図（縮尺1/100, 1/40, 1/20, 1/3）

(2) 円形周溝墓

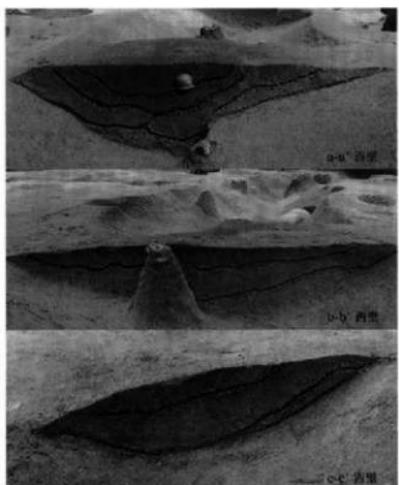
SO-054円形周溝型（第11～18図）

A-3・4、B-3・4グリッドで検出した。近現代の攪乱で大半が破壊される。検出した周溝は、北側部分で、東西方向に弧状に延びる。尚、これ以東は調査区外に延びると考えられる。南側の周溝は、長さ9.5m、幅1.0～2.3m、深さ約1.0mを測る。溝断面は緩やかな蒲鉾形を呈する。覆土は上層に褐色砂質土、下層に茶褐色～暗黄褐色砂質土が堆積する。また、南側でも長さ1.9m、幅0.65m、深さ0.1m程度の断面形が蒲鉾形を呈する浅い溝状の遺構を検出した。出土遺物はないが、覆土の堆積状況から円形周溝墓の一部である可能性が考えられる。

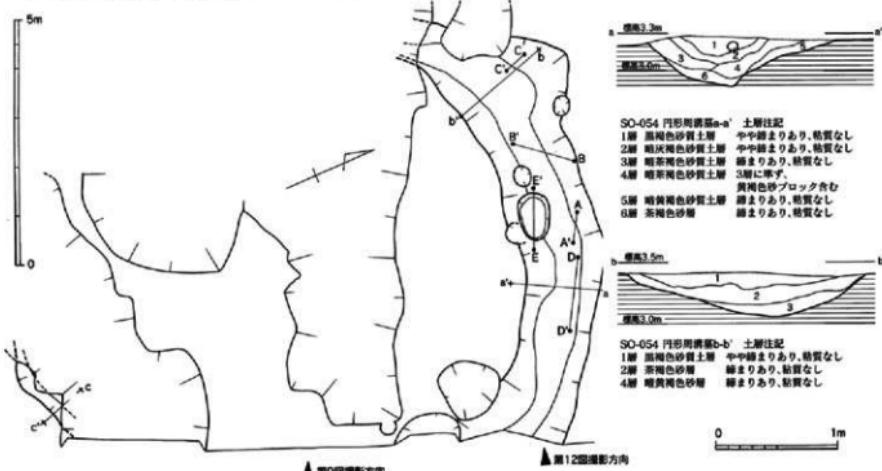
遺物は、古墳時代前期の古式土師器（鉢・甕・小型丸底甕）で、上層から底面にかけて出土した。溝底部では周溝内埋葬を1基検出した。上甕は口縁部を打ち欠いた甕、下甕は西部潮戸内系二重口縁甕で、合口形式は呑口である。墓壇は長円形で、長軸100cm、短軸65cmを測る。上甕底部は焼成後に故意に打ち欠かれ、同じく打ち欠いた口縁部片で穿孔部を塞いでいた。また下甕も焼成後、胴部（棺としては底部）が径4cm程度の不整円形に穿孔されている。主軸方位はN-71°-Wを測る。上甕と下甕で傾きが異なるが、両者の埋葬角度は16°を測る。



▲第9図 SO-054凹形周溝基全量(東から)



▲第10図 SO-054周辺土層(西から)



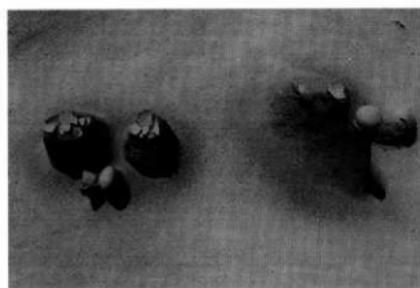
▲第11圖 SO-054巴形牆邊坡實測圖及1F牆土層斷面圖(縮尺1/100, 1/40)



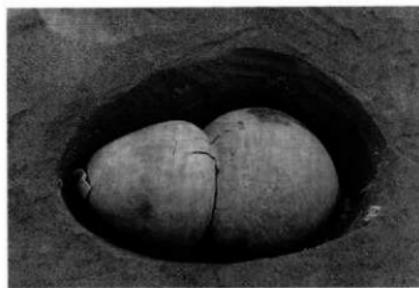
▲第12図 SO-054周溝遺物出土状況全景(東から)



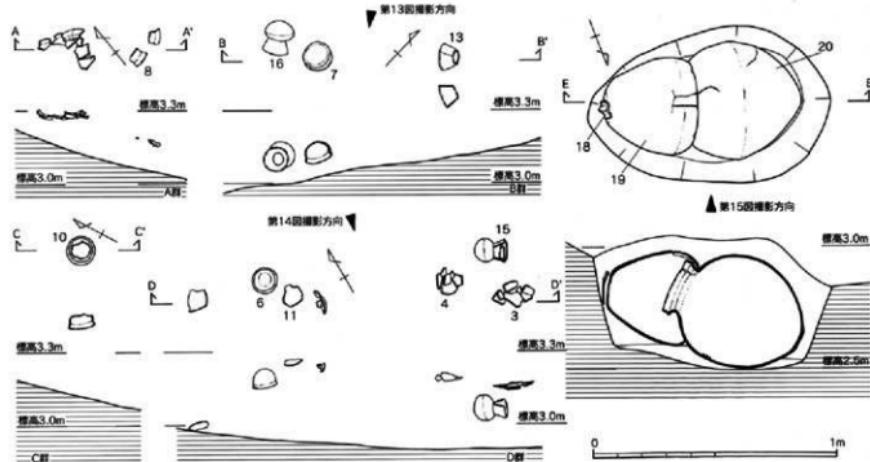
▲第13図 SO-054周溝内B群遺物出土状況(北から)



▲第14図 SO-054周溝内D群遺物出土状況(南から)



▲第15図 SO-054周溝内ST-060要棺出土状況(北から)

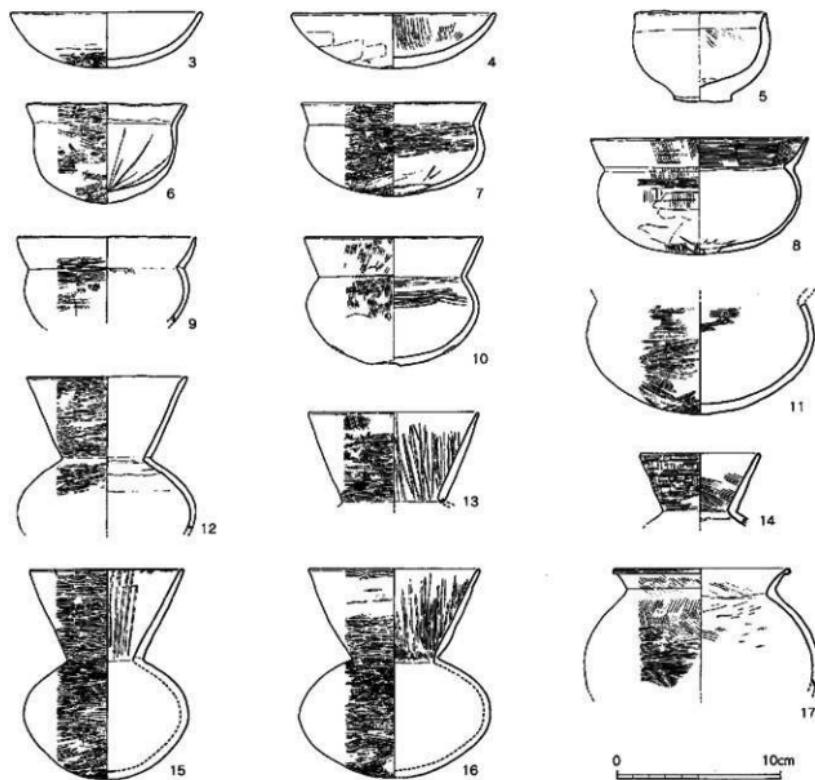


▲第16図 SO-054円形周溝墓遺物出土状況図(縮尺1/20)

出土遺物（第17、18図）

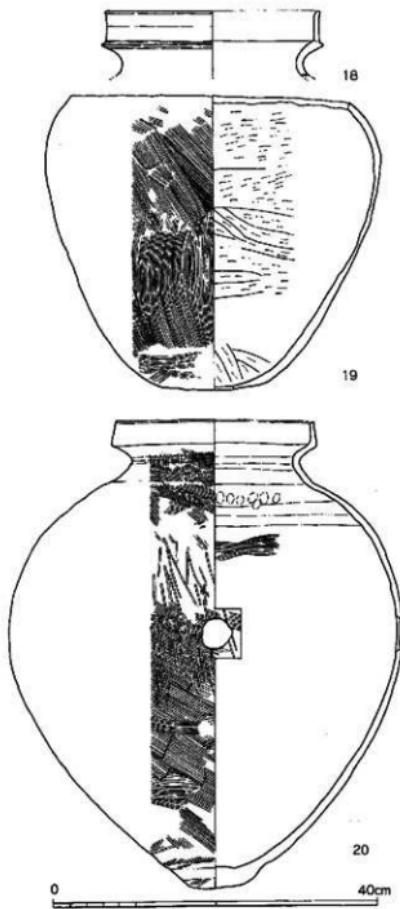
3～5は鉢、6～11は外反口縁の鉢、12～16は精製小型丸底壺、17は布留系模倣壺である。3は口径11.4cm、器高3.4cm。外器面底部に手持ちヘラ削り後ヘラ磨き、口縁部から内器面には横ナデ調整。4は復元口径12.3cm、器高3.4cm。調整は3と同様、内器面に不明瞭乍ら縱方向のハケ調整が見られる。两者とも胎土精良で白色砂粒を含み、鮮明な橙色を呈す。5は指整形の伝統的V様式小型鉢。口径7.9cm、器高5.5cmの完形品。底部は不明瞭な平底で、体部内湾しながら口縁部が僅かに外反。調整は内器面不明瞭、外器面に横ナデ。胎土はやや粗い。6は

口径9.6cm、器高6.1cm。体部浅く上半は直立し、口縁部は短く外反。外器面ハケ目後、細密な横向方向のヘラ磨き調整。7は口径11.1cm、器高5.8cm。体部は浅く、上半僅かに内湾し、口縁部は短く外反。外器面体部ハケ目、底部手持ちヘラ削り後にヘラ磨き調整。底部が焼成後に穿孔される。8は復元口径13.2cm、器高7.1cm。体部は浅く、上半内湾し、口縁部は短く外反する。外器面体部最大径以下ヘラ削り後にヘラ磨き。以上は口縁部までハケ目後にヘラ磨き調整。底部に焼成後の穿孔がある。9は復元口径10.6cm。体部は浅くと考えられる。上半は内湾し、口縁部は内湾気味に短く開く。頸部付近にヘラ磨き、



▲第17図 SO-054円形周溝墓出土遺物実測図 (縮尺1/3)

口縁部横ナデ調整。10は口径11.0cm、器高7.9cm。体部は浅く、上半内済し、口縁部は外反。外器面底部にヘラ削りの痕跡が残る。肩部最大径以上は縦ハケ後にヘラ磨き、口縁部は横ナデ調整。肩部内器面はヘラ磨き調整。6～11は胎土何れも精良で白色砂粒を含み、色調は鮮明な橙色を呈す。12は口径9.7cm、肩部最大径10.8cmに復元される。頸部はよく締まり、ほぼ直角に屈曲し、内器面には棱がある。



▲第18図 ST-060要棺実測図 (縮尺1/6)

口縁部は直線的に長く延び、端部が僅かに外反。外器面残存部全面にヘラ磨き、内器面に横ナデ調整が観察される。13は口縁部片で口径9.0cmに復元。直線的に長く延び、外器面に横向、内器面に縱方向のヘラ磨き調整。14は口径7.2cmに復元。頸部はほぼ直角に屈曲し、内器面に後がある。外器面は縦ハケ後、横方向のヘラ削き調整。内器面は斜め方向のハケ目調整。15は口径9.1cm、器高12.9cm、肩部最大径10.0cmの完形品。頸部はよく締まり、内器面に明確な棱がある。肩部は偏球形を呈し、口縁部は直線的に長く延びる。外器面は肩部にヘラ削り、口縁部に横ナデの後、細密な横方向のヘラ磨き調整。口縁部内器面には縦方向のヘラ磨きが部分的に残る。16は口径10.5cm、器高12.8cm、肩部最大径9.8cmの完形品。頸部はよく締まり、内器面に明確な棱がある。肩部は偏球形を呈し、口縁部は頸部のやや上位に僅かながら屈曲が認められ、長く延びるかやや内傾気味な印象を受ける。外器面は肩部にヘラ削り、口縁部横ナデの後、細密な横方向のヘラ磨き調整。11縫部内器面は縦方向のヘラ磨きが暗文状に残る。底部が焼成後に穿孔される。12～16の胎土は何れも精良で、色調は鮮明な橙色～赤橙色を呈す。17は口径10.4cm、肩部最大径14.2cmに復元。口縁部は短く外反し、口唇部に一条の四線が巡る。外器面には肩部に横方向、肩部から口縁部に斜め方向のハケの後、11縫部～頸部に横ナデ。肩部内器面にヘラ削りするがやや器壁が厚い。胎土はやや粗い。18は上巻の打ち欠かれた口縁部片で口径25.8cmに復元。山陰系の二重口縁で口縁部はほぼ直立。19は上巻で口縁部と底部を焼成後打ち欠く。肩部最大径41.4cm、器高36.1cm。外器面肩部下半は縦方向のハケ、上半は斜め方向のハケ調整。内器面はヘラ削り調整。胎土に白色粗砂を含み、色調明褐色を呈す。20は西部瀬戸内系二重口縁を使用した下巻で口径24.2cm、肩部最大径48.5cm、器高58.0cm。11縫部はやや内傾気味に直立し、頸部は「ハ」字形に内傾する。外器面頸部以下は斜めもしくは縦方向のハケ調整の後、上半にヘラ磨きを施す。内器面は部分的にハケ調整が残るが大半はナデ調整される。胎土粗く白色粗砂を多く含み、色調純い黄橙色を呈す。

焼成後副部に穿孔される。

出土遺物から、SO-054円形周溝墓の年代はII A期で、IIC期に壇棺墓と祭祀があったと考えられる。

(3) 壇棺墓 (第19~24図)

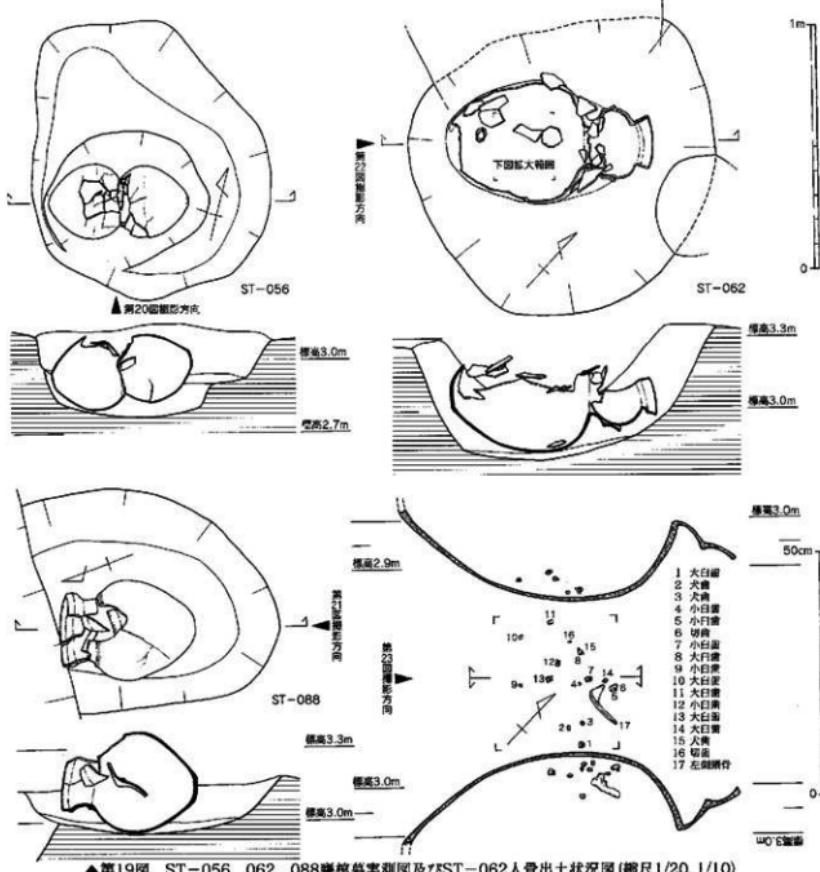
ST-056壇棺墓

A-3、B-3グリッドで検出した。上壇に口縁部を打ち欠いた筑前型庄内壇、下壇に同様の畿内系二重L縁壇の体部を使用し、合口形式は接口である。墓擴は2段に掘削し、上段の掘り方は不整形で、長

さ114cm×幅97cmを測る。2段目の掘方は梢円形を呈し、長軸68cm×短軸56cmを測る。両壇共に土圧で落ち込んでいるが、削平は受けていない。主軸方位はN-75°-Eを測る。上壇と下壇で傾きが異なるが、両者の埋葬角度は9°を測る。

ST-062壇棺墓

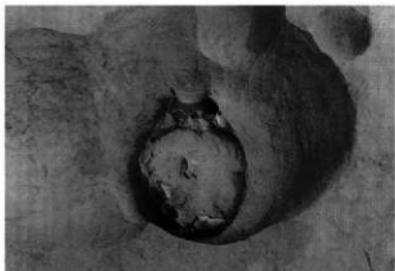
B-3グリッドで検出した。上壇・下壇共に山陰系二重L縁壇を使用する。上壇底部を下壇口縁部に合わせる。墓壙は不整形な円形を呈し、長さ125cm×幅117cmを測る。中世のSK-030土壙と重複し、



▲第19図 ST-056、062、088壇棺墓実測図及びST-062人骨出土状況図(縮尺1/20, 1/10)



▲第20図 ST-056壺棺墓検出状況全景(南から)



▲第22図 ST-062壺棺墓検出状況(西から)



▲第21図 ST-088壺棺墓検出状況(南から)



▲第23図 ST-062壺棺墓人骨出土状況(西から)

両壺とも上部を大きく欠損する。主軸方位はN-47°-Eを測り、埋葬角度はほぼ水平である。

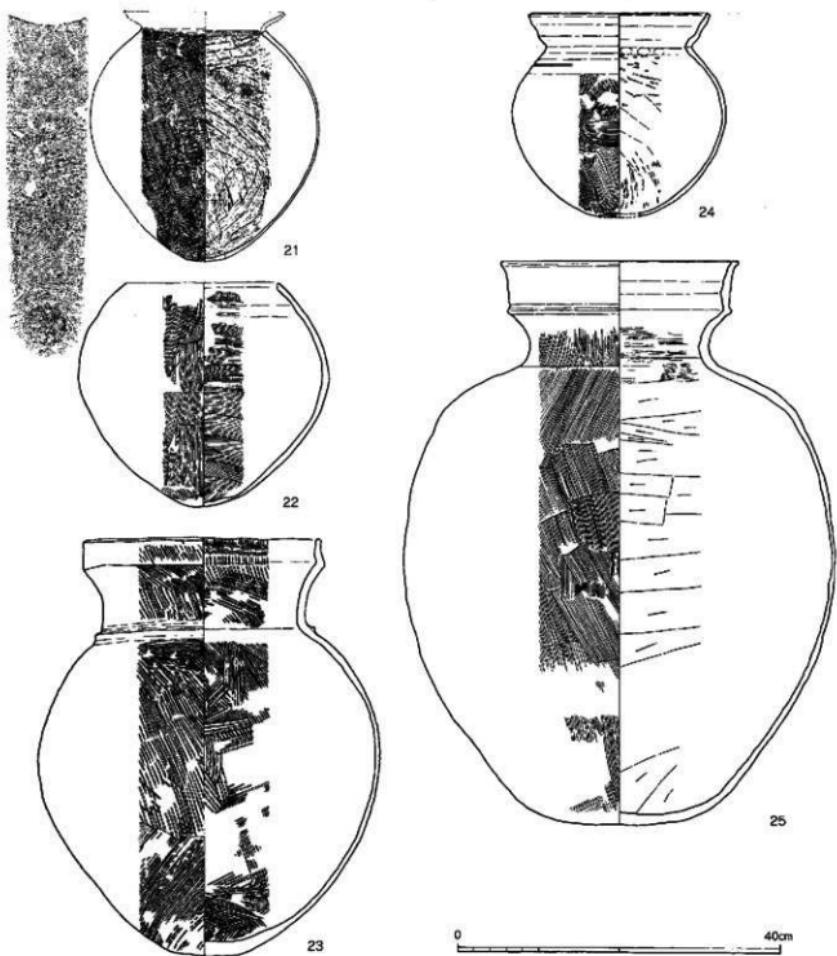
下壺内部に堆積した暗黄褐色砂を除去したところ、下壺の底部から人骨（歯16本、左側頭骨）が散乱した状態で出土した。壺棺は大きく削平を受け、破片も棺底に落ち込んでいることなどから、棺の破壊時に搅乱されたものと考えられる。人骨の観察から幼児の墓と考えられる。

ST-088壺棺墓

C-3グリッドで検出した。山陰系二重口縁壺を使用する。北側が近代の搅乱で大きく削平され、単式壺棺か複式壺棺か不明である。墓壙は現存長105cm、幅91cmを測る。土圧で一部落ち込んでいる。主軸方位はN-21°-E、埋葬角度は7°を測る。出土遺物（第24図）

21はST-056上壺の筑前型庄内壺である。口縁部は打ち欠かれる。肩部最大径28.9cm、器高29.5cmを測る。肩部付近を除く外器面に連続螺旋印を施した後、やや細かい原体のハケ、次にやや粗い原

体のハケ調整する。内器面は斜め方向のヘラ削りが施され、器壁は非常に薄い。底部は平底を残し古相だが、整った器形はやや新相（IIA期）である。胎土は比較的精良で混入物は少ない。色調浅黄橙～淡黄色を呈す。22は21の下壺で口縁部を打ち欠く畿内系二重口縁壺または広口壺の体部である。底部はレンズ状の不安定な形で、肩部最大径30.1cm、器高27.7cmを測る。外器面には縦方向のハケ調整、内器面には横方向のハケ調整を行う。胎土は概ね精良で白色細砂を多く含む。色調橙色を呈す。23はST-088壺の在来系複合口縁壺である。口径28.8cm、器高51.7cm、肩部最大径42.2cmを測る。口縁部は短く立ち上がる。外器面には成型時の叩きが部分的に認められる。叩きの後、肩部は底部から口縁部まで斜め方向の粗いハケ調整が施される。頸部には一条の突帯が貼り付けられ、周囲はナデ調整される。内器面は粗いハケ調整される。胎土に白色細砂を多く含み、色調鈍い黄褐色を呈す。24はST-062上壺の山陰系二重口縁壺で、口径21.8cm、器高25.3cm、



▲第24図 ST-056、062、088麥稭実測図(縮尺1/6)

胴部最大径26.4cmに復元される。球胴に近く、外器面底部付近は縱方向、最大径付近は横方向のハケ目が施される。胴部内器面は丁寧にヘラ削りされ器壁はやや薄い。口縁部は横ナデされるが鋭さに欠ける。胎土に白色粗砂を多く含み、色調は外器面が鈍い黄褐色を呈す。25は24の下窯で口径29.0cm、器高69.6cm、胴部最大径53.4cmに復元される山陰系二重口縁壺である。口縁部は比較的高く、やや外反する。外器

面は底部から頸部まで縦方向のハケ目調整で横ハケを欠く。内器面胴部下半は横方向のヘラ削りが施され、器壁は薄い。口縁部は横ナデされる。胎土に白色粗砂を多く含み、色調は外器面が鈍い黄褐色、内器面が灰白色を呈す。

出土遺物から、ST-056はIIA期、ST-062はIII期古相、ST-088はIIA期の所産と考えられる。

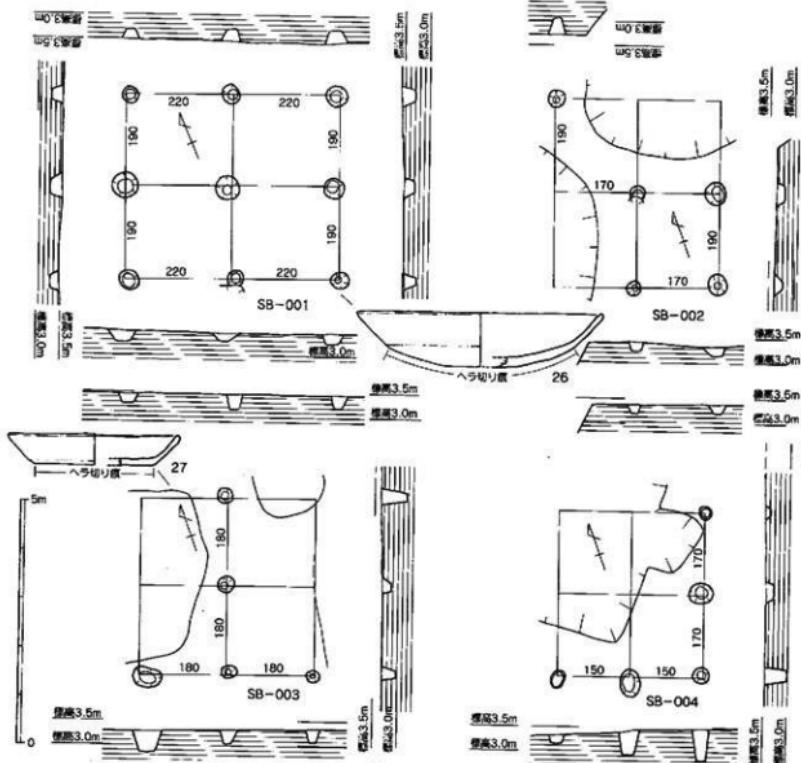
3 平安時代から鎌倉時代の遺構と遺物

氣崎宮創建後の10世紀前半から11世紀中頃に至る時期の遺構は、現在のところ、同宮の南東側に近接する狭い範囲に限定し確認されている。本調査区でも当該期の遺構を確認することができた。中でも、平安期の遺構と考えられる縦柱建物跡や方形窓穴が集中的に検出されており、特殊な機能が想定される。

(1) 掘立柱建物跡 (図25、26)

掘立柱建物は4棟復元している。何れも2間×2間の縦柱建物で、倉庫としての機能が考えられる。但し、後世の遺構群と重複しており、1棟を除いて全容が不明確であるが、柱穴の配列等から縦柱建物である可能性が高いものと判断した。また、遺構の

遺存状況が比較的良好な調査区北半でも、柱穴が検出されたのはこれら建物群の周辺に集中している。建物は東西棟1棟、南北棟3棟からなり、主軸偏差に一定の繋まりがあり、後述する方形窓穴群とともに一定の規格性が窺える。また、現在の箱崎町割の方向ともほぼ一致する。



▲第25図 SB-001～004掘立柱建物跡実測図及び出土遺物実測図 (縮尺1/100, 1/3)

SB-001掘立柱建物跡

B-2グリッドで検出した。東西棟建物で、主軸をN-23°-Eにとる。桁行2間、梁行2間の総柱建物跡で、倉庫跡と考えられる。桁行440cm、梁行380cmを測る（各柱間は図中に記載）。各柱穴の掘方は径30~50cmの円形で、深さは検出面から約30cmを測る。柱痕は確認していない。

出土遺物と時期

柱穴内から回転ヘラ切り土師器（壺・皿）、須恵器、古式土師器等の破片が少量出土している。大半は圓化に耐えない。26は底部回転ヘラ切り離しの土師器壺である。口径15.0cmに復元される。

出土遺物から、この建物は12世紀前半の所産と考えられる。

SB-002掘立柱建物跡

A-2、3グリッドにかけて検出した。南北棟建物で、主軸をN-19°-Eにとる。SK-089方形堅穴とSE-090井戸に切られ、桁行2間、梁行2間の内、4本分の柱穴が遺存しない。総柱建物跡に復元され、倉庫跡と考えられる。桁行380cm、梁行340cmを測る（各柱間は図中に記載）。各柱穴の掘方は、径25~40cmの円形で、深さは検出面から約20~30cmを測る。柱痕は確認していない。

出土遺物と時期

柱穴からの出土遺物は、土師器の細片がごく少量あるのみである。遺構の切り合い関係から12世紀前半以前の所産と考えられる。

SB-003掘立柱建物跡

A-2グリッドで検出した。南北棟建物で主軸をN-20°-Eにとる。SK-098方形堅穴に切られ、SE-095井戸より後出す。桁行2間、梁行2間の内、4本分の柱穴が遺存しない。総柱建物跡に復元され、倉庫跡と考えられる。桁行380cm、梁行360cmを測る（各柱間は図中に記載）。各柱穴の掘方は径30~60cmの円形及び梢円形で、深さは検出面から約20~50cmを測る。柱痕は確認していない。

出土遺物と時期

柱穴からの出土遺物は、回転ヘラ切り離しの土師器（高台付きも含む）、瓦の細片がある。27は底部回転ヘラ切り離しの土師器皿で、復元口径10.4cm、

器高1.8cmを測る。胎土には白色砂粒を多く含み、鳥の子色を呈す。出土遺物と遺構の切り合い関係から10世紀後半以降に建てられ、11世紀初頭には廃絶したと考えられる。

SB-004掘立柱建物跡

調査区の北東端、A-1、2グリッドにかけて検出した。南北棟建物で、主軸をN-19°-Eにとる。近現代の擾乱に切られ、桁行2間、梁行2間の内、4本分の柱穴が遺存しない。総柱建物跡に復元され、倉庫跡と考えられる。桁行340cm、梁行300cmを測る（各柱間は図中に記載）。各柱穴の掘方は、径30~55cmの円形及び梢円形で、深さは検出面から約10~65cmを測る。柱痕は確認していない。

出土遺物と時期

柱穴からの出土遺物は、回転ヘラ切り離しの土師器・瓦器・内黒土師器の細片がごく少量ある。出土遺物から12世紀前半以前の所産と考えられる。

(2) 方形堅穴（第28~38図）

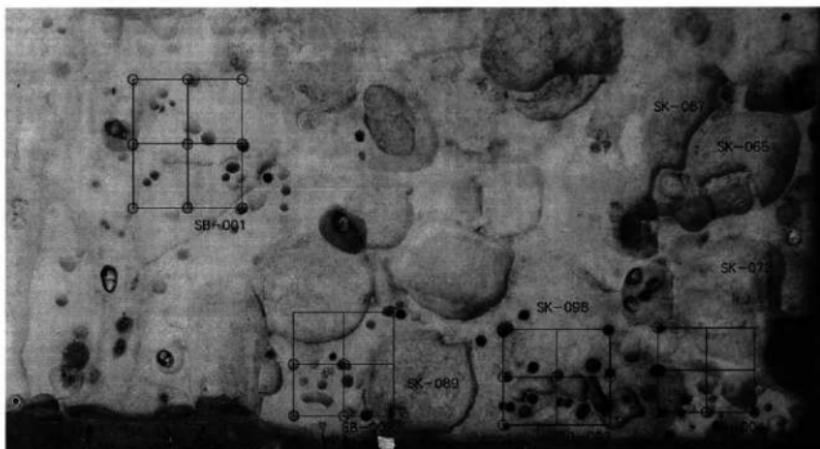
方形堅穴は7基検出した。10世紀前半と考えられる2基は調査区南端付近のB-6、C-6グリッドで検出した。また11世紀初頭から12世紀前半と考えられる5基は調査区北側のA-1~3、B-1グリッドに集中する。

SK-024方形堅穴

B-6、C-6グリッドで検出した。主軸をN-25°-Eにとる。隣接するSK-027方形堅穴を切り、SE-015井戸がこの両者を切る。掘方は不整形な方形で、東西長辺が約4.3m、南北一辺が約3.9mを測る。検出面からの深さは約0.8mを測る。床面はほぼ平坦で、東西約3.4m、南北約3.2mの不整形な方形を呈する。床面から柱穴は検出されていない。床面からやや浮いた状態で、土師器皿等が出土した。

出土遺物（図35上）

28~31は回転ヘラ切り離しの土師器皿で、完形品もしくはほぼ完形品。口径11.3~11.4cm、器高2.1~2.4cmを測る。胎土に白色砂粒を含み、鳥の子色を呈す。32、33は土師器高台付环。33は口径12.5cm、器高4.6cm、高台径7.4cmを測る。胎土に白色砂粒を含み、鳥の子色を呈す。



▲第26図 SB-001~004掘立柱建物跡とSK-065、067、072、089、095方形堅穴(東から)

SK-027方形堅穴

C-6グリッドで検出した。主軸をN-25°-Eにとる。切り合い関係は先述の他、SD-042溝に切られる。掘方は隅丸長方形を呈し、一辺は東西約2.7m、南北約2.4mを測る。検出面からの深さは約0.4mと浅い。床面はほぼ平坦で、一辺2.1mの隅丸方形を呈する。床面から柱穴は検出していない。床面からやや浮いた状態で、土師器皿等が出土した。出土遺物(図35中上)

34~38は回転ヘラ切り離しの土師器皿。口径10.8~11.6cm、2.1~2.5cm。胎土に白色砂粒を含む。39は土師器碗で復元口径15.2cm、器高6.7cm、復元底径9.2cm。高台やや高く外反。

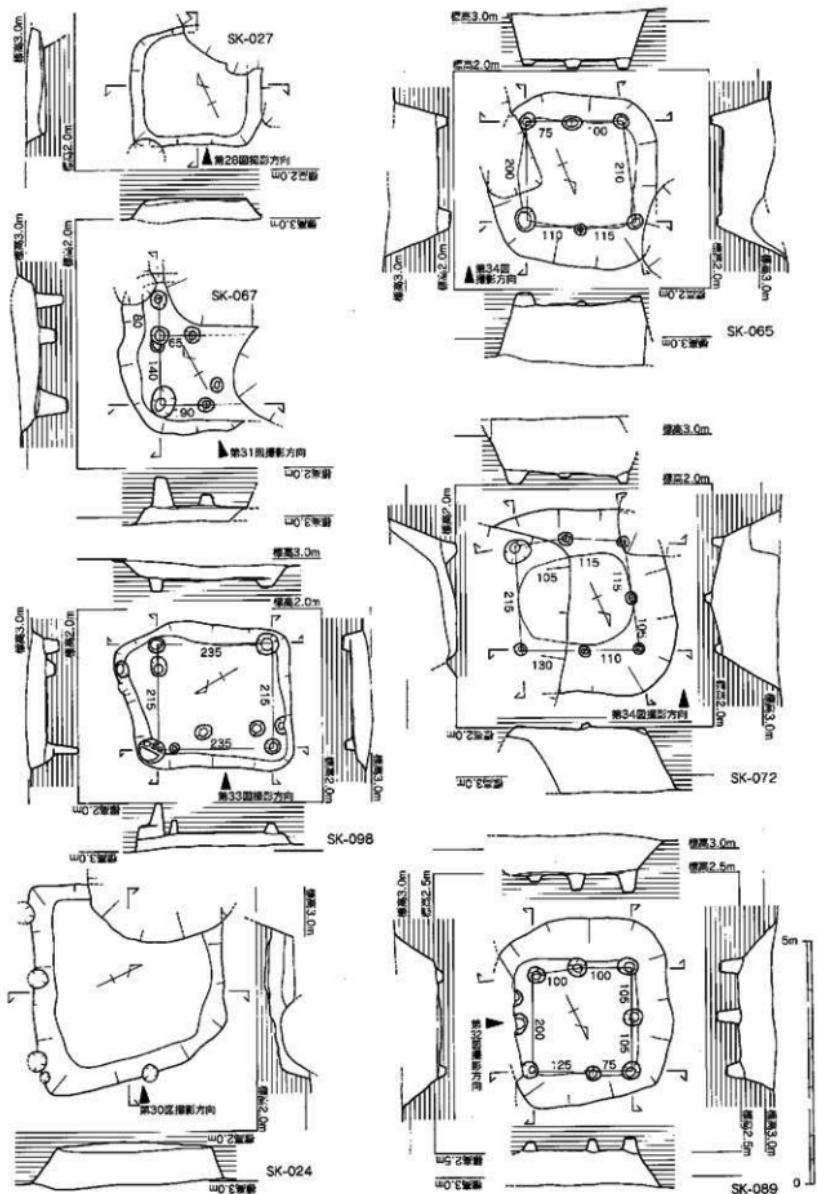
SK-065方形堅穴

B-1グリッドで検出した。主軸をN-22°-Eにとる。SR-066木棺墓・近現代の攪乱に切られ、SE-103井戸・SK-067方形土壤等を切る。掘方は隅丸方形を呈し、一辺は東西約3.4m、南北約3.5m。検出面からの深さ約1.0~1.3mを測る。床面は平坦で、東西約2.3m、南北約2.1mの隅丸方形を呈する。配置は整然としないが、床面に6本分の柱穴を配する。東西2間、北側220cm、南側195cm、南北1間、210cmを測る(各柱間は図中に記載)。

柱穴は径25~50cmの円形、横円形を呈し、床面からの深さ15~25cmを測る。尚、後述するSK-072と0.9mの間隔で並んでいる(図36)。

出土遺物(図35中下)

40、41は底部回転ヘラ切り離しの土師器皿。法量は順に復元口径9.3cm、10.1cm、器高1.3cm、1.0cm。胎土に白色砂粒、茶褐色細粒を含む。42、43は底部回転糸切り離しの土師器皿。法量は順に復元口径9.0cm、9.2cm、器高1.0cm、1.2cm。胎土に白色砂粒、茶褐色細粒を含む。44、45は土師器壺で、44は底部回転ヘラ切り離し、45は底部回転糸切り離しである。法量は順に口径15.6cm、14.2cm、器高3.3cm。高台やや高く外反する。46は白磁水注片で、胎土に黒・白色細粒を含む。47は越州窯系青磁碗の底部片で復元底径6.6cm。高台細くやや高い。見込みと体部の境界に圓線が巡る。全面に薄く施釉され、ピンホールなく発色良好。白緑を呈す。疊付に白色耐火土目が残る。48は綠釉陶器の壺片で、復元底径7.6cm。胎土は須恵質で白・黄色細粒を含む。高台は低く貼り付けられ、外器面全面施釉され、青色を呈す。



▲第27図 SK-024、027、065、067、072、089、098方形堅穴実測図(縮尺1/100)



▲第28図 SK-027方形竪穴全景(南から)



▲第29図 SK-027方形竪穴遺物出土状況(西から)



▲第30図 SK-024方形竪穴全景(東から)



▲第31図 SK-067方形竪穴全景(西から)



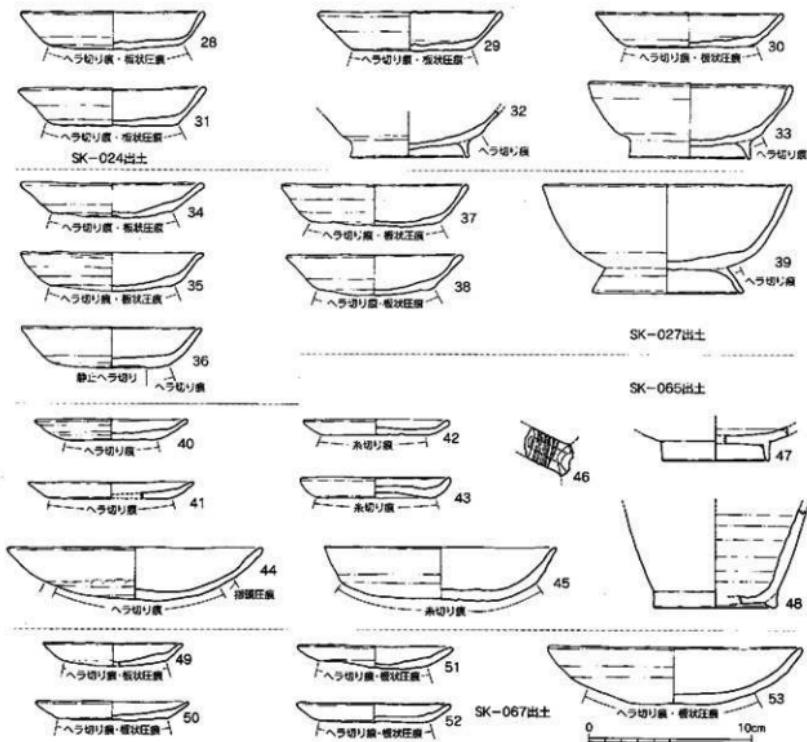
▲第32図 SK-089方形竪穴全景(東から)



▲第33図 SK-098方形竪穴全景(西から)



▲第34図 SK-065、072方形竪穴全景(北から)



▲第35図 SK-024、027、065、067方形堅穴出土遺物実測図(縮尺1/3)

SK-067方形堅穴

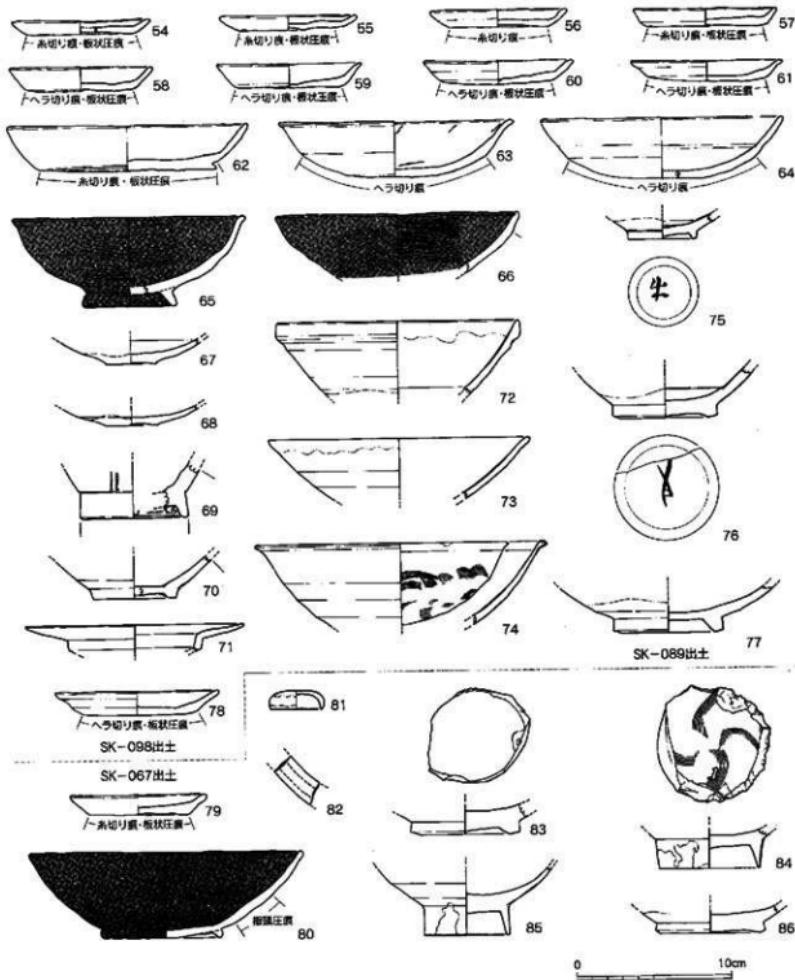
B-1グリッドで検出した。主軸をN-28°-Eにとる。切り合い関係は先述のSK-065方形堅穴、SE-103井戸、攪乱に切られる。掘方は隅丸方形を呈するものと考えられる。一辺は南北で約3.3mを測る。検出面からの深さは、約0.3~0.4mと浅い。床面は平坦で、南北2.9mの隅丸方形を呈するものと考えられる。床面から複数の柱穴が検出された。南北は2箇所で、220cmを測る(各柱間は図中に記載)。柱穴は30~60cmの円形もしくは橢円形を呈し、床面からの深さ20~60cmを測る。隅角の柱穴がやや深い。

出土遺物(図35下)

49~52は回転へら切り離しの土師器皿。口径8.5~9.7cm、1.2~1.5cm。胎土に白色砂粒を含み、色調烏の子色を呈す。53は底部回転へら切り離しの土師器環で口径15.6cm、器高3.6cmを測る。胎土に白色砂粒、茶褐色細粒含み、色調メイズを呈す。

SK-072方形堅穴

B-1グリッドで検出した。主軸をN-23°-Eにとる。2箇所の攪乱に切られる。検出面での平面形は、隅丸方形を呈すると考えられる。一辺は南北で約3.8m、検出面からの深さは約1.3mを測る。床面は平坦で、南北2.3mの隅丸方形を呈すると考



▲第36図 SK-072、089、098方形堅穴出土遺物実測図(縮尺1/3)

えられる。床面からは2×2間、7本文の柱穴が検出された（東側は1間）。南北215～220cm、東西220～240cmを測る（各柱間は図中に記載）。柱穴は25～60cmの円形もしくは梢円形を呈し、床面からの深さは10～30cmを測る。

出土遺物（図36下）

79は底部糸切り離しの土師器皿。復元口径8.8cm、器高1.3cm。80は瓦器碗で復元口径17.6cm、器高5.5cm。外器面ナデ、内器面ヘラナデを施す。ヘラ磨きされず光沢ない。81は青白磁子蓋。復元径

3.5cm、器高1.2cm。82は白磁水注の注口片。83、84は白磁碗IV、V類の底部を転用した匙杖。84の見込みには櫛描刻花文が描かれる。85、86は順に白磁碗V、IV類で底径5.5cm、6.9cm。

SK-089方形堅穴

A-2、3グリッドで検出した。主軸をN-25°-Eにとる。切り合い関係はSE-095井戸、SB-002掘立柱建物跡を切る。掘方は隅丸方形を呈すると考えられる。一辺は南北で約3.5~3.8m、検出面からの深さ約0.7~0.8mを測る。床面は平坦で、東西2.5m、南北2.3mの隅丸方形を呈する。床面から2×2間分の柱穴を検出した。東西200cm、南北210cm(東側は200cm)を測る(各柱間は図中に記載)。出土遺物(図36上)

54~61は土師器皿。口径8.8~9.9cm、器高0.9~1.6cmを測る。62~64は土師器坏。口径15.1~15.6cm、器高3.6~3.9cmを測る。65は瓦器碗。口径15.0cm、器高5.7cm。66は捕葉型瓦器碗の口縁部片で、復元口径15.8cm。67、68は白磁皿IV-1類。69は越州窯系青磁碗もしくは水注片。胎土に黒色細粒含み、高台に白色耐火土目残る。色調セージグリーンを呈す。70は高麗青磁碗。胎土に茶褐色・白色細砂含む。内・外器面全面施釉され、ピンホールなく発色良好。灰みの黄緑色を呈す。71は越州窯系青磁托で復元口径14.0cm。羽端部に非常に浅い沈線巡る。胎土精良で、色調ベージュを呈す。72~77は白磁碗で、順にIV、V、V-4-b、VI、VII、II類と考えられる。75、76には底部に墨書きがある。SK-098方形堅穴

A-2グリッドで検出した。主軸をN-29°-Eにとる。切り合い関係はSE-095井戸を切る。掘方はやや不整形な隅丸長方形を呈する。一辺の長さは東西で約2.9m、南北で約3.2mを測り、検出面からの深さは約0.25~0.4mと浅い。床面は平坦で、東西2.4m、南北2.8mの隅丸長方形を呈する。床面から1×1間の柱穴を検出した。東西215cm、南北235cmを測る。各柱穴は30~55cmの円形を呈し、床面からの深さは15~50cmを測る。

出土遺物(図36下)

78は底部回転ヘラ切り離しの土師器皿。口径

10.5cm、器高1.6cmを測るほぼ完形品。この他の出土遺物は図化に耐えない。

(3) 井戸

井戸は確実に判るもので都合10基を検出した。この内、SE-031、097井戸は半分が調査区外に延びる。また、SE-039、082井戸は建物基礎撤去時の擾乱が激しく、底部付近が遺存するのみであった。SE-015井戸

B-6グリッドで検出した。切り合い関係は、SK-024・027方形堅穴、SE-021井戸を切り、近現代の擾乱に切られる。検出面での掘方は梢円形を呈し、長径3.5m、短径3.15mを測る。検出面から深さ約1.6m(標高約1.3m)のところで、長径1.9m、短径1.5mを測る梢円形の平坦面を設ける。この面のほぼ中央を更に掘り込み、結物の木桶を使用したと考えられる井筒を据えている。井筒は検出時には長径84cm、短径74cmを測る梢円形を呈しており、土圧により変形したものと考えられる。井戸枠は平均幅11.48cmの板目板を21枚使用している。上方ほど幅が狭くなることから、木桶の外枠を倒置して井戸枠に転用したと考えられる。板の観察から、木桶の最大径は76.8cm程度に復元される。標高約1.2mで溝水し、底部の観察が不可能であった。井戸枠の長さから、標高0.4m付近が底面と推定される。出土遺物(図44上)

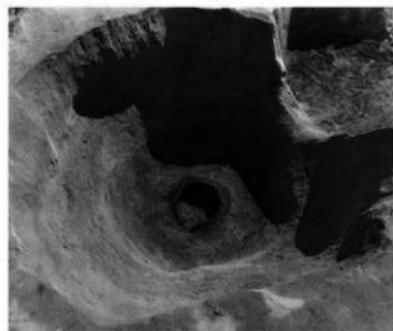
87は越州窯系青磁碗片。胎土は概ね精良で色調は灰みの緑黄色を呈す。88は底部回転ヘラ切り離しの土師器坏。口径14.6cm、器高2.8cmを測る。

SE-021井戸

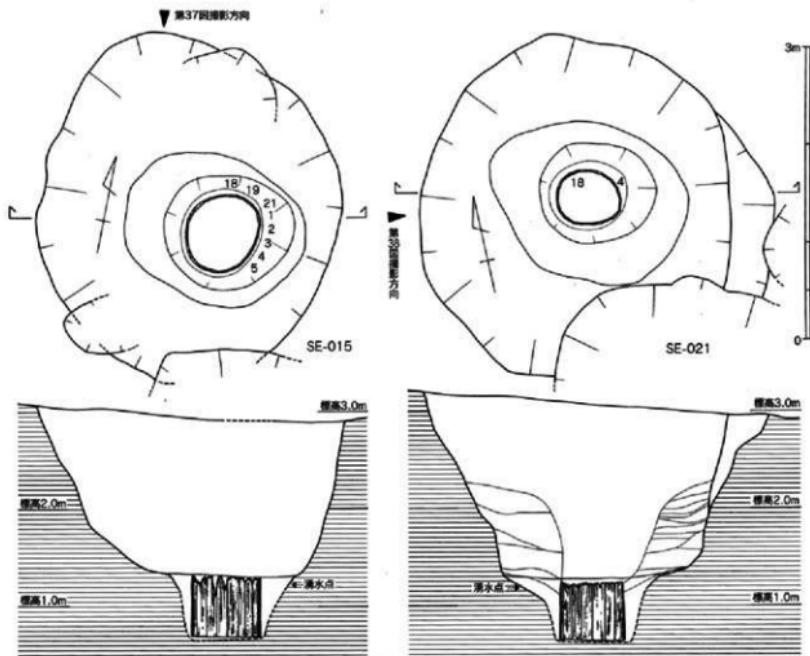
B-6グリッドで検出した。切り合い関係は、SE-015井戸と近現代の擾乱に切られる。検出面での掘方は梢円形を呈すると考えられ、長径3.5m、短径3.15mを測る。検出面での状況と土層観察から、前代の井戸を掘削し直したものと考えられる。検出面から底部までは、井戸廃棄後に黒・暗灰・暗茶褐色砂質土が堆積している。また標高約2.2m以下では、井戸枠の裏込めが残っており、黒・暗灰・暗茶褐色砂質土が互層をなしていた。検出面から深さ約1.7m(標高約1.3m)のところで、長径2.1m、短



▲第37図 SE-015井戸全景(南から)



▲第38図 SE-021井戸全景(西から)

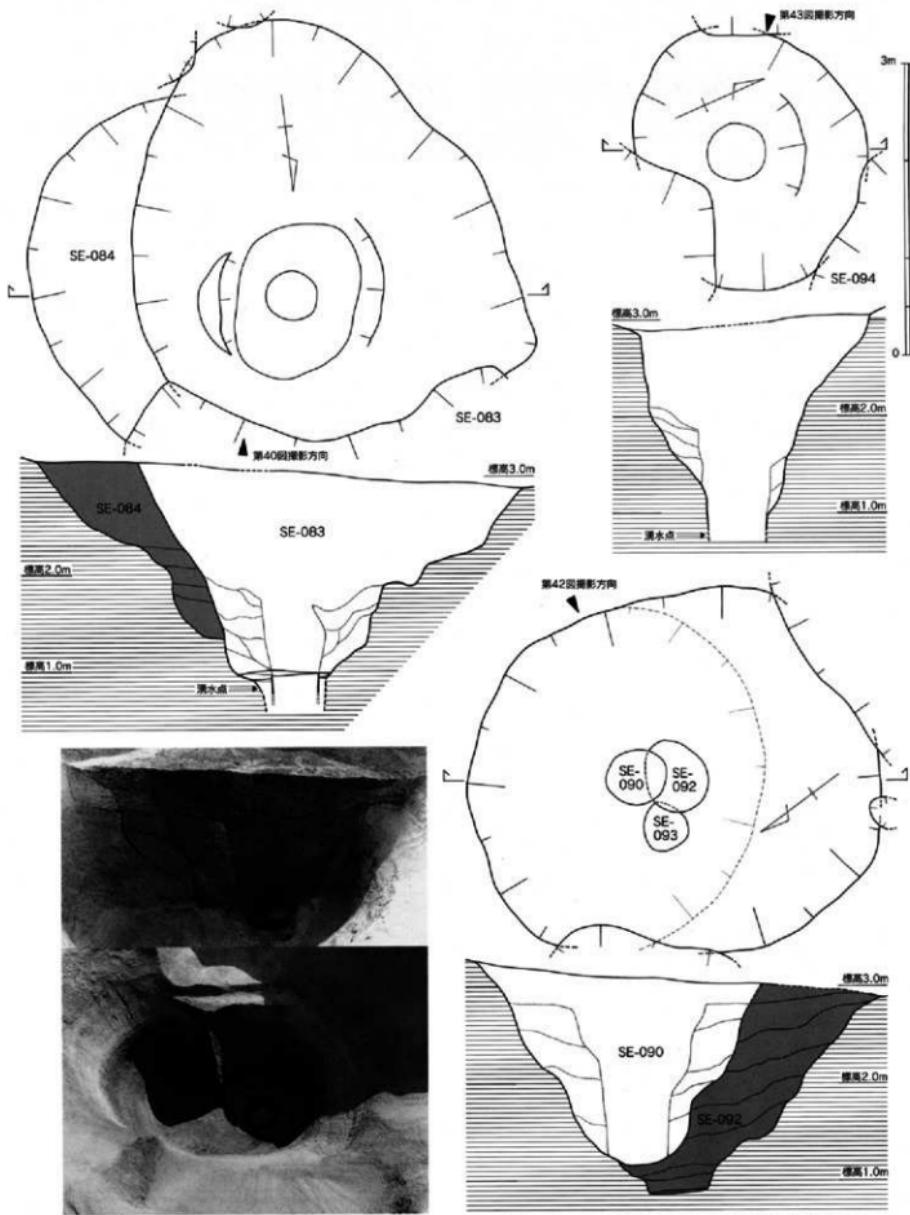


▲第39図 SE-015、021井戸実測図(縮尺1/50)

第1表 井戸枠観察表

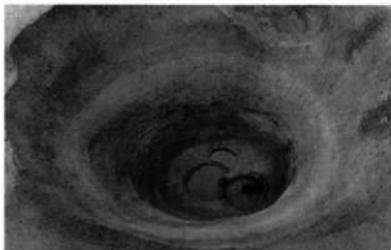
番号	残存長	最大径	外周幅	内周幅	材質	備考	番号	残存長	最大径	外周幅	内周幅	材質	備考
SE-015													
1	49.6	3.1	12.6	11.6	杉		5	40.5	3	11.6	10.5	杉	上方幅狭くなる
2	44.2	3.1	11.7	11	杉		18	51.4	2.7	11.5	10.7	杉	
3	52.1	2.8	11.6	10.8	杉	上方幅狭くなる	19	46	2.9	10.6	9.9	杉	上方幅狭くなる
4	47.2	2.8	10.2	9.2	杉	上方幅狭くなる	21	34.1	2.2	12.0	12.2	杉	
SE-021													
4	33.7	1.4	8.9	8.4	杉	遺存状態不良	18	31.1	1.1	9.1	8.9	杉	遺存状態不良

*計測値の単位はcm。厚さ及び幅は下端部で計測。

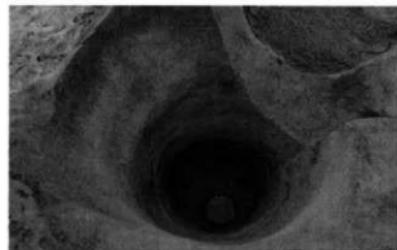


▲第40図 SE-083, 084井戸土層(図上)
及び全景(図下、北から)

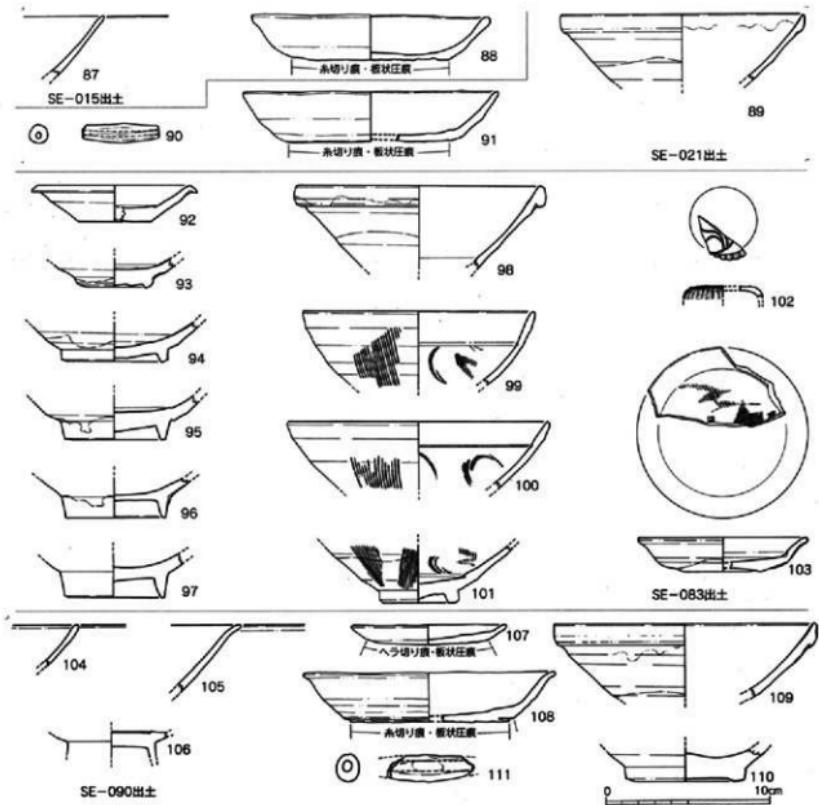
▲第41図 SE-083, 090, 094井戸実測図(縮尺1/50)



▲第42図 SE-090井戸全景(東から)



▲第43図 SE-094井戸全景(西から)



▲第44図 SE-015、021、083、090井戸出土遺物実測図(縮尺1/3)

径1.6mを測る梢円形の平坦面を設ける。この面のほぼ中央を更に掘り込み、結構の木桶を使用したと考えられる井筒を据えている。井筒は検出時には長径67cm、短径57cmを測る梢円形を呈しておらず、土圧により変形したものと考えられる。井戸枠は平均幅9.0cmの板目板を18枚使用している。板の観察か

ら、木桶の最大径は51.6cm程度に復元される。標高約1.1mで湧水し、底部の観察が不可能であったが、井戸枠の長さから、標高0.6m付近が底面と推定される。

出土遺物(第44図上段)

89は白磁碗IV類で、口径14.8cmに復元される。

施釉薄く黄みの白を呈す。90は完形の管状土錐で、長さ4.6cm、径1.2cm、孔径0.3~4cmを測る。鈍い橙色を呈す。91は底部回転糸切り離しの土師器坏。復元口径15.6cm、器高3.1cmを測る。

SE-083井戸

B-2グリッドで検出した。切り合い関係は、近現代の擾乱に切られる。検出面での掘方は不整形な梢円形を呈し、長径4.4m以上、短径3.65mを測る。

土層観察では、検出面から深さ約1.4m（標高約1.8m）まで井戸崩壊後に埋没した暗・灰褐色砂質土が堆積しており、以下、井戸枠内の埋土と裏込め土が遺存していた。井戸枠部分には木質の腐食土が高さ20cm以上、両端の幅48cmで確認でき、内側には灰・黒褐色砂質土が堆積していた。また、裏込めは暗黄・茶・灰褐色の互層をなす。検出面から約2.0m（標高約1.0~1.2m）のところで、径約1.4mを測る円形の平坦面を設ける。この面で長径53cm、短径49cmの円形の井筒痕と考えられる木質腐食部を確認した。標高約0.8mで湧水し（9月27日、同年9月は乾季）底部の観察が不可能であった。

出土遺物（図44中段）

92、93は白磁皿。94~98は白磁碗片で、順にⅣ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅴ、Ⅳ類。99~101は同安窯系青磁碗I-1・b類で、外器面に櫛描文、99、101は内器面に「之」字形櫛描文、100はヘラ描文を施す。102は青白磁合子で、甲に草花文の陽刻、側面に菊弁を配する。薄く施釉され緑みの明灰色を呈す。103は同安窯系青磁皿I-1・b類で見込みに「之」字形櫛描文を施す。

SE-090、092、093井戸

A-3、B-2、3グリッドで検出した。切り合い関係は、近現代の擾乱に切られる。底面の観察から3基の井戸の掘り替えがあつたものと考えられるが、検出面では確認できなかった。土層断面観察から、SE-090の掘り方は直径3m程度の円形もしくは梢円形を呈するものと考えられる。SE-090掘り方は、土層断面観察から標高2.0m付近で段が付き、そこから更に井戸枠の下部を掘え付けるための掘り込みを行う。井戸の底は標高1.15mで検出し直径0.6m程度の梢円形を呈するが、湧水はなかった。井戸枠

内部の底面には、有機質腐植土層が確認された。井戸枠の裏込めには暗褐色砂質土が使用される。また、SE-092は、標高1.4m付近で直径1.7m程度の平坦面を造出し、そこから井戸枠を据え付けるための掘り込みを行う。底面は、標高0.95mで検出し、直径0.6m程度の梢円形を呈する。底部には有機質腐植土が堆積していた。

出土遺物（図44下）

104、105は越州窯系青磁碗片で、胎土には白色細砂を含む。色調はページュを呈す。106は越州窯系青磁托片で、胎土に黒色細粒を含む。色調はページュを呈す。107、108は土師器皿、坏で、色調は順に鳥の子、メイズを呈す。109、110は白磁碗IV類。111は管状土錐で、長径1.7cm、短径1.4cm、孔径0.6cmを測る。胎土に白色細砂を含み、色調鳥の子～灰色を呈す。

SE-095井戸

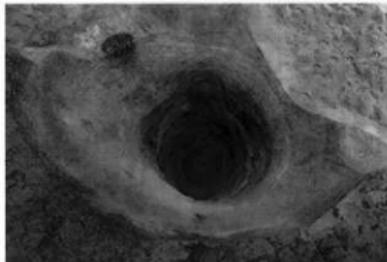
A-2グリッドで検出した。切り合い関係は、SK-089、098方形竪穴、SB-003掘立柱建物、近現代の擾乱に切られる。検出面での掘方は、長径3.0m、短径2.65mを測る梢円形を呈するものと考えられる。底面は標高0.85m付近で検出し、長径0.65、短径0.55mを測る梢円形を呈する。

出土遺物（第47図上）

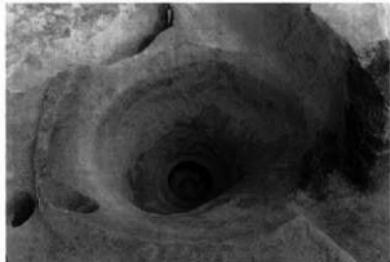
112は越州窯系青磁碗I-2類で、胎土は概ね精良である。色調はページュを呈す。見込みの白色耐火土は8~9箇所に復元でき、丁寧には研ぎ出している。113~117は高台付皿で、胎土に白色砂粒、茶褐色細粒を含む。色調はメイズ～橙色、117は丁字色を呈す。118~120は土師器坏で、胎土に白色砂粒を多く含む。色調は118がメイズ、他は鳥の子を呈す。121、122は土師器高台付坏で、胎土に白色細砂・黒色細粒を含む。色調は鳥の子を呈す。内器面に板状工具によるナデ痕がある。

SE-103井戸

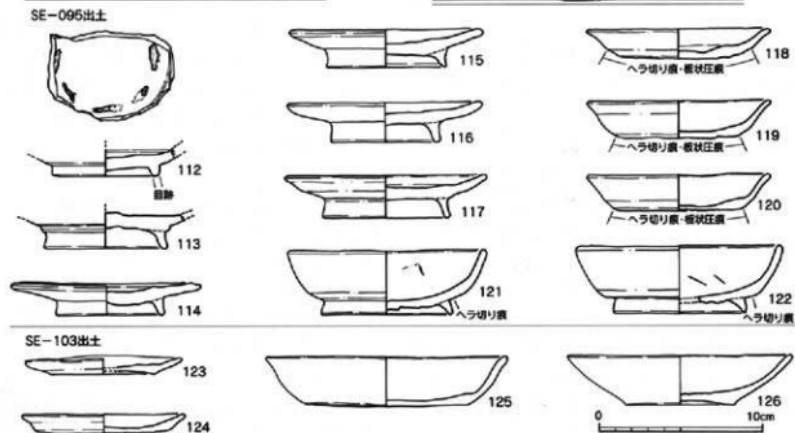
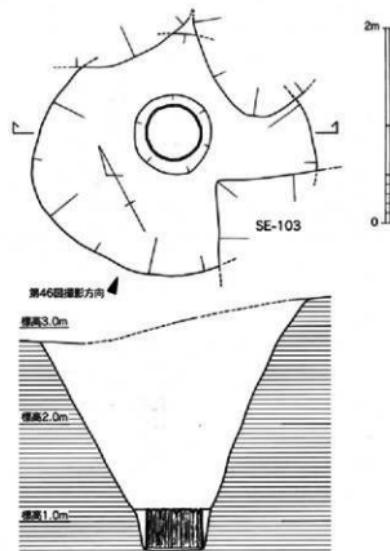
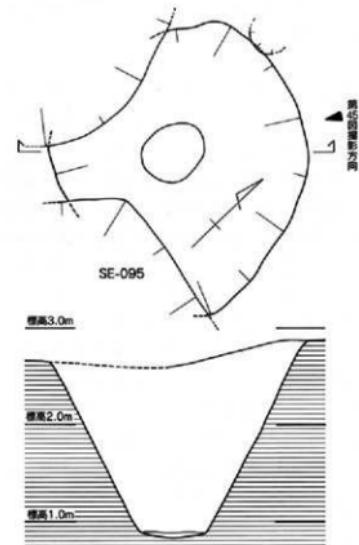
B-1、2グリッドで検出した。切り合い関係は、SK-067方形竪穴を切り、SK-065方形竪穴、近現代の擾乱に切られる。検出面での掘方は、長径2.9m、短径2.45mを測る梢円形を呈す。掘り方は逆円錐形を呈すると考えられる。検出面から約2.0m



▲第45図 SE-095井戸全景（北から）



▲第46図 SE-103井戸全景（南から）



▲第47図 SE-095、103井戸及び出土遺物実測図（縮尺1/50、1/3）

(標高約1.1m)で、井戸枠を据え付けるための掘り込みを行う。井戸枠は遺存状況が良好でないが、幅10cm前後の板を16枚組み合わせた結構物を転用している。木桶は直径58cmを測る。底部は直径0.6mの円形を呈し、標高0.7mを測った。

出土遺物 (第47図下)

123、124は土師器皿で、色調は順にメイズ、鳥の子を呈す。125、126は土師器皿で、色調は順に鳥の子、サンライズイエローを呈す。126は底径の比率が小さく、体部は上方でやや内湾気味に開く。

(4) 溝

SD-046 (第48図)

B-3、C-3グリッドで検出した。切り合い関係はSO-056円形周溝墓を切り、近・現代の擾乱に切られる。主軸はN-65°-Wを測る。調査区東側に延び、長さ10.2mを検出した。幅は広い箇所で1.6m、狭い箇所で0.4m、深さ0.3mを測る。

出土遺物 (第48図下)

127は白磁碗II類、128、129は白磁碗V類、128は龍泉窯系青磁碗のいずれも底部片である。その他、回転糸切り離しの土師器皿、坏等があるが固化に耐えない。

出土遺物から、SD-046溝の年代は13世紀後半と考えられる。

(5) 墓

中世墓は7基を検出した。いずれも北頭位を採り、調査区の北西側に集中する。明らかに木棺墓と認定できたSR-044、066以外には遺構号にSXを用

いた。尚、出土人骨に関しては付論で詳述する。

SX-044 (第49図、51図上)

調査区の最も北西側、B-1、C-1グリッドにかけて検出した。検出面での墓壙の平面形は、長さ1.57m×幅0.98mを測る隅丸長方形を呈し、主軸はN-4°-Eを測る。検出面からの深さは約0.2mであるが、遺構検出時に既に人骨が検出されていたので、本来はもっと深かったものと考えられる。墓壙内から鉄釘7点が出土しており、木棺墓と考えられる。釘は原位置を保ったものが少なく、木棺の形態は復元できないが、幅52cm程度と考えられる。また、鉄釘の観察から棺材には、厚2.3cm程度の板を使用していると考えられる。人骨は北頭位、右側臥屈肢で埋葬されていた。人骨の観察から、被葬者は熟年女性と考えられる。調査時には副葬品が確認できなかったが、検出時で既に棺底板部に達したため、副葬品の有無は明確にできない。

出土遺物 (第56図)

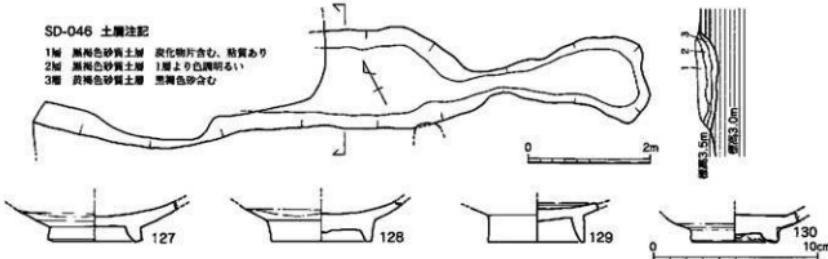
129~135は鉄釘である。法量等は表に示した。この他、土師器の細片があるが固化に耐えない。

SX-045 (第50図、51図下)

C-1グリッドで検出した。検出面での墓壙の平面形は、長さ1.69m×幅0.98mを測る隅丸長方形を呈し、主軸はN-4°-Eを測る。検出面からの深さは約0.45mである。墓壙内から鉄釘は出土しておらず、土壙墓と考えられる。人骨は北頭位で、右側臥屈肢で埋葬されたと推測される。人骨の観察から、被葬者は熟年の男性の可能性が考えられる。

出土遺物

土師器の細片があるのみで、固化に耐えない。

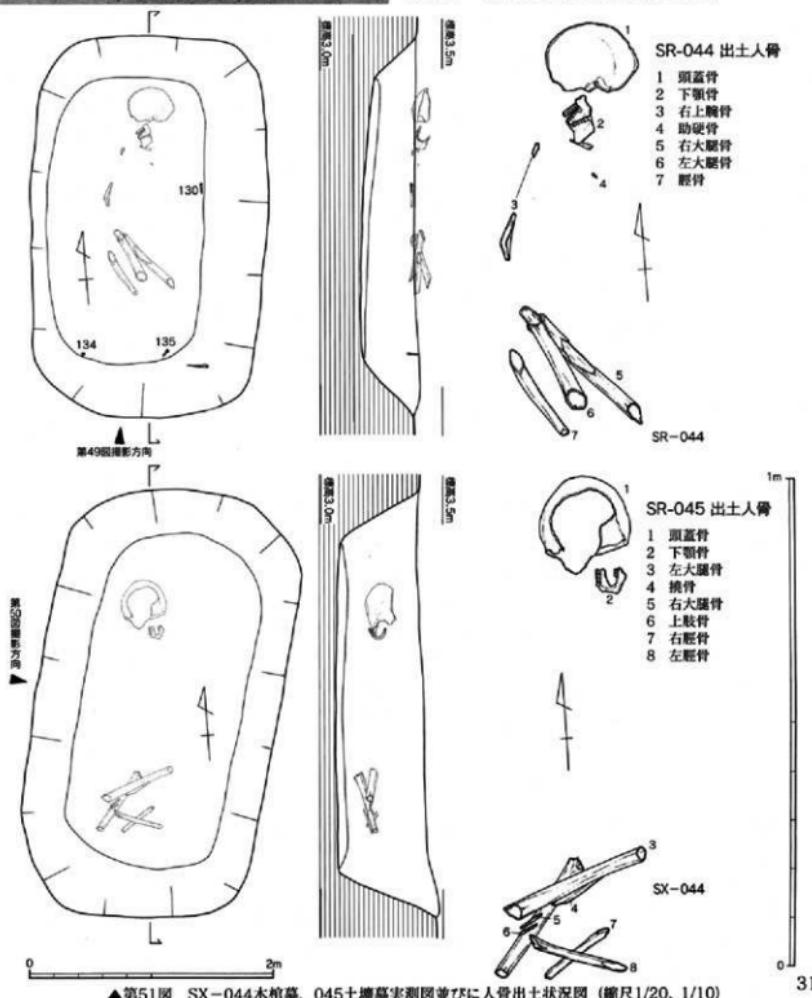


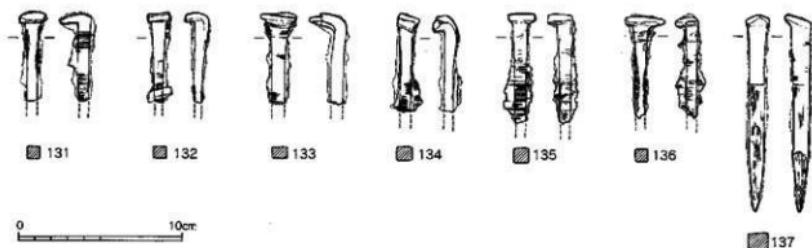
▲第48図 SD-046溝及び土層断面、出土遺物実測図 (縮尺1/80、1/3)



▲第49図 SX-044木棺墓検出状況（南から）

◀第50図 SX-045土壤墓検出状況（西から）

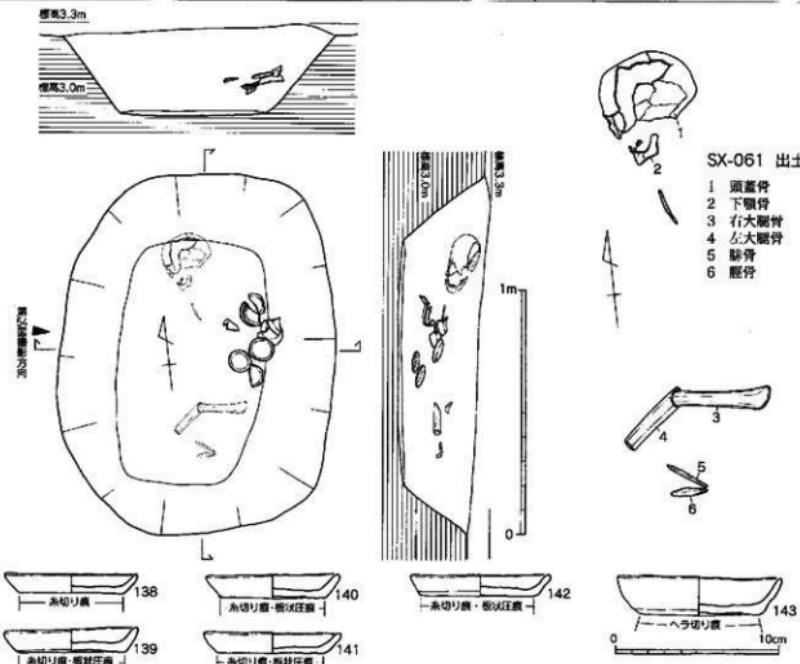




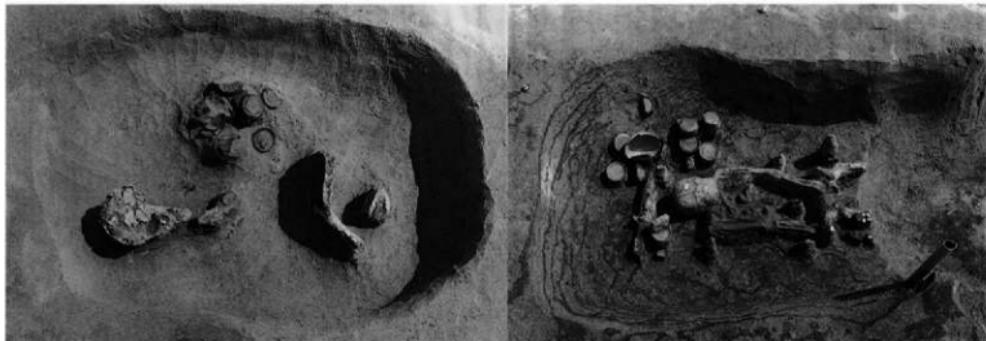
▲第52図 SX-044木積墓出土鉄釘尖端図 (縮尺1/2)

第2表 SX-044出土鐵釘観察表

探査番号	器種	全長cm (残存長)	断面幅 (推定)cm	頭部形態	頭部最大幅cm	木目方向		棺材厚 cm	備考
						上	下		
129	鉄釘	(3.7)	0.5×0.5	四角	1.1	横・垂直	横・垂直	不明	やや長く折り曲げ端部幅や細い
130		(3.7)	0.5×0.5	四角	0.9	横・平行	横・平行	不明	頭部折り曲げ
131		(3.8)	0.6×0.4	四角	1.4	横・平行	横・平行	不明	頭端部幅広い
132		(4.0)	0.6×0.5	四角	0.9	遺存せず	横・平行	不明	頭部巻き込み? 打込時に割れる?
133		(4.5)	0.6×0.6	四角	1.1	横・平行	横・平行	不明	
134		(4.3)	0.5×0.5	不整形	1.6	横・平行	横・垂直	0.8?	上下で木質方向に明確な差あり
135		8.1	0.7×0.7	不整形な三角	1	横・垂直	縦	2.4	頭部打山後、完全に曲げられず

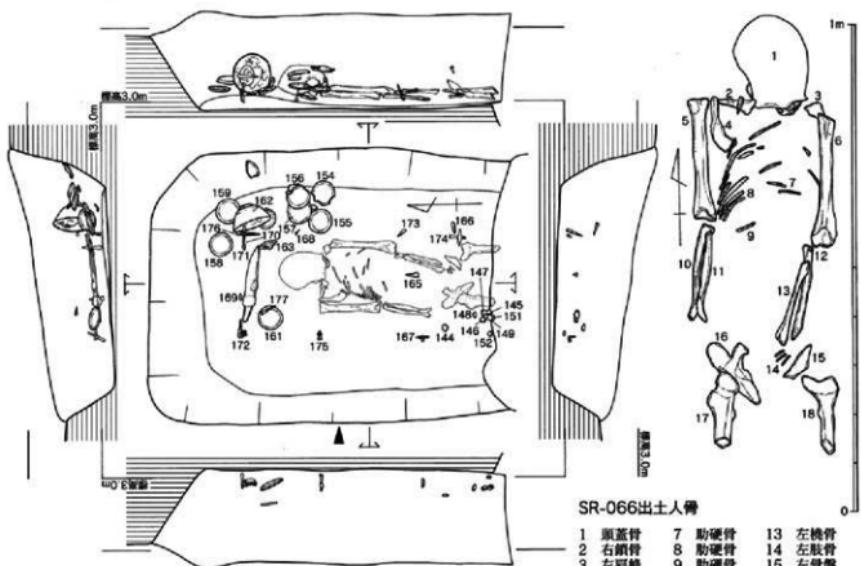


▲第53図 SX-061墓人骨遺物出土状況、及び出土遺物実測図 (縮尺1/20、1/10、1/3)



▲第54図 SX-061墓検出状況（西から）

▲第55図 SR-066木棺墓検出状況（西から）



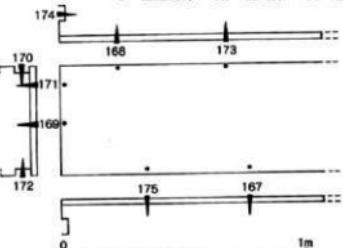
SX-061 (第53、54図)

B-1グリッドで検出した。検出面での墓壙の平面形は、長さ1.48m×幅1.13mを測る隅丸長方形を呈し、主軸はN-7°-Eを測る。検出面からの深さは約0.3~0.35mである。墓壙内から鉄釘は出土しておらず土壙墓と考えられる。人骨は北頭位で、右側臥屈肢で埋葬されたと推測される。人骨は熟年のものであるが、性別判定は不可能だった。

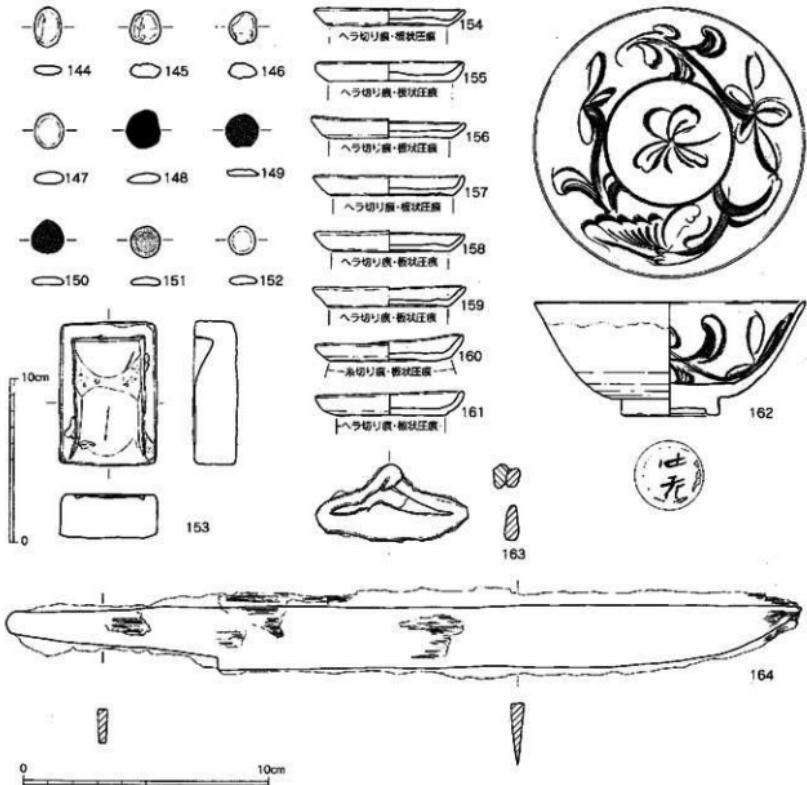
人骨の左側に土師器皿が6枚埋葬されていた。

出土遺物（第53図）

図示したものはいずれも土師器皿である。138~



▲第56図 SR-066木棺墓人骨遺物出土状況、
及び木棺想定復元図（縮尺1/20, 1/10）



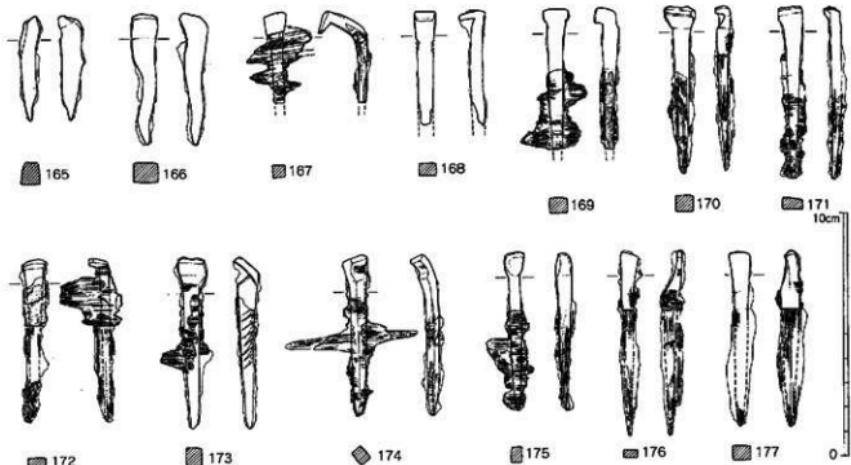
▲第57図 SR-066木棺墓出土遺物（副葬品）実測図（縮尺1/3, 1/2）

142は底部回転糸切りで、口径8.1~8.5cm、器高1.2~1.5cmを測る。胎土に白色砂粒、茶褐色細粒を含み、色調はサンライズイエローを呈す。143は底部回転ヘラ切り離しで、口径10.0cm、器高2.4cmを測る。胎土に白色砂粒を含み、色調は丁字色を呈す。
SR-066 (第55、56図)

A-1からB-1グリッドにかけて検出した木棺墓である。中世墓が集中する調査区北西隅からや東に離れている。墓壙の南半が攪乱に切られている。墓壙は残存長1.5m×幅1.13mを測る隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは約0.2~0.4mを測る。墓壙の主軸はN-2°-Eを測り、鉄釘の出土位置

から復元した木棺の主軸はN-4°-Eを測る。木棺は長さ108cm以上、幅46cmの長方形で、棺材の厚さ2.4cmに復元できる。底板の上に側板を置き、小口板を挟み込む構造であったと考えられる。

被葬者は熟年男性で、北頭位、仰臥伸展で埋葬されたと考えられる。大腿骨の下半と下腿部は攪乱により遺存しない。棺内には頭位付近に刀子1本、火打ち金1点、土師器皿1枚を、右大腿骨付近に碁石9個、陶製硯1面を副葬していた（硯は検出時に誤って取り上げたため図化できていない）。また、棺外の頭位方向側に龍泉窯系青磁碗1-2・b類1口、土師器皿7枚を供献していた。



▲第58図 SR-066木棺墓出土遺物(鉄釘)実測図(縮尺1/2)

第3表 SR-066出土鉄釘観察表

掛図番号	器種	全長cm (残存長)	断面幅 (推定)cm	頭部形態	頭部最大幅cm	木口方向		棺材厚 cm	備考
						上	下		
163	鉄釘	4.3	0.8×0.9	尖頭	0.6	遺存せず	遺存せず	不明	打ち込み時に曲がる?
164		5.4	1.0×0.8	四角	1	遺存せず	遺存せず	不明	打ち込み時に曲がる?
165		(4.8)	0.5×0.5	四角	0.9	横・平行	—	不明	頭部打ち出し折り曲げ
166		(4.7)	0.7×0.6	四角	0.8	遺存せず	—	不明	頭部打ち出し折り曲げ
167		(5.8)	0.7×0.6	四角	0.9	遺存せず	横・平行	不明	頭部先端打ち出さず
168		6.9	0.7×0.6	四角	0.8	横・垂直	縦	1.7	頭部打ち出し折り曲げ
169		7	0.8×0.5	作り出さず	1	横・平行?	横・平行	不明	頭部打ち出し側面に折り曲げ
170		6.7	0.7×0.4	箭鉤型	0.9	横・垂直	縦	2.4	頭部打ち出し折り曲げ
171		7	0.6×0.8	四角	1.1	横・平行	不明	不明	頭部打ち出しが完全に折り曲げず
172		6.6	0.5×0.6	作り出さず	0.9	横・平行	横・平行	不明	頭部打ち出しが殆ど折り曲げず
173		6.5	0.4×0.6	作り出さず	0.8	遺存せず	横・平行	不明	頭部打ち出しが、折り曲げず
174		7.6	0.5×0.3	作り出さず	0.7	横・垂直	縦	1.7	頭部打ち出しが、折り曲げず
175		7.2	0.7×0.6	作り出さず	0.9	横・垂直	縦	不明	頭部打ち出しが、折り曲げず

出土遺物 (第57、58図)

144~152は碁石である。高さ1.7~2.4cm、幅1.6~2.0cm、厚さ0.4~0.9cmを測る楕円形を呈し、不整形なものが多い。144~147までは石英製、148は蛇紋岩製、149は砂岩製、150は火成岩製、151、152は陶製である。153は陶製碗である。長さ8.8cm、幅5.9cm、厚さ2.6cmを測る。胎土は白色砂粒を含み、焼成は良好で茶褐色を呈する。海はヘラ状工具で削り出され、陸には使用痕が観察される。154~161は土師器皿で口径9.1~9.5cm、器高1.0~1.6cmを測る。色調は154のみ烏の子、他はメイ

ズを呈す。162は龍泉窯系青磁碗I-1-b類である。高台内に茶褐色耐火土層がある。色調セージグリーンを呈す。163は鉄製火打ち金で長さ6.2cm、幅3.1cmを測る。164は鉄製短刀で全長32.6cm、刀身長23.9cm、同元幅2.6cm、同厚0.5cm、茎部長8.7cm、同口幅2.1cm、同尻幅0.9cm、同厚0.4cmを測る。切先はフクラ、片闇で栗尻である。全体に刀装具の木質が僅かに残る。165~177は木棺に使用したと考えられる鉄釘である。詳細は第3表に示す。

SX-081 (第59、60図)

B-1、C-1グリッドで検出した。SR-045土壤

墓及び近・現代の擾乱に切られる。検出面での墓壙の平面形は、長さ1.70m以上×幅0.98mを測る隅丸長方形を呈するものと考えられる。主軸はN-19°-Eを測る。検出面からの深さは約0.2~0.35mである。墓壙内から鉄釘は出土しておらず、土壙墓であった可能性が高いと考えられる。人骨は墓壙の北側で成年の上下顎が検出された。また、両側の擾乱部分では別個体の歯列が回収された。特別、埋葬頭位及び姿勢は不明である。

出土遺物（第60図下）

墓壙内から土師器壺1点と高台付壺の底部1点が出土した。178は底部回転糸切り離しの土師器壺で、口径11.8cm、器高2.6cmを測る。胎土に白色砂粒を含み色調は淡い橙褐色を呈す。179は土師器高台付壺もしくは碗の底部片である。胎土は概ね精良で白色砂粒を少量含む。底部に回転ヘラ切り離しの痕跡が認められる。色調は純い橙褐色を呈す。

出土遺物から、SX-081の年代は、13世紀後半代と考えられる。

SX-101（第61図、第63図上）

C-2グリッドで検出した。SD-085に切られ、墓壙上半と人骨が削平される。検出面での墓壙は、長さ1.47m×幅0.77mを測る不整形な平面形を呈するが、削平によるものであり、元来の形状は不明である。検出面からの深さは約0.4mである。墓壙内から鉄釘は出土しておらず、土壙墓であった可能性が高いと考えられる。人骨は北頭位で、左側臥屈肢で埋葬されている。人骨の観察から被葬者は、熟年の男性である。

出土遺物

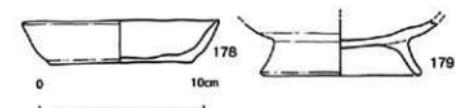
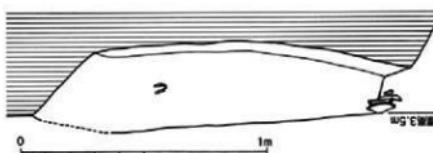
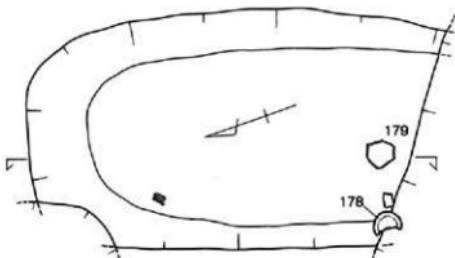
土師器の細片があるのみで、図化に耐えない。

SX-102（第62図、第63図下）

C-2グリッドで検出した。SD-085に切られ、墓壙上半と頭蓋骨右半が削平される。西端は調査区外である。検出面での墓壙の平面形は、長さ1.21m×幅0.75m程度の隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは約0.3mである。墓壙内から鉄釘は出土しておらず、土壙墓であった可能性が高いと考えられる。人骨は北頭位で、左側臥屈肢で埋葬されている。人骨の観察から被葬者は、成年の男性と考え



▲第59図 SX-081土壙墓検出状況（西から）



▲第60図 SX-081土壙墓人骨・遺物出土状況、及び出土遺物実測図（縮尺1/20, 1/3）

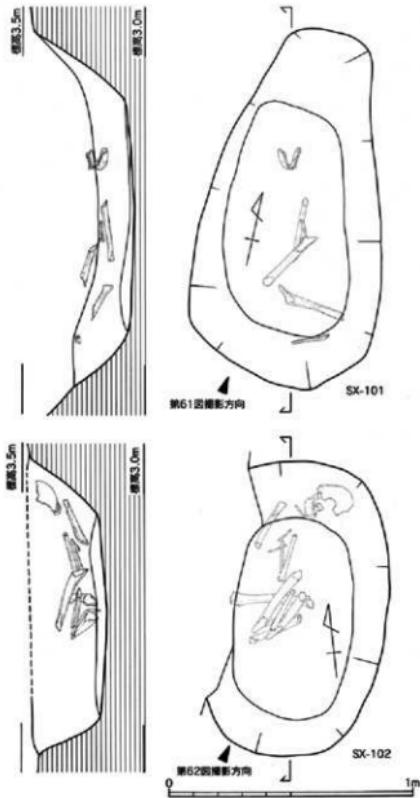
られる。



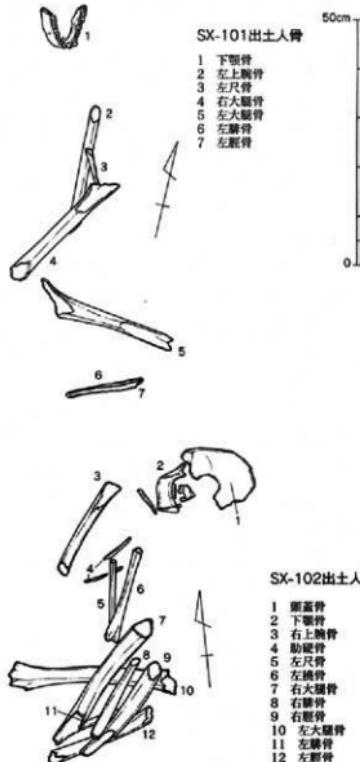
▲第61図 SX-101土壤墓検出状況（南から）



▲第62図 SX-102土壤墓検出状況（南から）



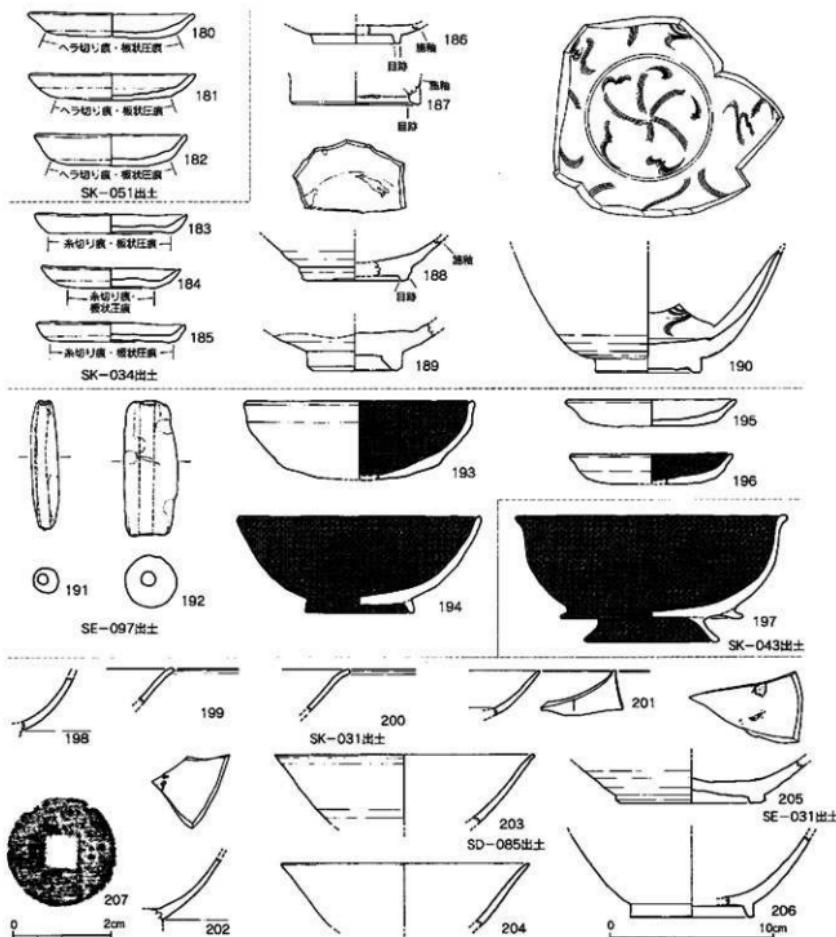
▲第63図 SX-101、102土壤墓、並びに人骨出土状況図（縮尺1/20、1/10）



(6) その他の出土遺物 (第64、65図)

180~182は、A-2グリッドで検出したSK-051
土壙で出土した土師器皿である。口径9.2~10.2cm、
器高1.5~2.0cmを測る。色調は鳥の子。出土遺物
からこの土壙の年代は11世紀前半代と考えられる。
183~190は、C-4グリッドで検出したSK-034
土壙の出土遺物である。183~185は土師器皿で、

口径8.4~9.2cm、器高1.2~1.3cmを測る。色調は鳥
の子~メイズ。186は越州窯系青磁碗の底部片で、胎
土に白色・黒色細粒を含む。豊付に白色耐火土目が
残る。全面に施釉され色調はページュを呈す。187
は越州窯系青磁碗の底部片で、胎土に白色・黒色細
粒を含む。高台には全面薄く施釉され、ページュを
呈す。底部に白色耐火土目が残る。188は青磁碗片

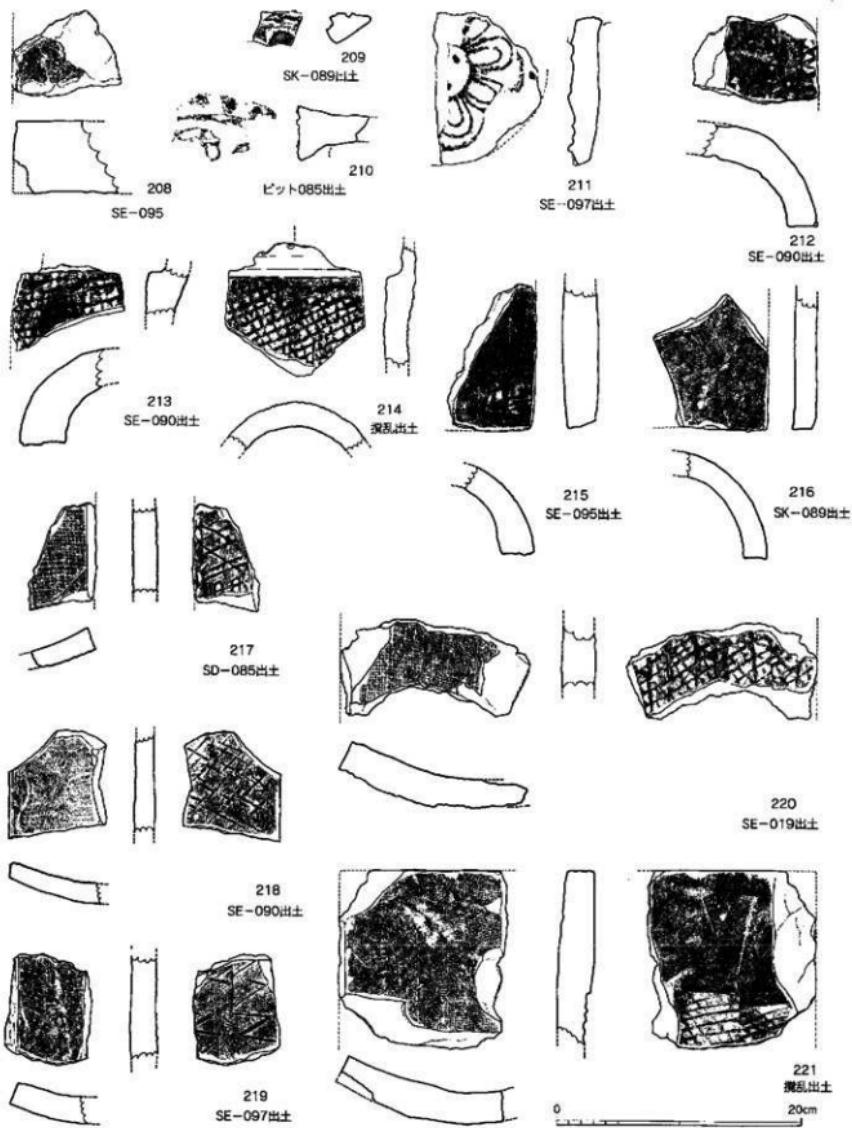


▲第64図 その他の遺構及び検出面出土遺物実測図及び銅鉄拓形 (縮尺1/3, 1/1)
※出土遺構の表記がないものは検出面の出土遺物

で二次的に被熱し、生成に変色する。胎土は粗く白色・黒色細粒を含む。疊付のみ露胎、見込みに目跡の痕跡がある。189は同安窯系青磁碗の底部片である。190は龍泉窯系青磁碗I-4類である。出土遺物からこの土壤の年代は12世紀後半代と考えられる。191~196はA-1、2グリッドで検出したSE-097井戸の出土遺物である。191、192は管状土錐で順に長さ8.0cm、8.4cm、最大径1.7cm、3.3cm、孔径0.6cm、0.9cmを測る。193は黒色土器碗で復元口径13.8cmを測る。194は黒色土器皿で口径14.8cm、器高5.9cmを測る。195は土師器皿で復元口径10.2cm、器高1.6cmを測る。胎土に白色砂粒を含み、色調烏の子を呈す。196は黒色土器皿で復元口径9.8cm、器高1.9cmを測る。出土遺物の年代から、この井戸の年代は10世紀末頃と考えられる。197はSK-043土壤出土の黒色土器托上坏である。復元口径16.2cm、器高7.8cmを測る。口縁部丸味を帯びてやや外反する。内・外唇面共に横方向のヘラ磨きを行う。198、199は検出面出土の近江産綠釉陶器の碗片である。胎土は土師質で白色砂粒を含む。焼成は概ね堅緻である。内・外唇面に薄く施釉され、色調はオリーヴグリーンを呈する。199は口縁部が外反する。200~206は越州窯系青磁片である。200はSE-031出土で、口縁部が外反する。胎土に白色・黒色細粒を含み、色調は駕茶を呈す。201は輪花皿片と考えられる。見込みと体部との境界に非常に浅い凹線が巡る。胎土に黒色細粒を含み、色調ベージュを呈する。202は碗II類の破片と考えられる。見込みに白色耐火土目が残る。胎土に黒色細粒を含み、色調ベージュを呈する。203はSD-085溝出土で、口径15.8cmに復元される。口縁端部が僅かに外反する。胎土はやや粗く、色調ベージュを呈する。204は口径15.1cmに復元される。口縁端部が僅かに外反する。胎土は概ね精良で、色調ベージュを呈する。205は鉢底部片で全面薄く施釉される。疊付及び見込みに白色耐火土目が残る。胎土は粗く、色調ベージュを呈する。206は碗の底部片である。輪状高台の疊付に白色耐火土目が残る。胎土に黒色細粒を含み、色調ベージュを呈する。207は模録鉄と考えられるが、文字は判読できない。

第65図は6区出土の壇及び瓦災跡である。瓦類はコンテナケースに3箱分出土した。208はSE-095出土の壇である。厚さ6.0cmを測る。薄い橙褐色を呈する。209は押庄文軒平瓦の額部小片である。胎土は概ね精良で、色調は黄灰色を呈する。瓦当文様はヘラ状工具で施文する。尖波線の波は幅約2cmを一単位としている。210は单弁の軒丸瓦片である。211は单弁八弁軒丸瓦の瓦当片である。内区の蓮弁は重弁であるが、内1弁は素弁である。大宰府132型式と考えられる。胎土に白色砂粒を含み、色調は鈍い赤褐色を呈する。212~216は丸瓦片である。212、213はSE-090出土。器壁最大厚3.0cm、凸面に斜格子叩、凹面に布目が残る。213は器壁最大厚3.8cm、凸面に格子叩、凹面に布目が残る。214は攪乱出土。器壁最大厚2.4cm、凸面に格子叩、凹面に布目が残る。215はSE-095出土。器壁最大厚2.8cm、凸面は斜格子叩の後、板状工具によるナデ、凹面に布目が残る。217~221は平瓦片である。217はSD-085出土。器壁最大厚1.9cm、凸面に斜格子叩、凹面に粗い布目が残る。凸面には判読不能の文字叩が残る。類例が箱崎遺跡第20次調査1区SE-131井戸（12世紀中頃）からも出土している。218はSE-090出土。器壁最大厚1.7cm、凸面に斜格子叩、凹面に布目が残る。219はSE-097井戸出土。器壁最大厚2.2cm、凸面に疊らな斜格子叩、凹面に布目が残る。220はB-6グリッドSK-019土壤出土。器壁最大厚2.9cm、凸面に細かい斜格子叩、凹面に布目が残る。221は攪乱出土。器壁最大厚3.0cm、凸面に細かい斜格子叩、凹面に布目が残る。

瓦類の総量は、コンテナケースに4箱程度である。概ね奈良時代末～平安前期の所産と考えられる。本調査区ではこの時期迄遡りうる遺構が検出されておらず、該期に瓦葺建物が存在したとは考えがたい。本調査区では10世紀前半代からの遺構群が検出されており、瓦葺建物が建てられていたとすれば、この時期以降のものであろう。本調査区で復元された建物は倉庫と考えられるSB-001~004のみであり、これらが瓦葺であったかは明確にできないが、他所の前代の瓦が搬入されて使用された可能性が高い。



▲第65図 6区出土瓦実測図 (縮尺1/4)

9区の調査

1 概要

9区は、東区馬出5丁目20番地内に位置する。前述した6区からは、北に約30m離れている。1号公園西側の道路に当たる部分の調査である。調査前の現況は、専用住宅解体後の平地であり、アスファルトが敷設されていた。遺構の遺存状況は、敷地所の擾乱があったものの比較的良好であった。本調査区は、幅6mと狭長であるため、各遺構の規模や性格については不明な点が多い。調査面積は100m²である。

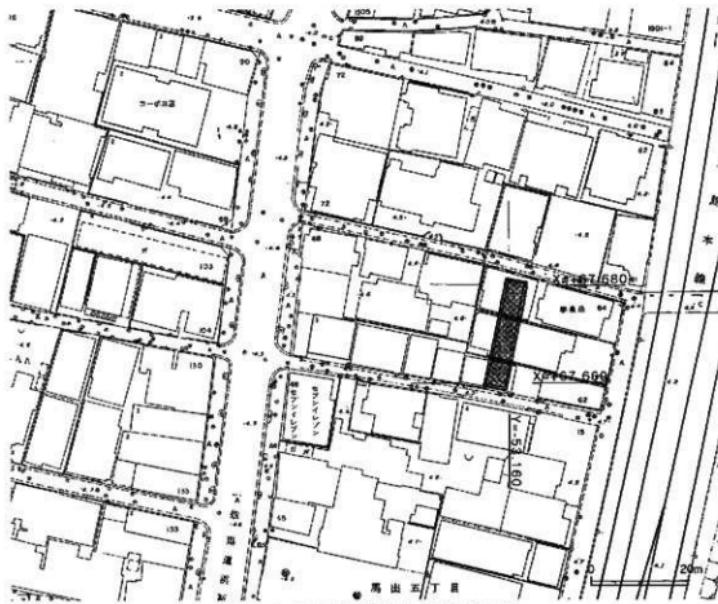
遺構面は、2面確認した。第1面遺構検出面（黄褐色砂層）での標高は、北側で約3.7m、南側で約3.5mを測り、箱崎遺跡の中でも最高所の一つに位置する。第2面の遺構は、第1面とほぼ同じ標高である。

平面形が看取されたが、不明瞭であったため約10cm程度掘り下げて確認した。

各面で検出した遺構の年代は、第1面で12世紀後半代～13世紀前半代、第2面で11世紀前半代～12世紀初頭の時期に位置付けられるものと考えられる。

検出した遺構は、方形堅穴と考えられる遺構3基、木棺墓1基、土壙、柱穴等である。方形堅穴と考えられる遺構、及び上墳数基は第2面で検出した。他の遺構は第1面で検出している。

出土遺物には、土師器（皿・环）、土師質土器（器台）、瓦器（碗）、黒色土器（高台付环）、中国産陶磁器（白磁碗・皿・水注、青磁碗・皿）、高麗青磁（碗）、灰釉陶器（壺）、鉄製品（釘）、瓦（平瓦）、滑石製品（石鍋・石鍋転用品）、人骨等がある。総量はコンテナケース4箱分程度である。



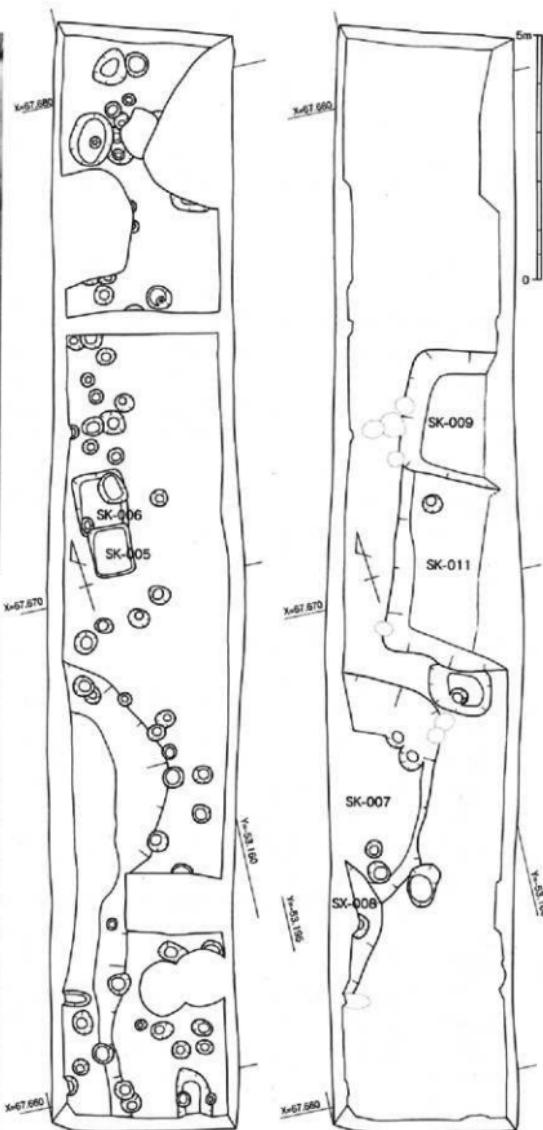
▲第66図 9区調査区位置図 (縮尺1/1,000)



▲第67図 9区調査区第1面全景(南から)



▲第68図 9区調査区第2面全景(南から)



第69図 9区調査区造構配置図 (縮尺1/100)

2 平安時代から鎌倉時代の遺構と遺物

狭長な調査区のため、各遺構の規模や性格については不明な点が多い。しかし6区と同様、方形堅穴と考えられる遺構が3基検出された。出土遺物には、越州窯系青磁、初期高麗青磁等の輸入陶器や、京都系土師器の模倣品、楕円型瓦器碗等の搬入系遺物が目立つ。また瓦等の出土から、本調査区は他の一般集落と性格を異にすると考えられる。

(1) 方形堅穴 (第70図)

方形堅穴と考えられる遺構は、3基検出された。調査区外に遺構が延びており、規模等不明な点が多い。いずれも第2面で検出した。
SK-007

調査区南半で検出した。西側は調査区外に延びる。主軸をN-33°-Eにとる。隣接するSK-008(方形堅穴か?)、及びピット等に切られる。掘方は隅丸方形になると推測される。南北一辺4.5m、検出面からの深さ1.1mを測る。床面は平坦で4つの柱穴を検出した。柱穴間の距離は図中に示した。

出土遺物

222、223は土師器皿で、復元口径10.2cm、器高1.4cmを測る。胎土に白色砂粒を含み、色調は鳥の子、生成色を呈す。

出土遺物から、SK-007方形堅穴の年代は11世紀前半とと考えられる。

SK-009

調査区北半で検出した。東側は調査区外に延びる。主軸をN-29°-Eにとる。SK-011方形堅穴を切り、ピットに切られる。掘方は隅丸方形になると推測される。南北の一辺は2.5m、検出面からの深さ約0.7mを測る。床面は平坦で、柱穴は検出されなかった。

出土遺物

226~229及び237は周辺の検出面出土。223は土師器皿で復元口径10.3cm、器高1.3cm。胎土に白色砂粒を含み、色調は鳥の子。226~234は京都系土師器皿の模倣品。口径10.2~11.4cm、器高1.1~1.3cmを測る。いずれも胎土に白色砂粒を含む。色調は224のみ薄い橙、他は生成色~柴色。235は土師器高台付坏の底部片で高台径7.2cm。236は瓦

器碗底部片で高台径6.8cm。器面調整磨滅。外底に「X」字のヘラ記号がある。237は越州窯系青磁鉢片。胎土に黒色・茶色の細粒を含み、色調はベージュ。238は高麗青磁碗底部片で、底径7.0cmに復元される。見込みと体部の境界線に、やや深い凹線が巡る。高台はやや細い。胎土に黒色・白色の細粒を含む。外底に白色耐火土目が残る。全面に薄く施釉され、色調はベージュを呈す。239は上師質の器台片。

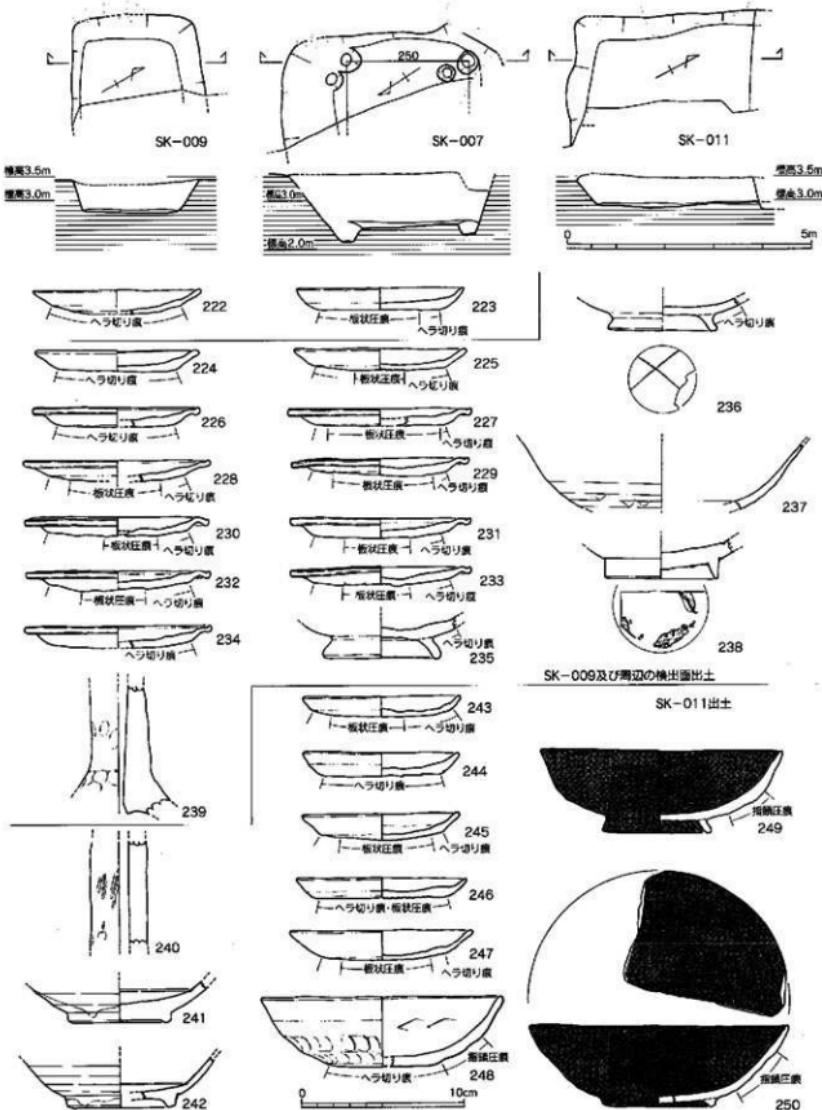
出土遺物から、SK-009方形堅穴の年代は11世紀前半とと考えられる。

SK-011

調査区北半で検出した。SK-009方形堅穴、SR-005木棺墓、SK-006土壙、ピットに切られ、SK-010土壙を切る。東側は調査区外に延びる。主軸をN-28°-Eにとる。掘方は隅丸方形になると推測される。南北の一辺は3.6m以上、検出面からの深さ約0.6mを測る。床面は平坦である。床面から柱穴は検出されなかった。

出土遺物

240は上師質土器器台片。241、242は白磁碗IV類の底部片。241~245は土師器皿で、口径9.6~11.2cm、器高1.3~1.8cmを測る。色調は247のみサンライズイエロー、他は鳥の子~生成色。248は手捏ねの土師器坏で、復元口径14.8cm、器高4.3cmを測る。胎土粗く、白色砂粒を多く含む。色調は鳥の子~生成色。内器面に板状工具のナデが施される。249は瓦器碗の完形品で、口径14.8cm、器高7.0cm、底径6.6cmを測る。内器面は板状工具によるナデ後、横方向へのラ磨き。内底に「X」字のヘラ記号がある。250は楕円型瓦器碗で、復元口径15.8cm、器高5.1cm、底径6.9cmを測る。高台は低い逆三角形を呈する。口縁端部内側に浅い凹線が巡る。見込み



▲第70図 SK-007、009、011方形窓穴及び出土遺物実測図 (縮尺1/100、1/3)

に横方向、体部に同心円状の非常に細かいヘラ磨きを施し、器面は平滑で光沢がある。

出土遺物から、この造構の年代は11世紀前半代と考えられる。

(2) 木棺墓

SR-005 (第71~73図)

調査区北半で検出した。造構の切り合い関係は、SK-011方形堅穴、SK-006土壙を切る。墓壙は長さ1.0m×幅0.8mを測る隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは約0.1を測る。墓壙、及び鉄釘の出土位置から復元した木棺の主軸はN-9°-Eを測る。木棺は長さ87cm、幅70cmの長方形で、棺材の厚さ2.1cmに復元できる。鉄釘の出土状況から木

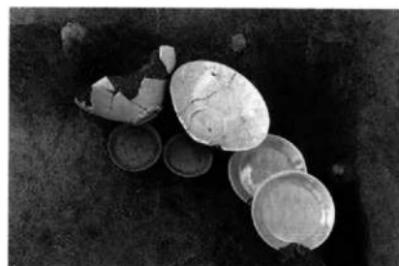
棺は、底板の上に側板を置き、小口板を挟み込む構造であったと考えられる。棺内から土圧で押し潰された頭蓋骨や四肢骨が検出された。保存状態が良好でなく、年齢、性別等は不明である。人骨の出土位置から、北頭位で埋葬されたものと推測されるが、姿勢は不明である。棺内には頭位付近、棺の北西隅に白磁皿Ⅱ-2・b類、龍泉窯系青磁碗Ⅰ-6類、土解器皿を2点ずつ副葬していた。

出土遺物 (第73、74図)

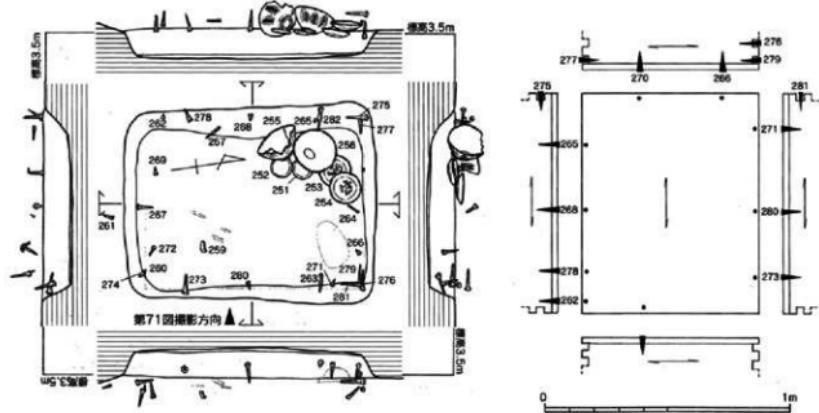
251、252は土師器皿。法量は順に口径8.5cm、9.0cm、器高1.0cm、1.1cm。胎土に白色砂粒・茶褐色細粒を含み、色調は烏の子。253、254は白磁皿Ⅱ-2・b類。共に口径13.0cm、器高2.4cm。見込みに草花印文。底部の釉薬は搔き取られ露胎。胎土



▲第71図 SR-005木棺墓検出状況（東から）



▲第72図 SR-005木棺墓副葬品出土状況（東から）

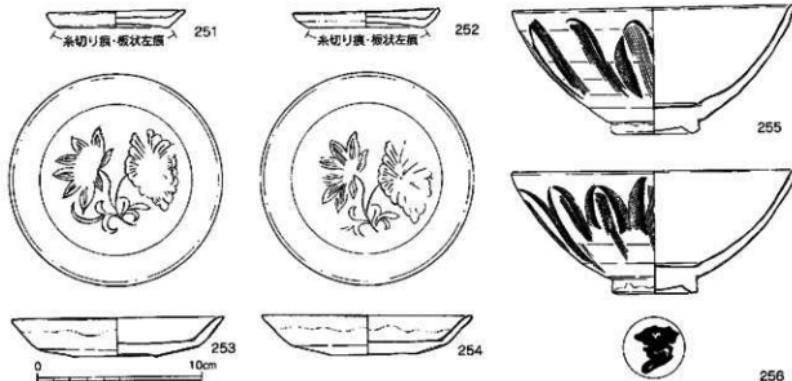


▲第73図 SR-005木棺墓遺物出土状況図並びに木棺復元想定 (縮尺1/20)

に黒色細粒を含み、色調はベージュ。255、256は龍泉窯系青磁碗 I-6類。胎土は白色・精良で、色調はロビンズエッグブルー。256の底部には墨書がある。筆致は緩く、漢字・花押の類とは考え難く、墨絵の可能性がある。257~259は不明鉄器。259は全長3.8cm、最大幅1.6cm。木棺内のやや浮いた

位置から出土した。形状は、頭部を折り曲げ櫻形を呈す。木目は観察されないが、釘の可能性もある。262~282は鉄釘で、詳細は第4表に示す。

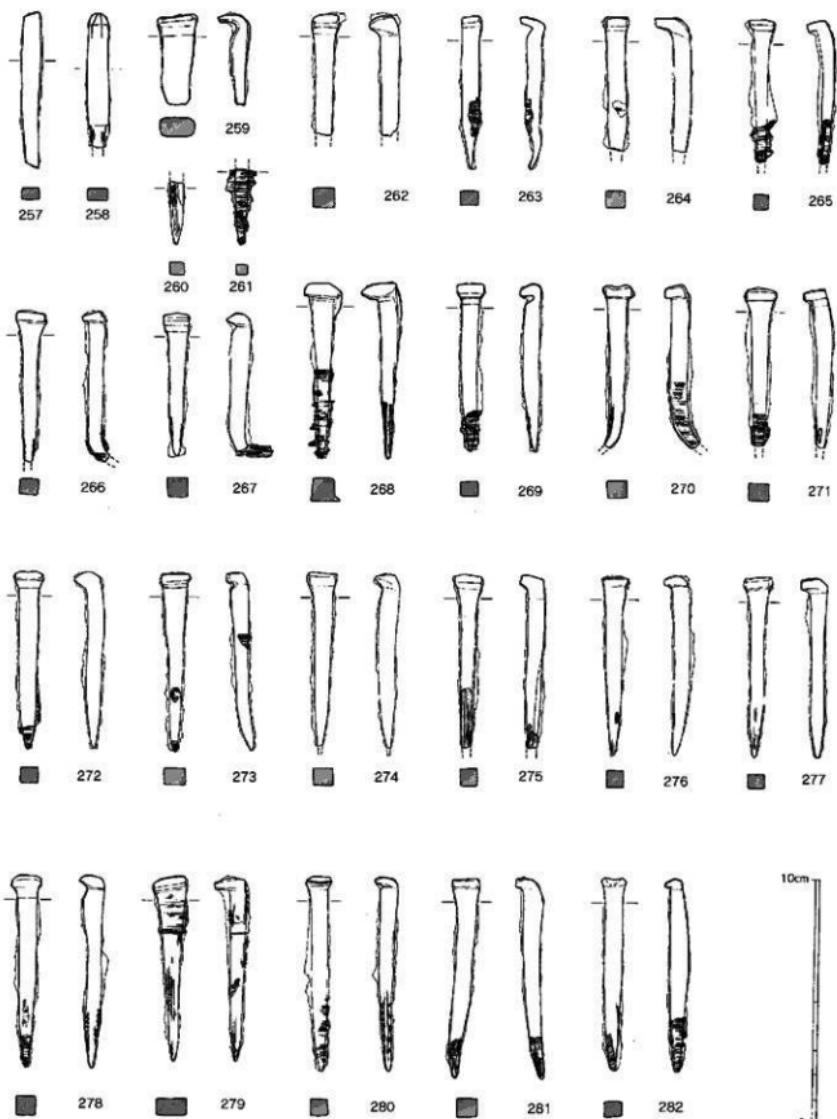
出土遺物の年代から、SR-005木棺墓の年代は13世紀前半代と考えられる。



▲第74図 SR-005木棺墓出土遺物(副葬品) 実測図(縮尺1/3)

第4表 SR-005出土鉄釘観察表

鉄 釘番号	器種	全長cm (残存長)	断面幅 (推定)cm	頭部形態	頭部最大高cm	木目方向		棺材厚 cm	備 考
						上	下		
258		(2.6)	-	-	-	一	縱	不明	脚先端部片
259		(3.2)	-	-	-	一	横・平行	不明	脚先端部片
260		(5.0)	0.9×0.8	四角	1.1	遺存せず	遺存せず	不明	頭部短く厚い
261		6.2	0.7×0.6	四角	0.8	遺存せず	横・平行	不明	頭部や長く、脚部と同じ
262		(5.5)	0.8×0.7	四角	0.8	遺存せず	横・平行	不明	頭部やや長く、脚部と同じ
263		(5.8)	0.6×0.6	四角	1	遺存せず	横・平行	不明	打込時にやや曲がる
264		(6.2)	0.8×0.7	四角	1.1	遺存せず	横・垂直	不明	頭部短い、打込時に脚部曲がる
265		(5.8)	0.8×0.8	四角	1	遺存せず	横・垂直	不明	頭部短い、打込時に脚部曲がる
266		7.3	0.8×0.8	不整形	1.5	遺存せず	横・平行	不明	頭部の変形は打込時のものか?
267		6.9	0.7×0.6	四角	1.1	遺存せず	横・平行	不明	頭部短い
268		(6.7)	0.8×0.7	四角	1	遺存せず	横・垂直	不明	頭部凹面は打込時のものか?
269		(6.5)	0.9×0.7	四角	1.2	遺存せず	横・平行	不明	
270		7.3	0.7×0.7	四角	1.1	遺存せず	横・平行	不明	頭部短い、凹面は打込時のものか?
271		7.3	0.9×0.7	椭円形	1.2	遺存せず	横・平行	不明	頭部短い
272		(7.1)	0.8×0.7	四角	1.1	横・平行	遺存せず	不明	頭部短い、脚端部僅かに欠損
273		(7.1)	0.7×0.6	四角	1.1	遺存せず	縱	不明	頭部下方に振れ、打込時のものか?
274		7.4	0.7×0.6	四角	1.1	遺存せず	縱	不明	頭部短い
275		7.4	0.7×0.6	四角	1.1	遺存せず	縱	不明	頭部やや短く、形態はやや台形気味
276		7.4	0.8×0.8	四角	1.1	遺存せず	横・平行	不明	頭部短い
277		7.6	1.2×0.7	四角	1.2	横・平行	縱	2.1	頭部長い
278		8	0.7×0.7	四角	1	横・平行	縦・平行	不明	頭部短い
279		8.3	0.8×0.8	四角	1	縱	縦	不明	頭部短い
280		7.9	0.7×0.6	四角	1	横・垂直	横・垂直	不明	頭部短い



▲第75図 SR-005木棺墓出土遺物（鉄釘）実測図（縮尺1/2）

10区の調査

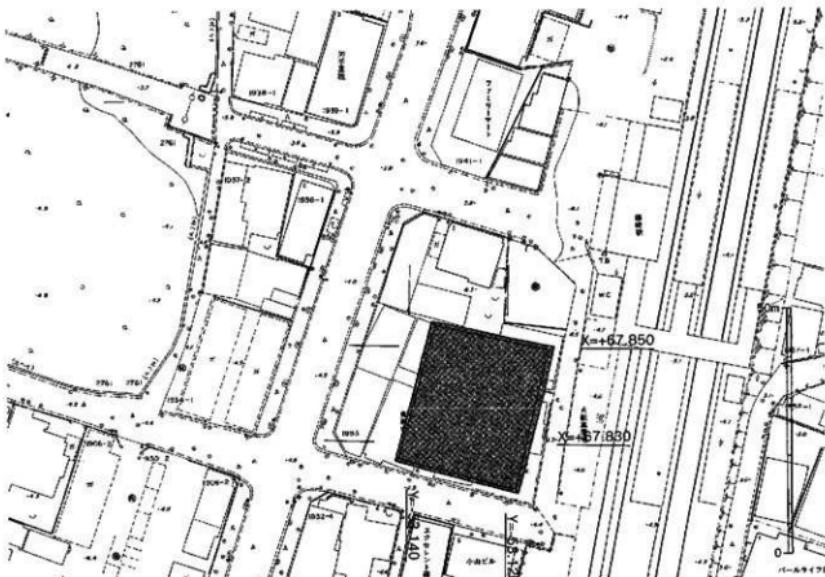
1 概 要

10区は、東区箱崎1丁目3番に位置する。前述の9区から北へ150m程度離れている。妙見通りを挟み西側には宮崎宮が鎮座する。また、東へ約100mの地点は、柏屋平野を西流する宇美川が箱崎砂丘に当たって流路を北へ替える屈曲点である。調査前の現況は、専用住宅解体後の平地であった。数ヵ所の大きな擾乱があつたものの、遺構の遺存状況は比較的良好であった。遺構検出面（黄褐色砂層）での標高は、南東で2.9m、南西で2.8m、北東で2.8m、北西で2.7mを測った。調査面積は820m²である。

検出した遺構は、古代末から中世にかけて時期に属する。遺構の内容は図上復元された掘立柱建物跡、井戸、土壙、溝、柱穴等である。出土遺物には、土

師器(皿・壺・高台付皿・高台付壺)、土師質土器(器台)、黒色土器(皿・壺・高台付壺)、瓦器(碗)、国産陶器(綠釉陶器碗・壺)、中国産陶磁器(白磁碗・皿・水注・合子・香炉・青磁碗・皿・托・水注・壺・青白磁合子・黒釉陶器天日碗・陶器水注・壺・小壺・甕・鉢)、朝鮮半島産陶磁器(新羅焼壺・高麗青陶器碗・皿)、東播系須恵器(鉢)、瀬戸産陶器(鉢皿)、銅製品(鈴)、鉄製品(刀子・轡・毛抜き)、石製品(滑石製石鏡・紡錘車・碁石)、土製品(土鍤)、陶磁器を転用した毬打・瓦(平瓦・丸瓦)、炭化米、動物骨等である。

2×3間の庇付建物等、中型の建物等がある程度纏った主軸偏差に收まり、出土遺物にも馬具や白磁香炉といった奢侈品が出土していることから、一般集落と性格を異にした特殊な機能が窺える。



▲第76図 10区調査区位置図 (縮尺1/1,000)

2 平安時代から鎌倉時代の遺構と遺物

6区や9区で検出された10世紀後半代迄遡る遺構は確認されなかった。本調査区での遺構は11世紀代から13世紀代にかけて時期が中心になり、更に、南側の調査区で確認されなかった14世紀代の生活遺構が検出された。庇を持つ獨立性建物跡や、薪炉などの奢侈品や瓦の出土等、該期の一般集落にはみられない特徴を異なる。

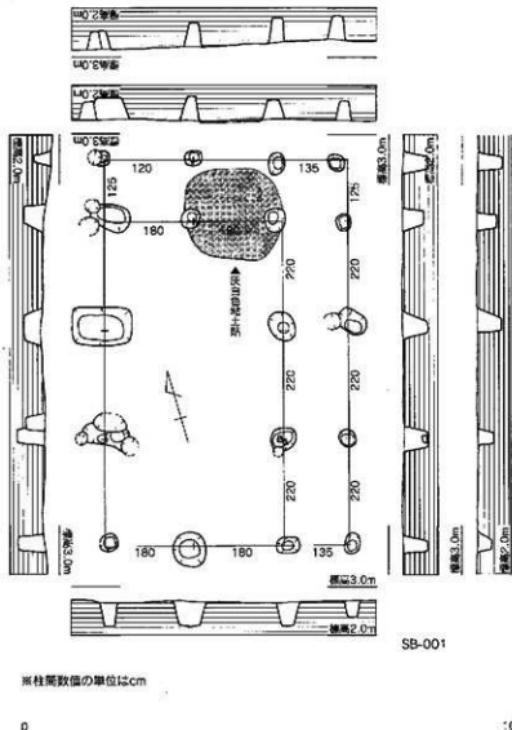
第77図 10区調査区全観（南から）



(1) 据立柱建物跡

SB-001 (下図左)

B-3、4グリッドで検出した。切り合ひ関係は、SD-088溝より後出する。二面庇の南北棟建物で主軸をN-16°-Eにとる。身舎は桁行3間で6.6m、梁行2間で3.6m、東面、北面に庇が付く。各柱間は図示した。北面庇は、梁行1.25m、桁行4.95m、東面庇は梁行1.35m、桁行7.85mを測る。各柱穴掘方は径30~120cmの円形もしくは楕円形で、深さ30~60cmである。柱穴には柱根、柱痕跡は確認できなかつたが¹、1個の柱穴に根固めの石がある。また、北面庇と身舎北梁行の間の床面に、灰白色粘土を厚さ5cm程度貼つた床面を確認した。床面積は38.9m²である。



出土遺物 (右図上)

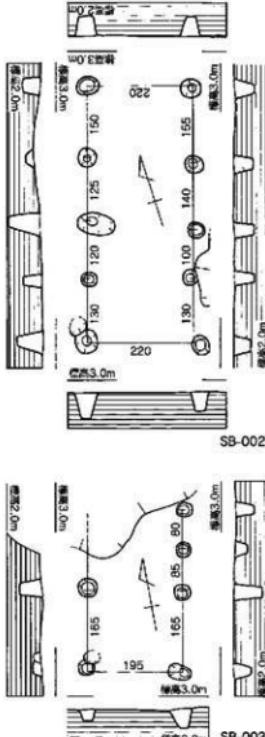
283は柱穴出土の土師器皿。復元口径9.4cm。遺物から11世紀後半の建物と考えられる。

SB-002 (右図右上)

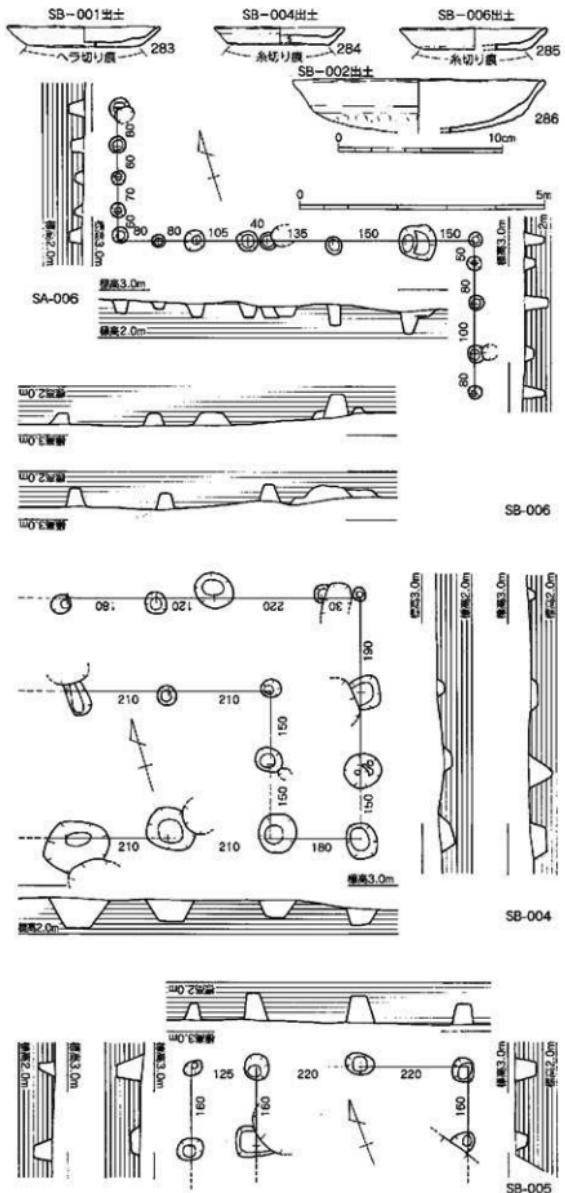
C-3グリッドで検出した。ピットの切り合ひがあるのみである。南北棟建物で、主軸をN-18°-Eにとる。桁行4間で5.25m、梁行1間で2.2mを測る。各柱間は図示した。各柱穴掘方は径30~75cmの円形もしくは楕円形で、深さ20~65cmである。柱穴に柱根、柱痕跡は確認できなかつた。床面積は11.55m²である。

出土遺物 (右図上)

286は柱穴出土の土師器壺。復元口径15.6cm。遺物から12世紀前半の建物と考えられる。



▲第78図 SB-001~003据立柱建物跡実測図 (縮尺1/100)



▲第79図 SB-004、005掘立柱建物跡、SA-006横列跡
及び出土遺物実測図 (縮尺1/100、1/3)

SB-003 (前頁図右下)

C-2グリッドで検出した。切り合ひ関係は、SE-014に後出し、近・現代の機械に切られるものと考えられる。南北棟建物で、主軸をN-10°-Eにとる。桁行2間で3.3m以上、梁行1間で1.95mを測る。各柱間は示した。各柱穴掘方は径30~50cmの円形もしくは梢円形で、深さ20~60cmである。柱穴に柱根、柱痕跡は確認できなかった。

SB-004 (左図中)

B-1、2、C-2グリッドで検出した。ピットの切り合ひがあるのみである。身舎西棟の状況から、西側は調査区外に延びる可能性がある。東西棟建物と考えられ、主軸をN-74°-Wにとる。身舎は桁行2間以上で4.2m以上、梁行2間で3.0mを測る。各柱間は示した。東・北面に底を付ける。北面庇は、梁行1.9m、桁行6.0m、東面庇は梁行1.8m、桁行4.9mを測る。各柱穴掘方は径25~135cmの円形もしくは梢円形で、深さ15~60cmである。柱穴に柱根、柱痕跡は確認できなかった。

出土遺物 (左図上)

284は柱穴出土の土師器皿。復元口径8.0cm。遺物から14世紀前半の建物と考えられる。

SB-005 (第79図下)

C-4グリッドで検出した。切り合い関係は、近・現代の擾乱に切られる。建物の一部を検出したに過ぎず、全体の規模や構造は不明であるが、南北棟とすれば西面庇付建物の可能性がある。東西棟とすれば桁行3間で5.65m、梁行1間で1.6mの建物に復元できる。各柱間は図示した。主軸をN-20°-Eにとる。各柱穴掘方は径40~60cmの円形もしくは梢円形で、深さ20~55cmである。柱穴には柱根、柱痕跡は確認できなかった。

(2) 棚列跡

SA-006 (第79図上)

B-3、C-3グリッドで検出した。直角鉤形に折れ曲がり、主軸をN-17°-Eにとる。各柱間は図示した。各柱穴掘方は径30~75cmの円形もしくは梢円形で、深さ15~50cmである。柱穴には柱根、柱痕跡は確認できなかった。

出土遺物

285は柱穴出土の土師器皿。復元口径9.0cm。遺物から11世紀末~12世紀初頭の棚列と考えられる。

(3) 井戸

井戸は確実に判るもので都合10基を検出した。この内、SE-023、376井戸は半分が調査区外に延びる。

SE-023・024 (右図)

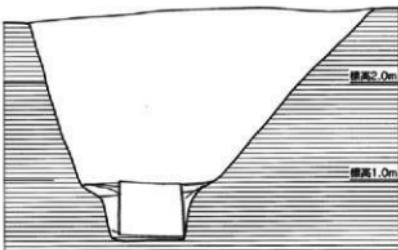
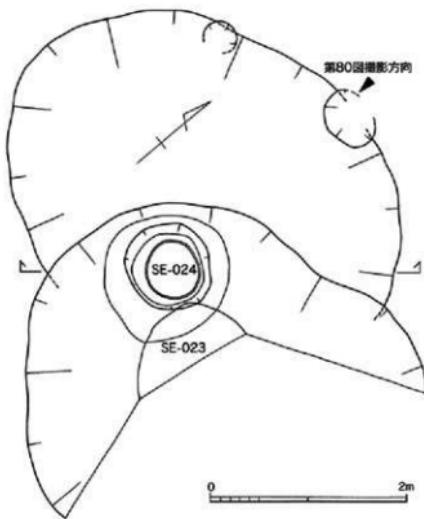
D-2、3グリッドで検出した。切り合い関係は、SE-023が024を切る。SE-024の検出面での掘方は、長径4.4m×短径3.3m程度の梢円形を呈すると考えられる。検出面から深さ約1.8m（標高約0.9m）のところで、長径0.9m、短径0.8m程度の梢円形の平坦面を設ける。この面で長径62cm、短径55cmの円形の井筒痕と考えられる木質腐食部を確認した。底部は標高0.4mで検出され、直径0.75mの円形を呈する。

出土遺物（右図上）

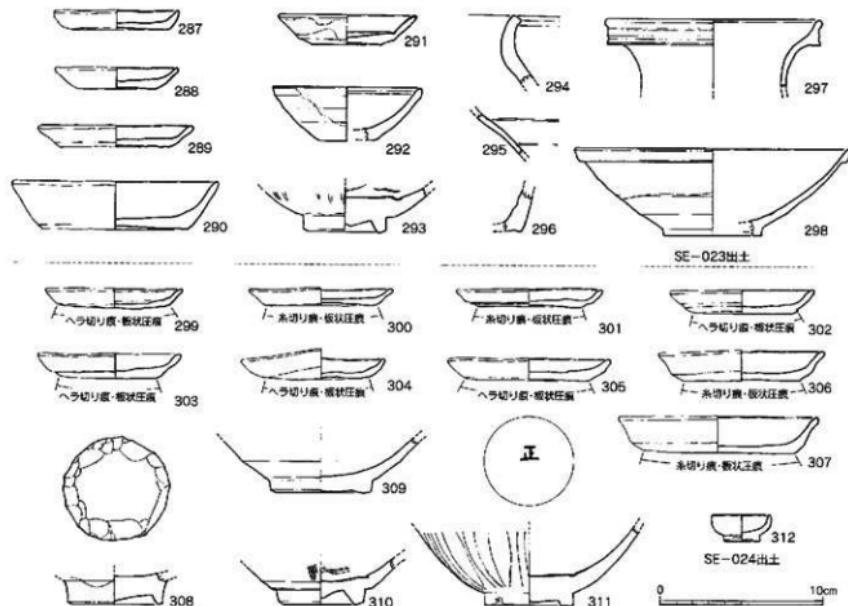
287~298はSE-023出土遺物である。287~289は底部糸切り離しの土師器皿。口径7.4~9.4cm、標高1.2~1.3cmを測る。290は底部糸切り離しの



▲第80図 SE-023、024井戸全景（北から）



▲第81図 SE-023、024井戸実測図（縮尺1/50）



▲82図 SE-023、024井戸出土遺物実測図 (縮尺1/3)

土師器坏。口径12.5cm、器高3.0cmを測る。289は同安窯系青磁皿I-1・a類。290は施釉陶器坏。291は同安窯系青磁碗底部片。292は施釉陶器壺口縁部片。293は青磁片で色調駕茶を呈す。294、295は高麗陶器蓋。胎土に白色細砂を含み色調消炭色を呈す。296は白磁碗III類。

出土遺物から、SE-023井戸の埋没年代は14世紀後半代と考えられる。

299～312はSE-024出土遺物である。299～306は土師器皿で、II径8.4～10.2cm、器高1.1～1.9cmを測る。307は土師器坏で口径12.2cm、器高2.3cmを測る。308は白磁碗の底部を転用した毛打で、直径6.4cm、309は白磁碗IV類の底部片。310は同安窯系青磁碗の底部片。311は龍泉窯系青磁碗I-5・b類。外器面鏽蓮弁文、見込みに「正」字陽刻印。発色不良でページュを呈す。310は青白磁小碗で、復元口径3.6cmを測る。

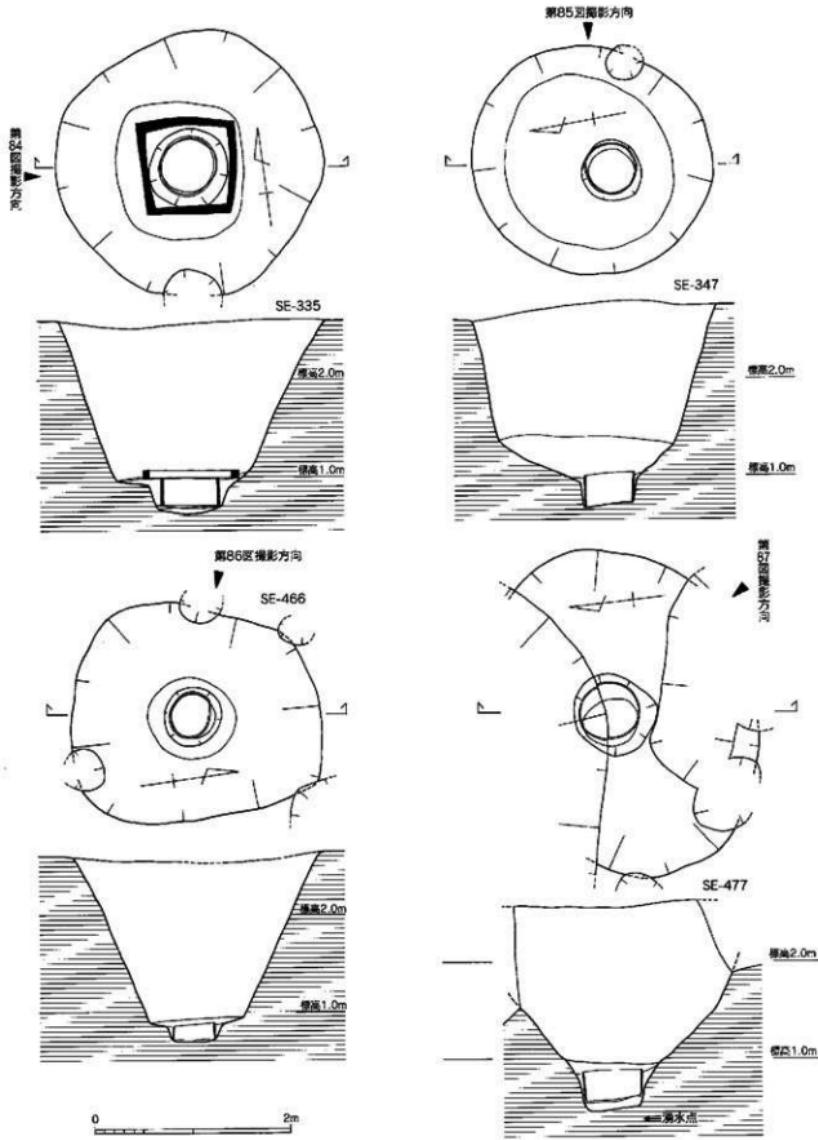
出土遺物からSE-024井戸の埋没年代は13世紀後半代と考えられる。

SE-335 (第83図左上、第84図)

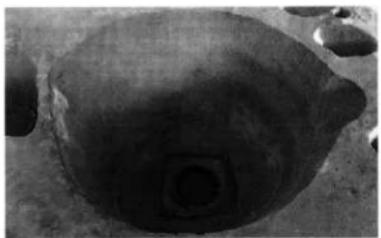
C-3グリッドで検出した。切り合ひ関係はビットに切られるのみ。検出面での傾方は、径2.7～2.8m程度の円形を呈する。検出面から深さ約1.6m (標高約1.0m) のところで、一辺1.3～1.4m程度の隅丸方形の平坦面を設ける。この面で検出した木質腐食部の状況から、井戸の構造は太さ約8cmの角材を使用した一辺約95cmに復元される方形横棟を井戸に組み、その内側に長径62cm×短径55cmの円形の井筒を据えたと考えられる。井筒は幅2cm程度である。底部は標高0.6mで検出され、直径0.55mの円形を呈する。

出土遺物 (第88図上)

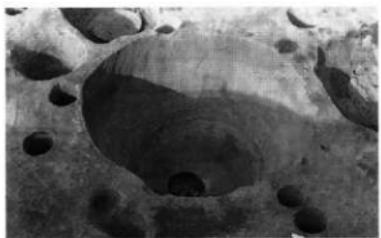
313～315は土師器皿。313、314は混入品の可能性がある。315は口径10.2cm、器高1.2cm。310は土師器高台付皿で口径9.5cm、器高3.1cm。317～319は土師器坏でII径15.4～15.8cm、器高2.9～4.2cmに復元される。320は瓦器碗で復元口径16.4cm、器高7.1cm。口縁部肥厚し高台低い。321



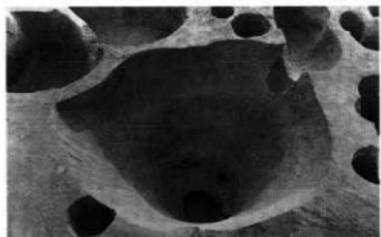
▲第83図 SE-335、347、466、477井戸実測図（縮尺1/50）



▲第84図 SE-335井戸全景（西から）



▲第85図 SE-347井戸全景（東から）



▲第86図 SE-466井戸全景（西から）



▲第87図 SE-477井戸全景（東から）

は白磁碗の底部を転用した模打で、径6.2cm。320は青白磁合子身で、外器面に蓮弁文を施す。底部露胎で砂目が残る。色調ロビンズエッグブルーを呈す。321は菫石と考え、色調赤みの暗灰色を呈す。

出土遺物からSE-335井戸の埋没年代は、12世紀前半と考えられる。

SE-347 (左頁図右上、左圖中上)

D-3グリッドで検出した。切り合い関係はピットに切られるのみ。検出面での掘方は、径約2.4～2.5mの円形を呈する。検出面から深さ約1.8m(標高約1.0m)のところで、径1.0～1.2mの梢円形の平坦面を設け、ここから井筒を据えるための掘り込みを行う。底部は標高0.7mで検出され、直径0.45mの円形を呈する。平坦面で直径52cm、厚さ1cmの円形の木質腐食部を確認し、土層断面で井筒は底部直上まで達していたことが観察された。底部は標高0.6mで検出され、直径0.55mの円形を呈する。

出土遺物 (第88図中上)

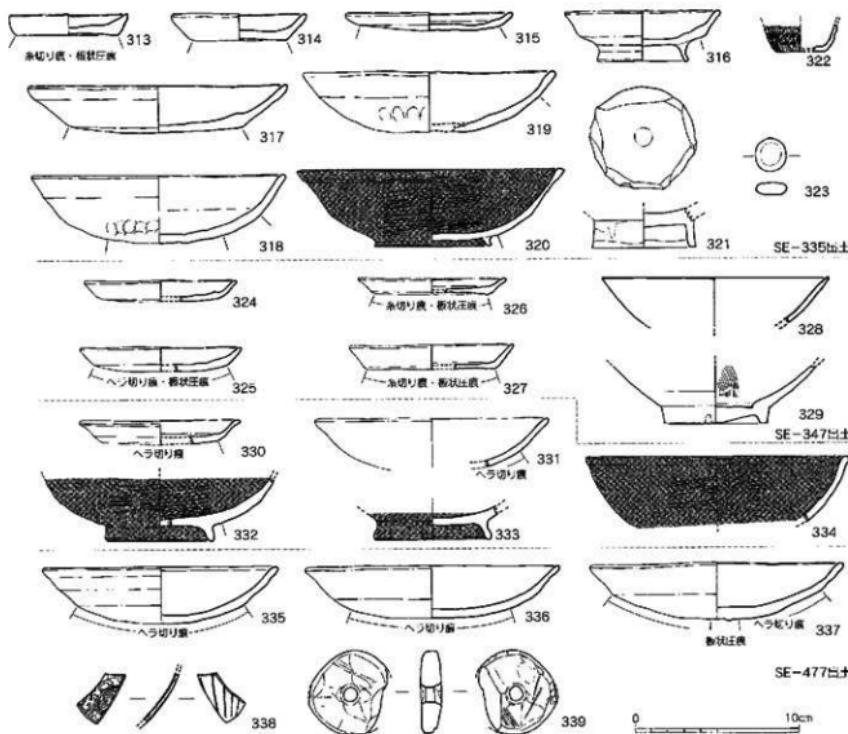
324～327は土師器皿で復元口径9.0～10.0cm、器高1.0～1.5cmに復元される。328は黒釉陶器碗で口径17.0cmに復元される。胎土は黒色・白色細粒を含み白色を呈す。焼成良好で色調漆黒を呈す。所謂「黒定」である。329は白磁碗底部片で見込みと内器面に柳描文を施す。

出土遺物からSE-347井戸の埋没年代は、12世紀前半と考えられる。

SE-376 (第89図上、第90図)

C-1・2、D-2グリッドで検出した。切り合い関係はSK-375土壤を切り、SK-008土壤に切られる。北半は調査区外に延びる。検出面での掘方は、径約4mの円形もしくは梢円形を呈すると考えられる。検出面から深さ約1.8m(標高約0.9m)のところで、長径2.0m×短径1.5m程度の不整形な梢円形の平坦面を設け、ここから井筒を据えるため、直径約1.1mの円形の掘り込みを行う。この平坦面で長径75cm×短径63cmの井筒と考えられる木質腐食部を確認した。土層断面から、井筒は底部まで達していた。底部は標高0.4mで検出され、直径0.9mの円形を呈する。

出土遺物 (第93図上)



▲第88図 SE-335、347、466、477井戸出土遺物実測図 (縮尺1/3)

338は青白磁蓋で、直徑5.0cmに復元される。胎土+338は青白磁蓋で、直徑5.0cmに復元される。胎土は白色で精良。天井部に草花陽文を施文する。天井部のみに施釉され、色調は緑みの白を呈す。341、342は土師器皿で腹に口徑8.8、9.5cm、器高1.7、1.3cmを測る。343～346は土師器皿で口徑14.0～16.2cm、器高3.2～3.6cmを測る。347は土師器皿で口徑16.6cm、器高5.8cmを測る。

出土遺物から、SE-376井戸の埋設年代は12世紀前半代と考えられる。

SE-407 (第89図中、第91図)

B-2、3グリッドで検出した。切り合い関係はSD-4106満、SK-021土壤、近・現代の擾乱に切られ、

SE-477井戸を切る。西端部は調査区外に延びる。検出面での掘方は、長径5.5m程度×短径4.5mの梢円形を呈すると考えられる。検出面から深さ約1.9m (標高約0.8m) のところで、径1.7～1.8mの円形の平坦面を設け、ここから井筒を据えるための掘り込みを行う。この平坦面で長径75cm×短径60cmの井筒と考えられる木質腐食部を確認した。底部は標高0.4mで検出され、直徑0.8mの円形を呈する。

出土遺物 (第93図中)

348は青白磁蓋、349は同盤のII縁部片で、色調オパールグリーンを呈す。350～354は土師器皿で、口徑8.9～9.6cmに復元される。355は高麗青磁碗と考えられる。口徑は12.0cm程度に復元され、口縁

部が肥厚気味に外反する。胎土は灰白色を呈し、白色・黒色粗砂を含む。釉調透明でオリーブドラブを呈す。356は高麗青磁碗底部片である。胎土灰色を呈し、白色細砂を含む。全面に施釉され、豊付は釉を搔き取り、タバコブラウンを呈す。見込みの目跡とほぼ同じ位置に白色耐火土が残る。釉調の透明度が低く、セージグリーンを呈す。357は越州窯系青磁碗I-1類である。蛇の目高台に白色砂目が残る。胎土は灰色を呈し精良。全面に薄く施釉され、色調は緑みの強いベージュを呈す。358は越州窯系青磁碗II-2類である。胎土はオイスター色を呈し、白色細砂を含む。外器面は露胎、内器面に薄く施釉され、色調はオリーブを呈す。359は高麗陶器寺の口縁部片である。胎土に白色・黒色砂粒を含み、焼成は堅鐵、色調は灰みの紫青色を呈す。360は白磁碗IV-1類である。361は白磁碗底部片である。362は東播系須恵器鉢である。

SE-466 (第83図下左、第86図)

C-4グリッドで検出した。切り合い関係はピットに切られるのみ。検出面での掘方は、径約2.2~2.55mの横円形を呈する。検出面から深さ約1.6m（標高約0.9m）のところで、径0.8~0.9mの円形の平坦面を設け、ここから井筒を据えるための掘り込みを行う。この平坦面で、長径0.5m×短径0.4mの井筒と考えられる木質腐食部を確認した。底部は標高0.7mで検出され、直径0.45mのU形を呈する。

出土遺物 (第88図中下)

330は土師器皿で口径9.8cmに復元される。331は土師器坏で口径14.2cmに復元される。332~334は瓦器碗で、粗いヘラ磨きを施す。

出土遺物から、SE-466井戸の埋没年代は、11世紀後半と考えられる。

SE-477 (第83図右下、第87図)

B-3グリッドで検出した。切り合い関係は、SE-407井戸、SD-226溝、SK-019土壠、ピットに切られる。検出面での掘方は、長径約3.4mを測る横円形を呈すると考えられる。検出面から深さ約1.6m（標高約0.9m）のところで、井筒を据えるための掘り込みを行う。この掘り込み面で長径58~60cm、厚さ1cmの井筒と考えられる木質腐食部を

確認した。土層断面から、井筒は標高0.6mまで達していたことが確認された。底部は標高0.5mで検出され、直径0.5mの円形を呈する。また、標高0.4mで湧水した（2月20日）。

出土遺物 (上図下)

335~337は土師器坏で口径14.2~15.5cm、器高3.3~3.5cmを測る。338は耀州窯系青磁牡丹草文碗の小片である。外器面には蓮弁文を施す。胎土は淡灰色を呈し、精良である。やや厚く施釉され、釉調透明で発色良好、色調は青色を呈す。339は滑石製紡錘車で、直径5.0cmを測る。

出土遺物から、SE-477井戸の埋没年代は、12世紀前半と考えられる。

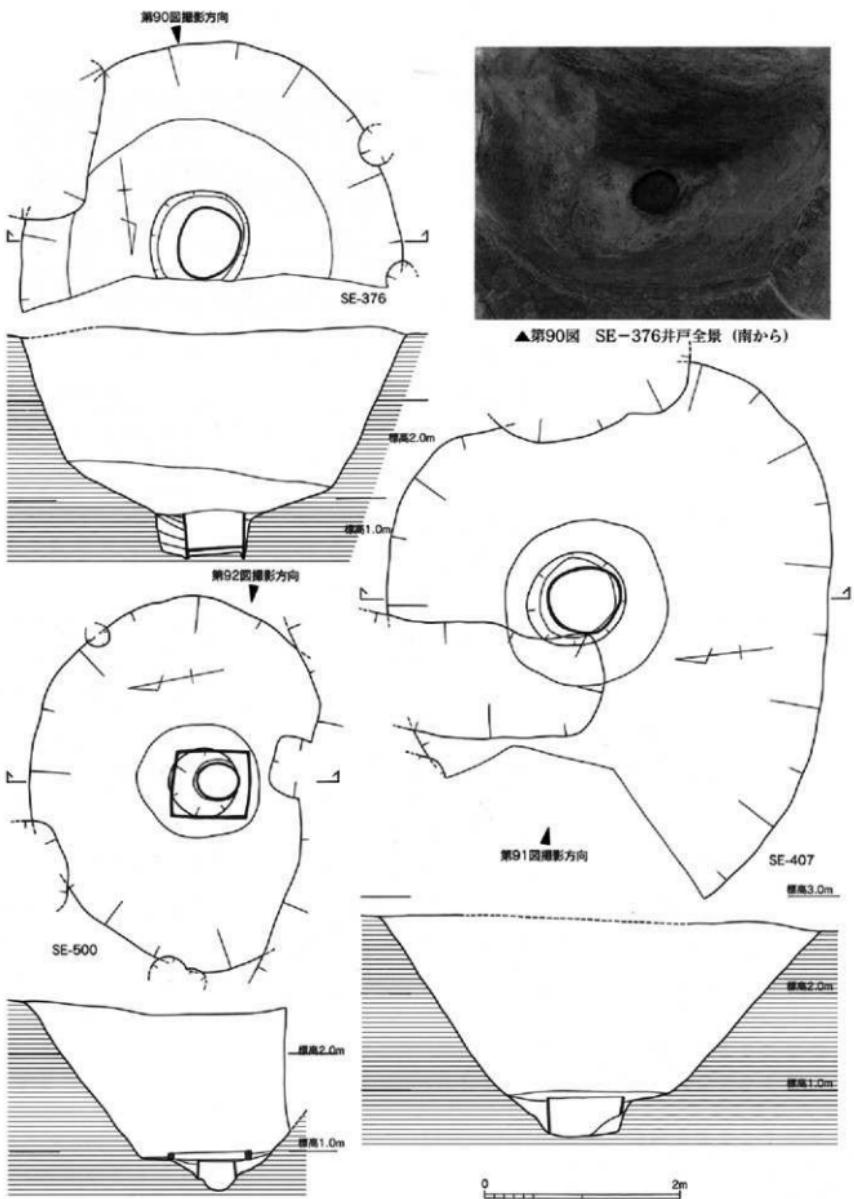
SE-500 (第89図下、第92図)

B-3、4グリッドで検出した。切り合い関係はSB-001掘立柱建物、SD-088溝、SX-012性格不明遺構、ピット等に切られる。検出面での掘方は、長径3.9m程度の横円形を呈すると考えられる。検出面から深さ約1.6m（標高約0.9m）のところで、長径1.25m×短径1.15mの横円形の平坦面を設ける。この面で検出した木質腐食部の状況から、井戸の構造は太さ約6cmの角材を使用した長辺75cm×短辺70cmに復元される方形横桟を井側に組み、その内側に径40cm~44cmの円形の井筒を据えたものと考えられる。井筒は厚さ1~2cm程度である。底部は標高0.7mで検出され、直径0.3~0.35mの横円形を呈する。また、井戸底部より低い標高0.25mで湧水した（2月26日）。

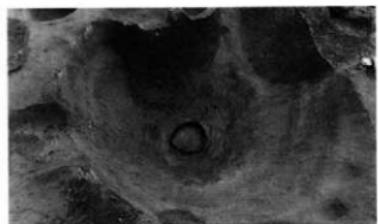
出土遺物 (第93図下)

363~366は上部器皿で口径9.2~10.0cm、器高1.3~1.6cmに復元される。胎土に白色砂粒を含み、色調は鳥の子色を呈す。367は白磁碗III類と考えられる口縁部片である。368は土師器高台付耳である。胎土に白色砂粒を含み、色調はサンライズイエローを呈す。369は越州窯系青磁碗の口縁部片で、口径14.2cmに復元される。胎土は明灰色を呈し、黒色細粒を含む。非常に薄く施釉され、色調はベージュ~オリーブドラブを呈す。

出土遺物から、SE-500井戸の埋没年代は、11世紀後半と考えられる。



第89図 SE-376、407、500井戸実測図（縮尺1/50）



▲第91図 SE-407井戸全景（西から）



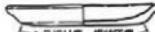
▲第92図 SE-500井戸全景（東から）



340



341
ヘラ切り痕・板状压痕



342
ヘラ切り痕・板状压痕



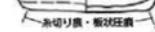
348



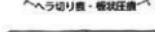
349
ヘラ切り痕・板状压痕



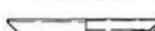
350
ヘラ切り痕・板状压痕



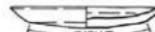
351
ヘラ切り痕・板状压痕



352
ヘラ切り痕・板状压痕



353
ヘラ切り痕・板状压痕



354
ヘラ切り痕・板状压痕



343
ヘラ切り痕



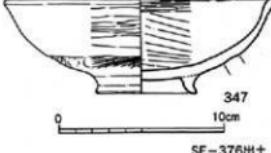
344
ヘラ切り痕



345
ヘラ切り痕



346
ヘラ切り痕



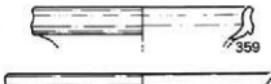
347
10cm
SE-376出土



354



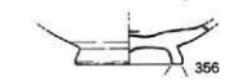
355



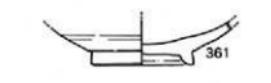
359



360



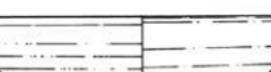
356



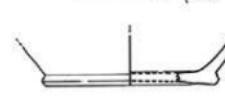
361



357

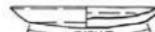


366



358

SE-407出土



363
ヘラ切り痕



364
ヘラ切り痕



365
ヘラ切り痕



366
ヘラ切り痕



367



368



369

SE-500出土

▲第93図 SE-376、407、500井戸出土遺物実測図（縮尺1/3）

(4) 土壙

SK-001 (第94図、98図左上)

B-3、C-3グリッドで検出した。切り合い関係はピットを切るのみ。検出面での平面形は、長径1.8m×短径1.5mの橢円形を呈する。検出面からの深さは約0.8mを測る。覆土は、有機質腐食土層と黄褐色砂を多く含んだ砂質土が互層状をなすことから、廃棄土壙と考えられる。

出土遺物 (第99図)

370～372は土師器皿で、復元口径9.7～10.3cm、器高1.4～1.6cm。胎土白色砂粒含み、色調烏の子を呈す。373～376は土師器坏で、口径15.0～15.9cm、器高3.8～4.0cm。内器面に板状工具によるナテ。胎土白色砂粒含み、色調烏の子～メイズを呈す。377は鉄製巻の銜。全長13.1cm、銜先環径3.0×3.2cm、単金径2.1×2.4cmを測る。断面は方形で、単金は先端を折り曲げて処理している。

出土遺物から、SK-001土壙の年代は11世紀後半代～12世紀初頭頃と考えられる。

SK-002 (第95図、98図右上)

C-2、3、D-2、3グリッドで検出した。切り合い関係はSX-499性格不明遺構を切り、SK-007土壙に切られる。検出面での平面形は、一辺1.4mの不整形な方形を呈すると考えられる。検出面からの深さは約0.3mを測る。覆土は有機質腐食土層と黄褐色砂を多く含んだ砂質土が互層状をなすことから、廃棄土壙と考えられる。

出土遺物 (第99図中)

378は同安窯系青磁皿I-1-a類。379は白磁碗IV類。380は白磁碗の底部を転用した槌打。

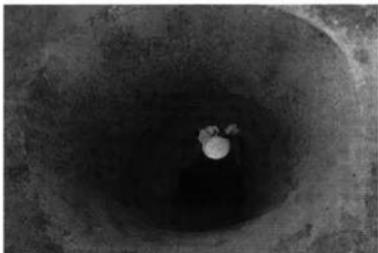
出土遺物から、SK-002土壙の年代は12世紀前半代と考えられる。

SK-003 (第96図、98図中左)

B-3グリッドで検出した。切り合い関係はない。検出面での平面形は、長さ1.9m×幅1.1mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは約0.5mを測る。覆土は有機質腐食土層と黄褐色砂を多く含んだ砂質土が堆積しており、廃棄土壙と考えられる。

出土遺物 (第99図中)

381～383は土師器皿で口径9.1～9.2cm、器高



▲第94図 SK-001土壙遺物出土状況（東から）



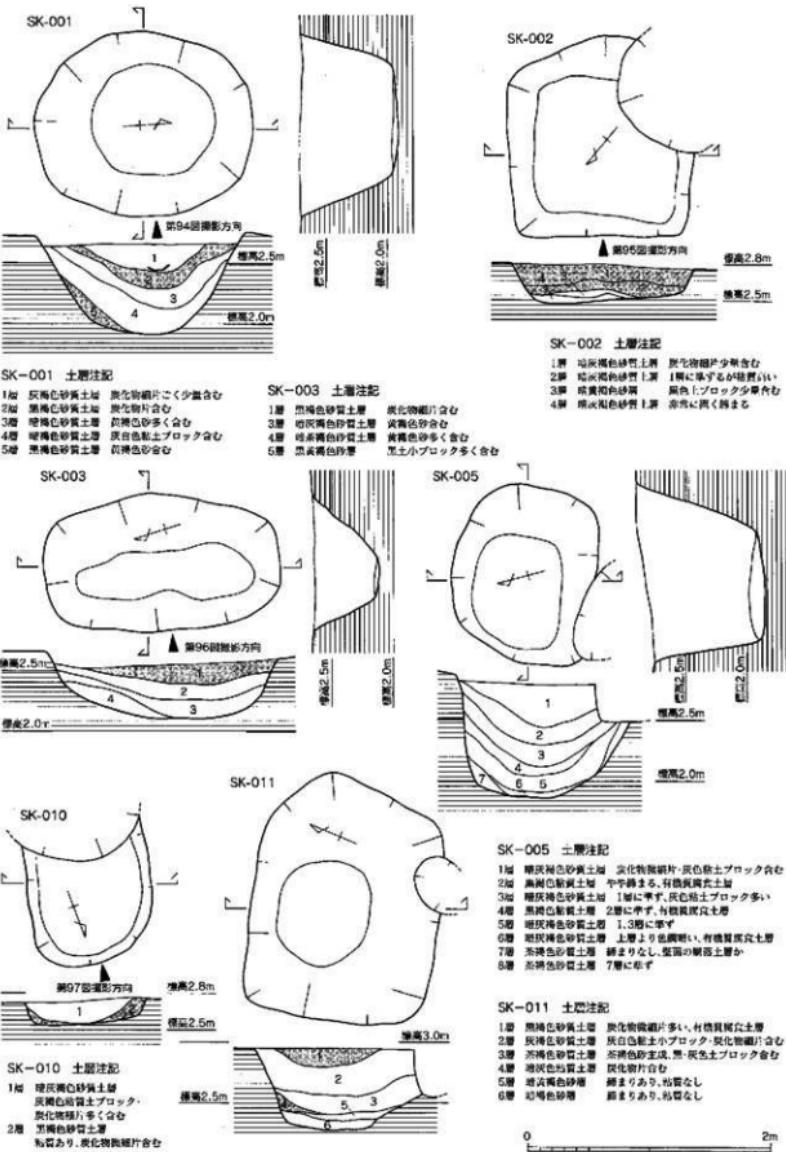
▲第95図 SK-002土壙全景（北西から）



▲第96図 SK-003土壙遺物出土状況（西から）



▲第97図 SK-010土壙遺物出土状況（北から）



▲第98図 SK-001~003、005、010、011土壤及び土層断面実測図（縮尺1/40）

1.3~1.4cm。胎土白色砂粒合み、色調は鳥の子~メイズ。384~386は土師器坏で口径13.6~14.9cm、器高2.7~3.3cm。胎土白色砂粒合み、色調は鳥の子。

出土遺物から、SK-003土壤の年代は12世紀前半代と考えられる。

SK-005 (第98図中右)

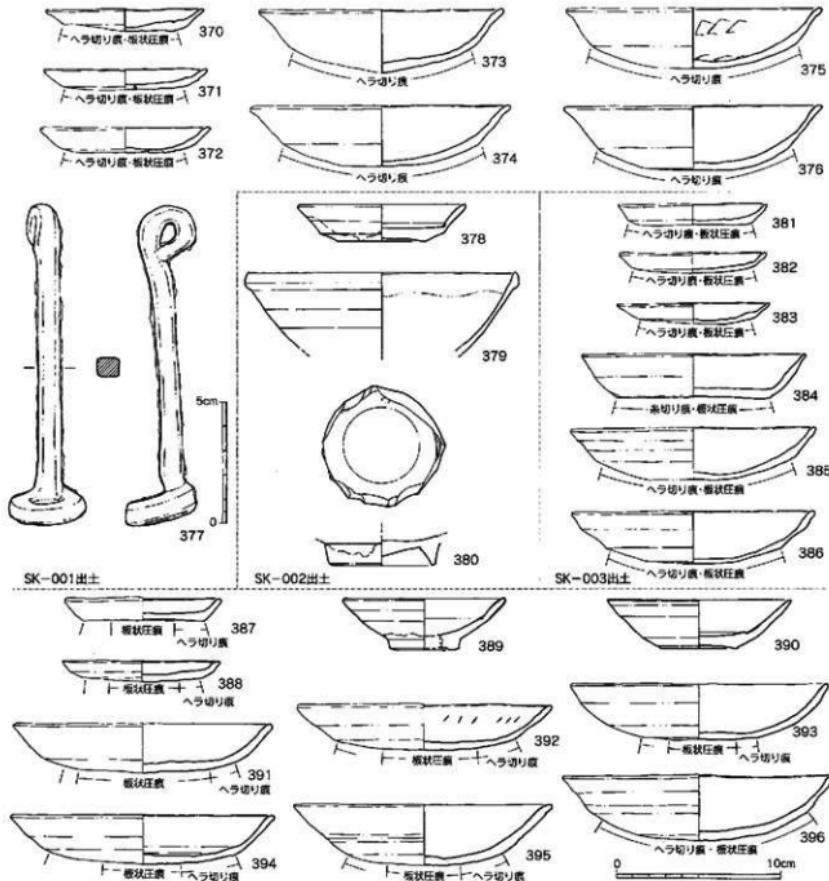
C-4グリッドで検出した。切り合い関係は、SK-077土壤とピットに切られる。検出面での平面形

は長さ1.4m×幅1.1m程度の隅丸方形を呈すると考えられる。検出面からの深さは約1.0mを測る。

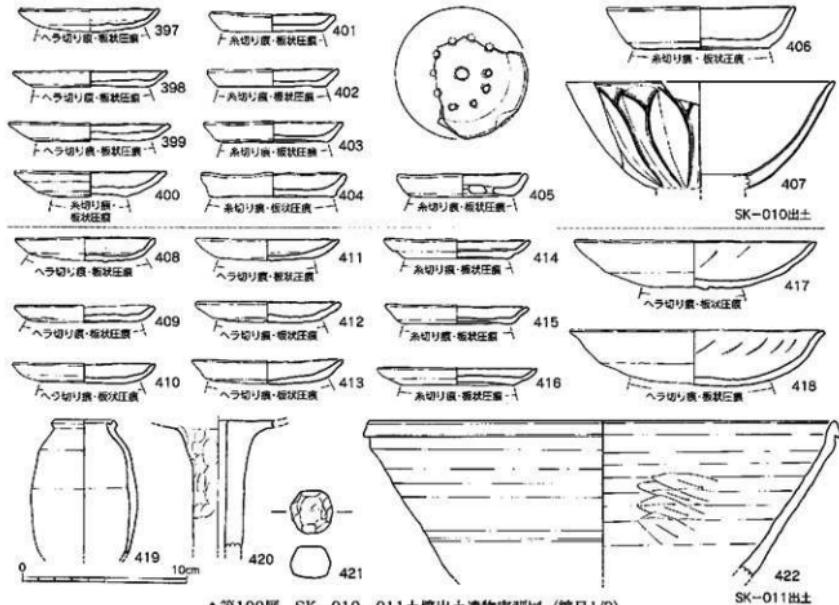
覆土は、黒褐色有機質腐食土層と人为的に埋めたと考えられる灰褐色粘質土ブロックを含んだ砂質土層の互層であり、廃棄土壤と考えられる。

出土遺物 (第99図下)

387、388は土師器皿で頸に口径9.4、9.6cm、器高1.4、1.3cm。胎土白色砂粒・茶褐色細粒合み、



▲第99図 SK-001~003、005土壤出土遺物実測図 (縮尺1/3、1/2)



▲第100図 SK-010、011土壤出土遺物実測図 (縮尺1/3)

色調はサンライズイエロー。389は白磁皿II-1-a類。390は白磁皿。391~396は土師器環で口径15.4~16.6cm、器高2.8~4.0cm。内器面に板状工具のナデが観察される。

出土遺物から、SK-005土壤の年代は12世紀前半代と考えられる。

SK-010 (第97図、98図下左)

D-2グリッドで検出した。切り合ひ関係はピットを切り、近・現代の擾乱に切られる。検出面での平面形は、長さ1.2m以上×幅1.0mの橢円形を呈すると考えられる。検出面からの深さは約0.2mを測る。覆土は有機質腐食土層と灰褐色粘質土ブロックを含む砂質土、黄褐色砂主成の砂質土層の互層で、廃棄土壤と考えられる。

出土遺物 (上図上)

397~405は土師器皿で口径7.7~9.8cm、器高1.1~1.6cm。405は焼成後、見込みに十一曜紋状の穿孔を行う。406は土師器環で口径11.5cm、器高2.6cm。407は龍泉窯系青磁碗I-5-b類。

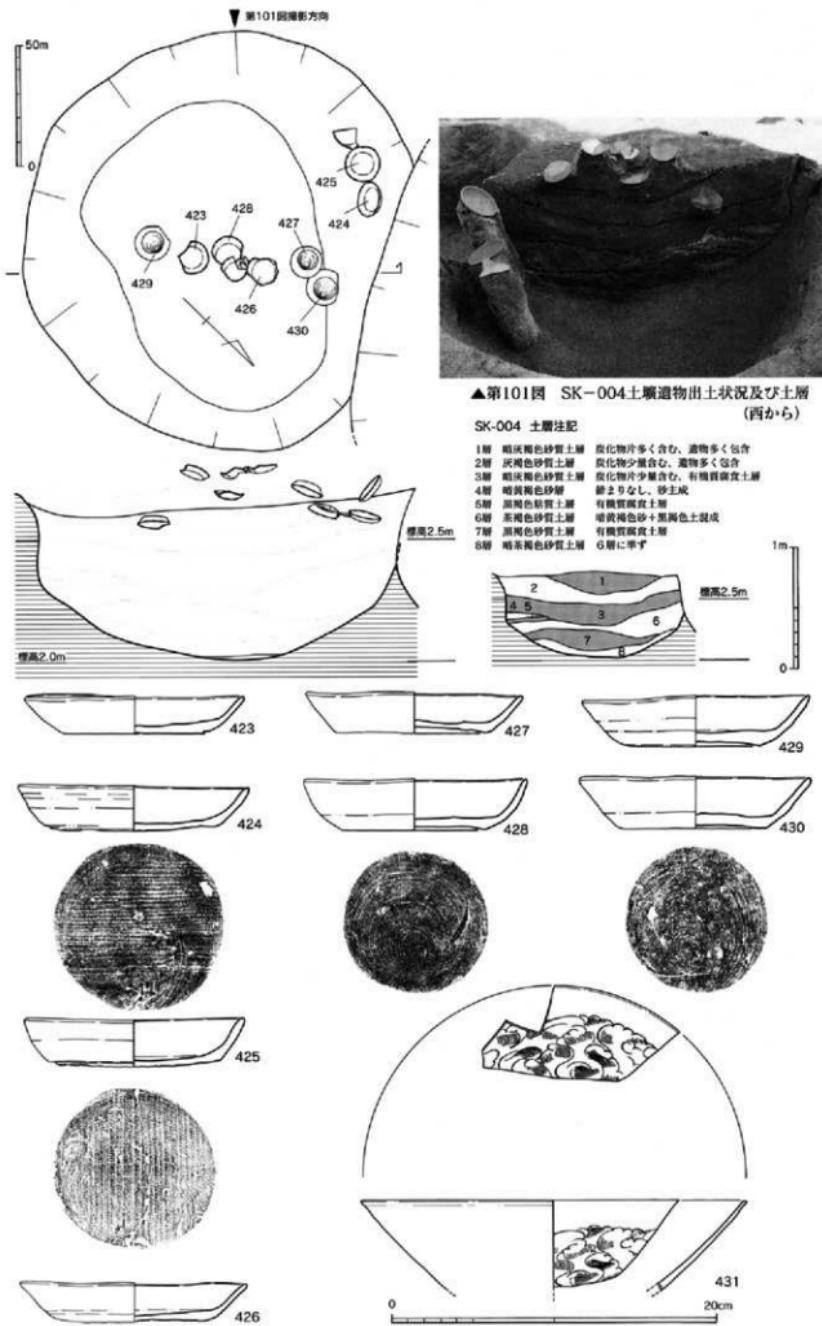
出土遺物から、SK-010土壤の年代は13世紀後半代と考えられる。

SK-011 (第98図右)

C-4、D-4グリッドで検出した。検出面での平面形は長さ2.0m×幅1.5mの不整形な長方形を呈する。検出面からの深さは、約0.7mを測る。覆土は、有機質腐食土層と灰褐色粘質土ブロックを含む砂質土、黄褐色砂主成の砂質土層の互層で、廃棄土壤と考えられる。

出土遺物 (上図下)

408~416は土師器皿で口径8.5~9.8cm、器高1.1~1.5cmを測る。417、418は土師器環で頭に口径14.7~15.6cm、器高3.0、3.5cmを測る。419は灰釉陶器小壺で復元口径4.0cm。口縁部内側に明確な段が付く。胎土は橙色で、白色細砂を少量含む。外器面は極めて薄く施釉され、色調はベージュを呈す。419は土師質土器の器台片。420は瓦転用の瓦。421は束縛式須恵器鉢で、復元口径28.2cm。



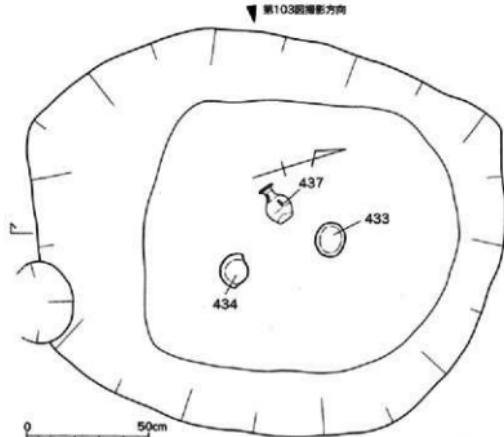
▲第101図 SK-004土壤遺物出土状況及び土層
(西から)

SK-004 土層注記

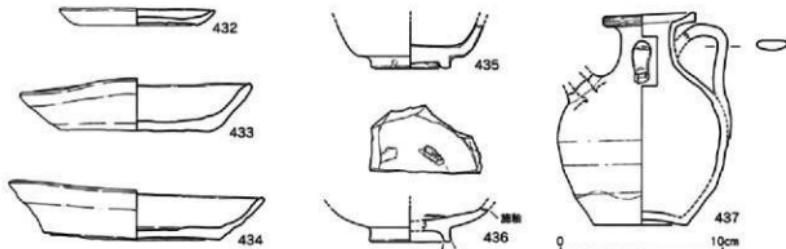
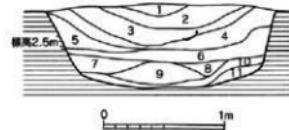
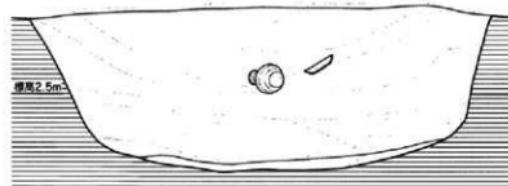
- 1層 單灰褐色砂質土層 煙化物片多く含む、遺物多く包含
- 2層 深褐色砂質土層 煙化物少種含む、遺物多く包含
- 3層 單灰褐色砂質土層 煙化物片少種含む、有機質微度土層
- 4層 單黃褐色砂質土層 新さりなし、砂主成
- 5層 單褐褐色砂質土層 有機質微度土層
- 6層 單褐褐色砂質土層 單黃褐色砂・單褐褐色土層成
- 7層 單褐褐色砂質土層 有機質微度土層
- 8層 單褐褐色砂質土層 6層に準ず

▲第102図 SK-004土壤遺物出土状況、土層断面及び出土遺物実測図 (縮尺1/20.1/40.1/3)

第3章 調査の記録



▲第103図 SK-006土壌遺物出土状況（西から）



▲第104図 SK-006土壤遺物出土状況、土層断面及び出土遺物実測図（縮尺1/20.1/40.1/3）

胎土に白色砂粒を含み、灰色を呈す。

出土遺物から、SK-011土壌の年代は12世紀前半と考へられる。

SK-004（第101、102図）

C-4グリッドで検出した。検出面での平面形は径約1.7mの円形を呈すると考へられる。検出面からの深さは約0.7mを測る。覆土は、有機質腐食土層と灰褐色粘質土、暗黄褐色砂の混成土層の互層であった。1・2層を中心に完形品を含んだ土師器坏を主体とした遺物が出土した。以上の状況から廃棄土壌と考へられる。

出土遺物（第102図下）

423～430は底部回転糸切り離しの土師器坏で口径13.2～14.2cm、器高2.5～3.2cm。426迄は胎土に白色砂粒・茶褐色細粒を含み、色調サンライズイエローを呈す。また、底部の板状压痕の目幅がやや広い。427以降は胎土の混入物に茶褐色細粒が確認されず、色調烏の子を呈す。また、板状压痕の目幅が細かい。431は白磁繪花文鉢。胎土や黄みがかった白色を呈し精良。色調緑みの白を呈す。

出土遺物から、SK-004土壌の年代は13世紀初頭～前半と考へられる。

SK-006 (第103、104図)

B-3、C-3グリッドで検出した。切り合い関係はピットに切られる。検出面での平面形は長さ2.0m×幅1.65mの不整形な梢円形を呈する。検出面からの深さは、約0.7mを測る。覆土は有機質腐食土層と茶褐色砂質土層の互層状をなし、2・3層を主体に土師器や輸入陶磁器が出土した。廃棄土壌と考えられる。

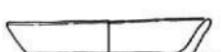
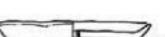
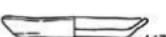
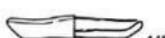
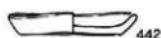
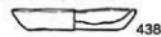
出土遺物 (第104図下)

432は底部回転糸切り離しの土師器皿で口径9.6cm、器高1.1cmを測る。433、434は底部回転糸切り離しの土師器坏で順に口径14.2、15.6cm、器高3.2、3.6cmを測る。435は青磁小碗の底部片。混入品の可能性がある。436は高麗青磁皿。胎土オイスター色を呈し、白色砂粒を含む。全面に薄く施釉され色調はベージュ。見込みに白色胎土目が現れる。437は褐釉陶器水注で、器高13.0cm、胸部最大径10.4cm、口径5.6cmを測る。胎土橙～鼠色を呈し白色砂粒を含む。色調はオイスター～トープを呈す。

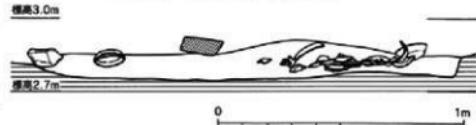
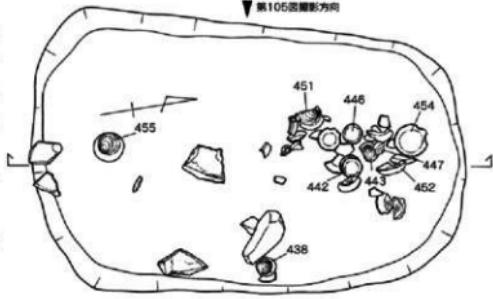
出土遺物から、SK-006土壌の年代は12世紀後半代と考えられる。

SK-008 (第101、102図)

D-2グリッドで検出した。切り合い関係はSE-376井戸、ピット等を切る。検出面での平面形は、長さ3.5m×幅2.3mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは約0.3mを測る。覆土は炭化物細片と多量の完形品を含めた土師器を包含する。廃棄土壌と考えられる。



▲第105図 SK-008土壤遺物出土状況 (西から)
▼第105号断面方向



0 1m

▲第104図 SK-008土壤遺物出土状況及び出土遺物実測図 (縮尺1/20, 1/3)

出土遺物（第104図下）

438～449は底分回転糸切り離しの土師器皿で口径7.5～8.8cm、器高1.1～1.5cmを測る。450～455は底分回転糸切り離しの土師器壺で口径11.9～13.1cm、器高2.4～3.2cmを測る。胎土に白色砂粒を含み、色調は鳥の子を呈す。

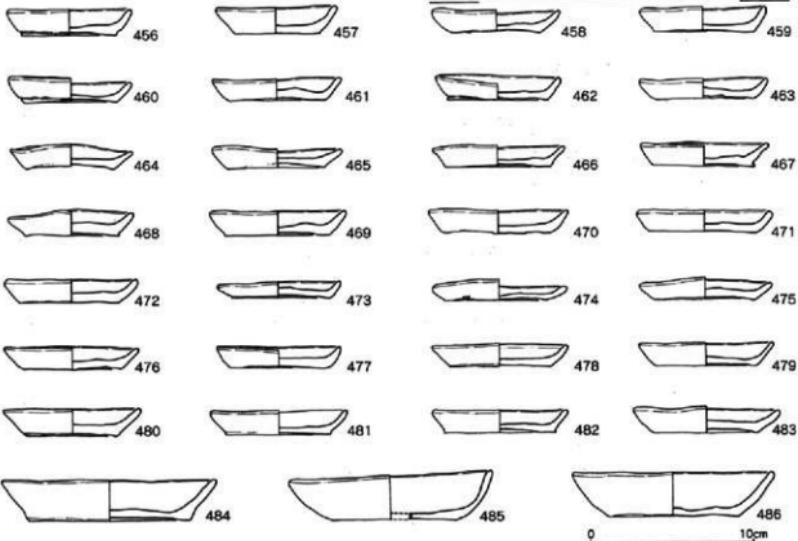
出土遺物から、SK-008土壤の年代は13世紀後半と考えられる。

SK-017（第107、108図）

C-3グリッドで検出した。切り合ひ関係はSK-336土壤に切られる。検出面での平面形は、長さ1.0m以上、幅1.0m程度の隅丸長方形もしくは梢円形と考えられる。検出面からの深さは約0.5mを測る。多量の完形品を含めた土師器が廃棄された状態で、また機質腐食土層中から魚骨少量が出土した。

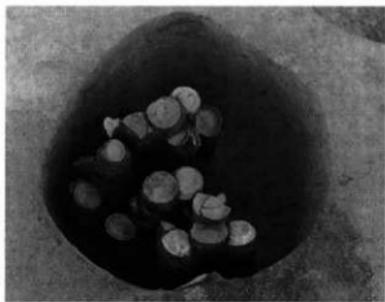
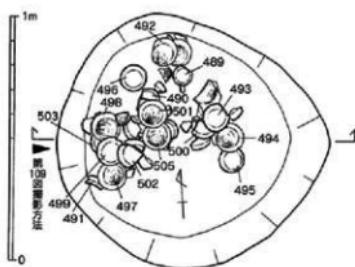
出土遺物（第108図下）

456～483は底部回転糸切り離しの土師器皿で口径7.1～8.4cm、器高1.0～1.6cmを測る。484～486は底部回転糸切り離しの土師器壺で口径12.4～13.0cm、器高2.5～2.9cmを測る。487は北宋代



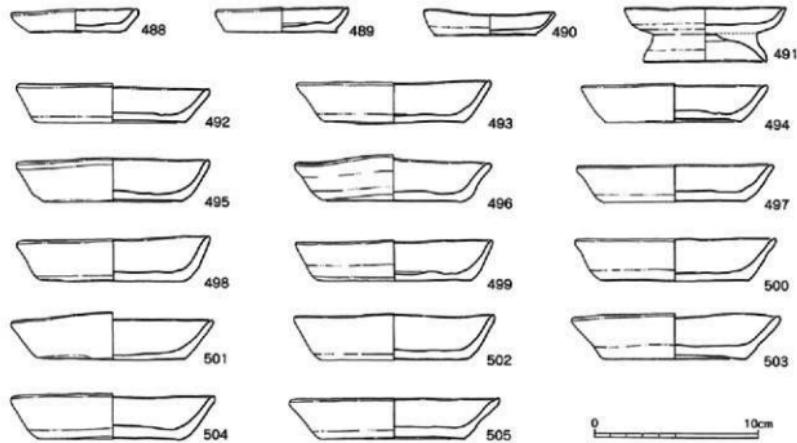
▲第108図 SK-017土壤遺物出土状況、出土遺物実測図及び銅錢拓影
(縮尺1/20、1/3、1/1)





▲第109図 SK-018土壤遺物出土状況（西から）

SK-018 土層注記
1層 沢原色粘土層
沢原色青土とブロック多く含む
2層 黒褐色粘土層
灰化物・瓦ぬき瓦土ブロック・
焼土塊含む、有機質高含土層
3層 沢原色粘土層
灰化物・青色含む
4層 黒褐色粘土層
2層に準ず



▲第110図 SK-018土壤遺物出土状況、土層断面及び出土遺物実測図（縮尺1/20, 1/40, 1/3）

の銅鏡で、篆書体の「天聖元寶」(初鋤年西暦1023年)である。直径2.5cm、厚さ0.1cmを測る。

出土遺物から、SK-017土壤の年代は13世紀中葉と考えられる。

SK-018 (第109、110図)

B-2グリッドで検出した。切り合い関係はピットを切る。検出面での平面形は直径1.1m程度の不

整形な円形を呈する。検出面からの深さは約0.4mを測る。覆土は生活残滓に由来すると考えられる有機質腐食土と、人為的に埋めたと考えられる粘質土ブロックを含む砂質土の互層状で、多量の完形品を含めた土解器が発見された状態で出土した。

出土遺物 (第110図下)

488~490は底部回転糸切り離しの土解器皿で、

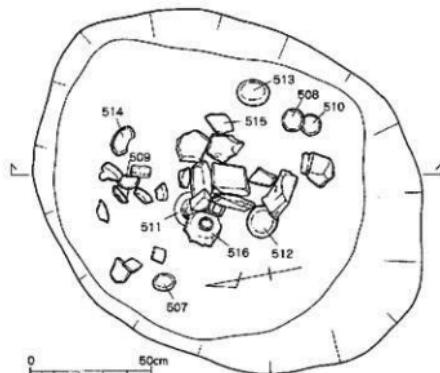
口径7.8~8.2cm、器高1.3~1.6cmを測る。491は土師器高台付皿で復元口径9.8cm、器高3.3cmを測る。492~505は底部回転糸切り離しの土師器皿で口径11.4~12.7cm、器高2.0~2.9cmを測る。

出土遺物から、SK-018土壤の年代は13世紀末~14世紀初頭と考えられる。

SK-019 (第111図)

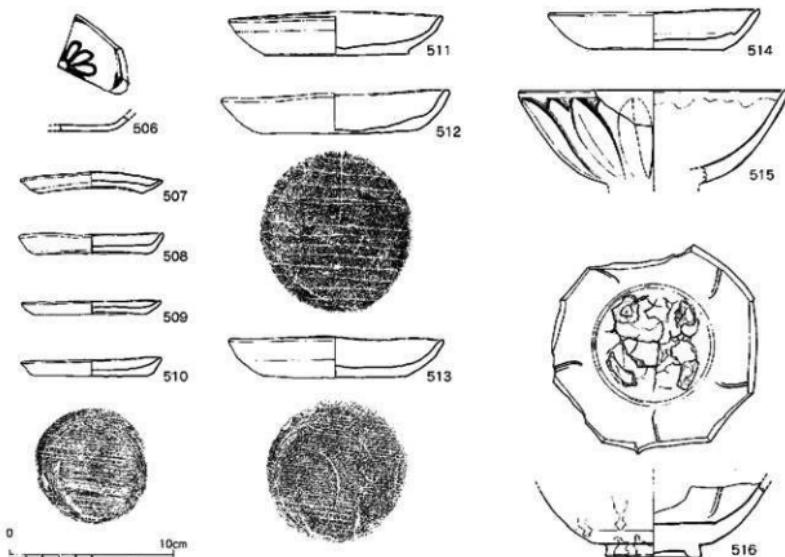
B-3グリッドで検出した。切り合ひ関係はSD-226溝、SE-477井戸、ピットを切る。検出面での平面形は、長さ1.75m×幅1.4m程度の不整形な梢円形を呈する。検出面からの深さは約0.3mを測るが、遺物が検出面よりも浮いた状態で出土しているので、元来はより上面から掘り込まれたと考えられる。覆土は有機質腐食土と砂質土の互層状を呈する。1層を中心として土師器・青磁・瓦器の他、石が等出土した。出土遺物 (第111図下)

506は和泉産瓦器皿の底部片で見込みに菊花文状の暗文が、また体部に同心円状と考えられる細かい暗文が観察される。胎土は概ね精良で白色砂粒を含み、灰色を呈す。507~510は底部糸切り離しの土



SK-019 土壌注記

- 1層 水銀色粘土土層
炭化植物含む、遺物多く包含
- 2層 灰灰褐色粘土土層
上層より色調明るい、粗砂含む
- 3層 灰灰褐色粘土土層
1層に準ず



▲第111図 SK-019土壤遺物出土状況、土層断面及び出土遺物実測図 (縮尺1/20, 1/40, 1/3)

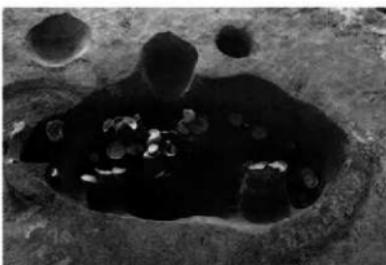
御器皿で口径8.3～8.7cm、器高0.9～1.3cmを測る。

511～514は底部糸切り離しの土師器皿で口径13.0～13.7cm、器高2.3～2.5cmを測る。514は龍泉窯系青磁碗I-1・b類で口径16.1cmに復元される。釉調透明であるが、発色良好でなく、色調メロンイエローを呈す。515は龍泉窯系青磁碗である。内器面体部5ヶ所に櫛描文を施す。見込みに白色砂目が4ヶ所に残り、研磨痕が見られる。見込みの釉薬に縫が入り、一部が剥落する。釉調透明度低く、色調セージグリーンを呈す。

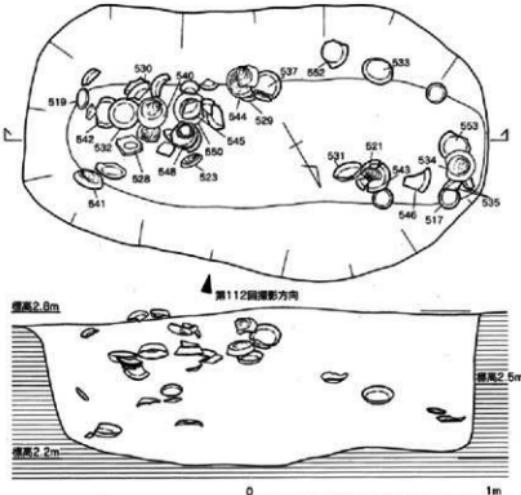
出土遺物から、SK-019土壤の年代は13世紀後半代と考えられる。

SK-022 (第112、113図)

B-2グリッドで検出した。切り合い関係はSB-004掘立柱建物、ピットを切る。検出面での平面形は長さ1.85m×幅1.0m程度の不整形な楕円長方形を呈する。検出面からの深さは約0.6mを測る。覆土は炭化物を含んだ砂質土で、粘質は殆どない。1、2層から多量の完形品を含んだ土師器を中心とし、青磁片、炭化米等が出土している。



▲第112図 SK-022土壤遺物出土状況(西から)



▲第113図 SK-022土壤遺物出土状況及び土層断面実測図 (縮尺1/20、1/40)

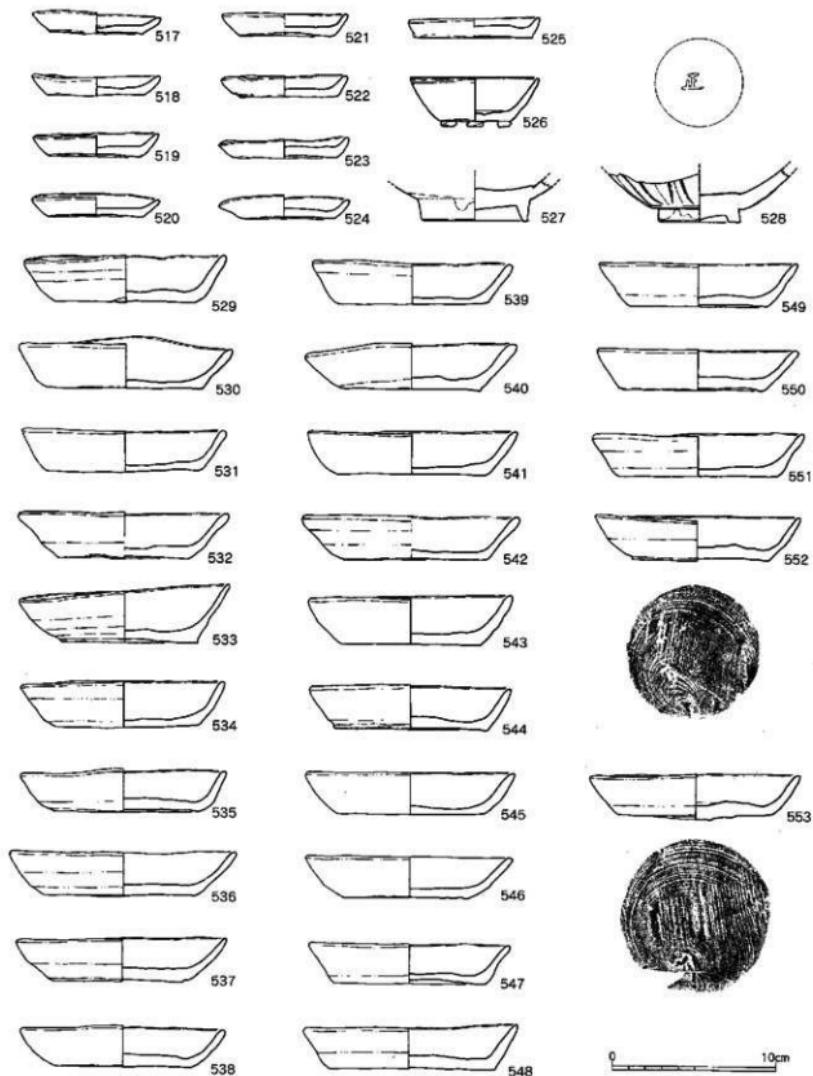
出土遺物 (第114図)

517～525は底部回転糸切り離しの土師器皿で口径7.5～8.0cm、器高1.2～1.4cmを測る。526は瀬戸産灰釉陶器の小壺で復元口径7.9cm、器高3.0cmを測る。底部は回転糸切り離しの後、粒状の脚を3ヶ所に貼り付ける。外器面は口唇部近くまで露胎で、内器面には極めて薄く施釉されている。施釉後に釉薬を掻き取った可能性がある。胎土は灰色を呈し、白色・黒色細砂を含む。色調黄みの明るい灰色を呈す。527は白磁碗V類の底部片である。528は龍泉窯系青磁碗I-5類である。外器面には鍋弁文、見込みに「正」字印文を施す。釉の発色良好でなく、色調ベージュを呈す。529～553は底部回転糸切り離しの土師器皿で口径12.2～13.8cm、器高2.4～3.1cmを測る。

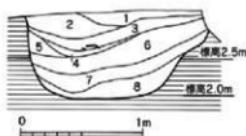
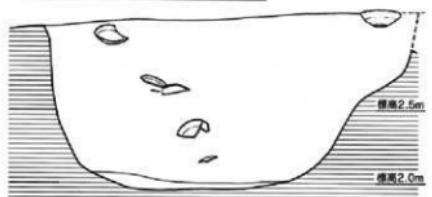
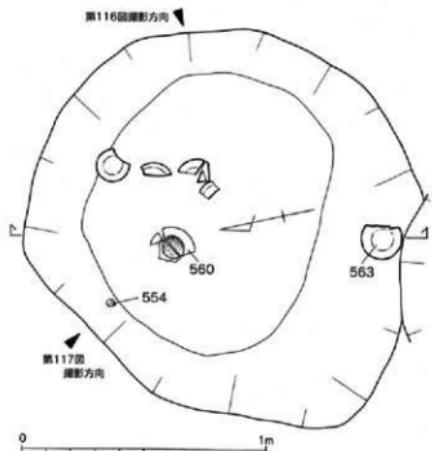
出土遺物から、SK-022土壤の年代は13世紀後半代と考えられる。

SK-061 (第115、116、117図)

D-3グリッドで検出した。切り合い関係はSK-062土壤に切られる。検出面での平面形は長径1.8m×短径1.5m程度の不整形な椭円形を呈する。検

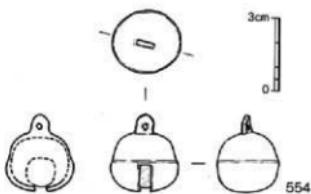


▲第114図 SK-022土壤出土遺物実測図（縮尺1/3）

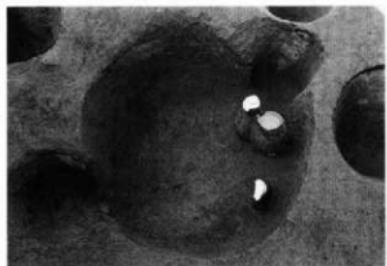


SK-061 土層注記

- 1層 暗灰褐色粘質土層
炭化物片合む
- 2層 灰褐色砂質土層
炭化物片・灰色土ブロック合む
- 3層 灰褐色砂質土層
遺物含む、有機質灰土層
- 4層 黒褐色砂質土層
- 5層 に準るが、色調暗い。
- 6層 反白色砂質土層
ほぼ地土の上に構成される
- 7層 灰褐色砂質土層
炭化物片少合む
- 8層 素褐色砂質土層
灰褐色砂質土ブロック合む

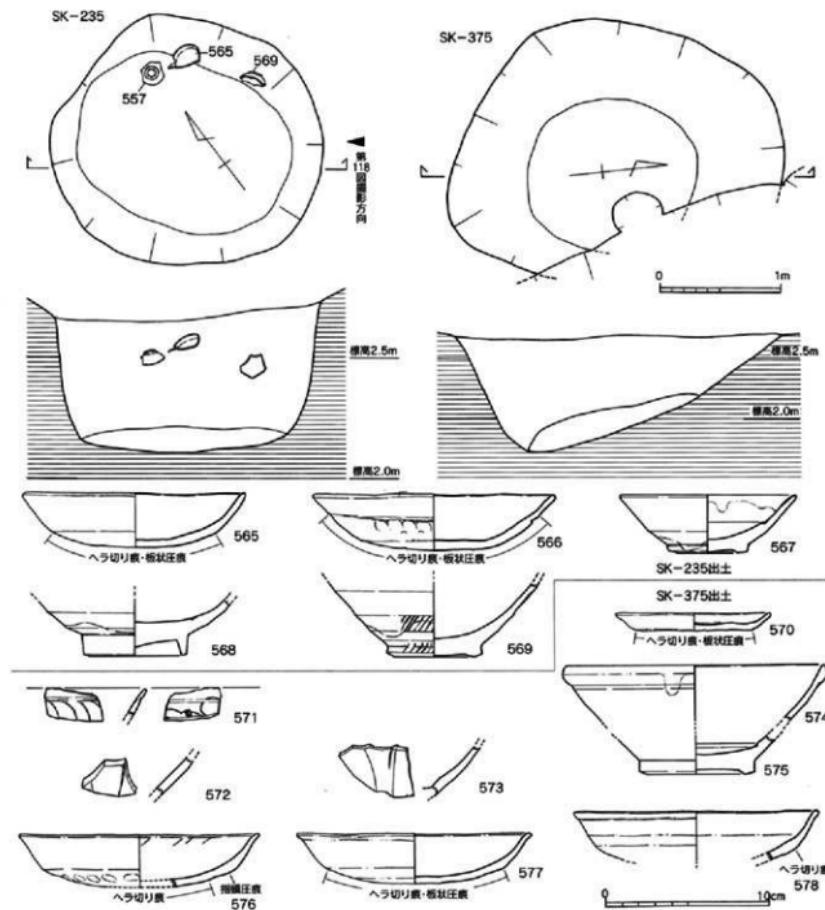


▲第115図 SK-061土壤遺物出土状況、土層断面及び出土遺物実測図 (縮尺1/20, 1/40, 1/3, 1/2)



表面からの深さは約0.6mを測る。覆土は灰褐色粘質土と有機質腐食土の互層状を呈する。3、4層を中心完形品を含んだ土師器や、白磁・瓦器・銅鏡等、また炭化米が少量出土した。

◀第118図 SK-235土壤遺物出土状況（南東から）



▲第119図 SK-235土壤遺物出土状況、SK-375及び出土遺物実測図（縮尺1/20、1/40、1/3）

出土遺物（第115図下）

554は完形品の青銅製鉢で器高3.15cm、径2.6~2.8cmを測る。形状は腹部が凹み、下半が膨らんだ球形を呈する。鉢は鉢口にはほぼ直交で、舌状を呈し円形の孔が穿たれる。内部に鉄製丸が残る。555~559は土師器皿で口径8.3~9.8cm、器高1.1~1.5cmを測る。560~562は土師器皿で口径15.2~15.8cm、器高3.2~3.8cmを測る。561、562の内器面には板状工具によるナデ調整がみられる。563はほぼ完形品の瓦器碗で口径16.4cm、器高4.6~5.6cmを測る。胎土は精良である。内器面のヘラ磨きは不明瞭。外器面には横方向のヘラ磨きが施される。564は白磁碗の底部片で、高台は低く削り出される。極めて薄く施釉され、色調は黄みの灰白色を呈す。

出土遺物から、SK-061土壤の年代は12世紀前半代と考えられる。

SK-235（第118、119図左上）

C-4、D-4グリッドで検出した。切り合い関係はピットを切る。検出面での平面形は長径1.1m×短径1.0m程度の楕円形を呈する。検出面からの深さは約0.6mを測る。覆土は有機質腐植土と炭化物を含んだ砂質土からなる。土師器・白磁等が出土している。

出土遺物（第119図）

565、566は土師器皿で、法量は順にII径13.8cm、14.8cm、器高3.3cm、3.5cmを測る。内器面には板状工具によるナデ調整がみられる。567は白磁皿II-1-a類で、復元口径10.8cm、器高3.6cmを測る。高台は非常に低く、口縁端部は丸く收める。釉調透明で、色調は黄みの白を呈す。568は白磁碗の底部片で、高台は細く高い。胎土は灰白色を呈し、黒色細粒を含む。薄く施釉され、色調は灰みの白を呈す。569は白磁碗の底部片で、高台は非常に低く削り出される。色調は白を呈す。

出土遺物から、SK-235土壤の年代は12世紀前半代と考えられる。

SK-375（第119図右上）

C-2グリッドで検出した。切り合い関係はSE-376・523井¹⁾、ピット等に切られる。検出面での平面形は長さ1.2m×幅1.1m程度の楕円方形を呈

すると考えられる。検出面からの深さは約0.5mを測る。覆土は有機質腐植土と炭化物を含んだ砂質土からなる。土師器・白磁等が出土している。

出土遺物（第119図下）

570は土師器皿で復元口径9.6cm、器高1.1cmを測る。胎土に白色砂粒を含み、色調烏の子色を呈す。571~573は広東産蓮弁文白磁碗の破片である。何れも胎土が生成色を呈し、軟質で黒色細砂を含む。白化粧の上に薄く施釉され、器面にはビンホールと嵌入がある。色調は生成色を呈す。571は口縁部片で、内・外器面に凹線が巡る。内器面には板状工具による施文が行われる。572、573の外器面には蓮弁文が施文される。574は白磁皿IV類で、II径16.2cmに復元される。口縁部の玉縁大きい。575は白磁碗の底部で、高台は低く削り出される。576~578は土師器皿で、口径14.4~15.0cmに復元される。内器面には板状工具によるナデ調整がみられる。

出土遺物から、SK-375土壤の年代は11世紀後半代と考えられる。

（5）溝

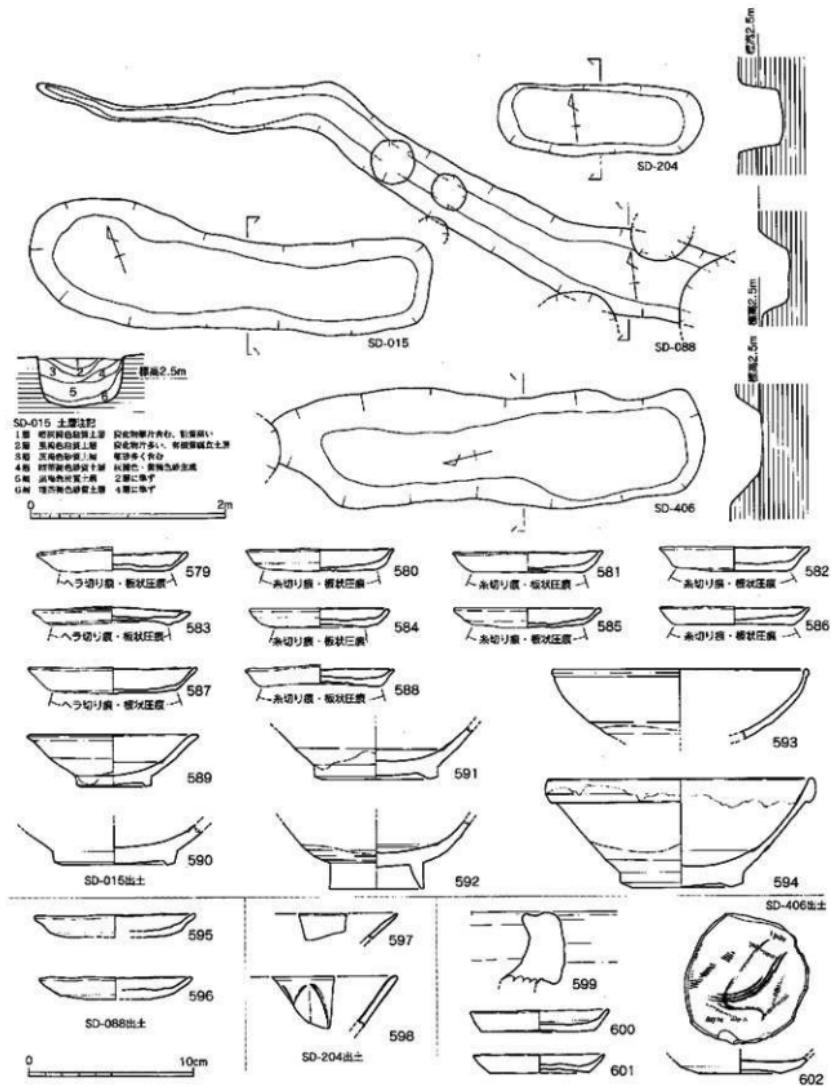
溝は認定できるもので9条を検出した。この内C-1、2グリッドで検出したSD-176・178・180は、主軸をN-3~4°-Wにとり真北に近い方位である。出土遺物は底部へラ切り離しの土師器、黒色土器や瓦器の細片があるので図示していないが、これらの出土遺物や切り合い関係から12世紀以降の造構ではないと考えられる。また、これら溝の主軸とほぼ同じ方位をとる柱穴列を検出しているが、掘立柱建物は復元できなかった。

SD-015（第120図上）

D-2グリッドで検出した。切り合い関係はSD-176溝、ピット等を切り、ピットに切られる。検出面での平面形は、長さ約4.1m×幅約0.9~1.3mを測る。検出面からの深さは約0.5mを測り、断面形は逆台形を呈する。土師器・白磁等が出土している。

出土遺物（第120図）

579~588は土師器皿で口径9.0~10.3cm、器高1.0~1.6cmを測る。589は白磁皿II-1-a類で復元口径10.6cm、器高3.1cmを測る。590~592は白



▲第120図 SD-015、088、204、406溝及び出土遺物実測図 (縮尺1/50、1/3)

磁碗底部片。前二者は高台が非常に低く、後者は細く高い。593は白磁碗口縁部片で内湾気味に立ち上がり、端部は小さい玉縁である。594は白磁碗IV-

1・a類で口径16.6cm、器高6.5cmを測る。

出土遺物から、SD-015溝の年代は12世紀前半代と考えられる。

SD-088 (第120図上)

A-4、B-4グリッドで検出した。切り合い関係はSE-500井戸を切り、SB-001掘立柱建物、SX-012性格不明遺構に切られる。検出面での平面形は「く」の字状を呈し、長さ約7.0m遺存し、幅は西側で約0.1、東側で0.9mを測る。検出面からの深さは深い箇所で約0.3mを測り、断面形は逆台形を呈する。土師器・白磁片等が出土している。
出土遺物 (第120図下段左)

595、596は底部回転ヘラ切り離しの土師器皿で、口径は順に9.8、9.3cmに復元される。

出土遺物から、SD-088溝の年代は11世紀後半代と考えられる。

SD-204 (第120図上)

B-4グリッドで検出した。切り合い関係はピットを切る。検出面での平面形は、長さ約2.1m×幅0.7mを測る。検出面からの深さは約0.5mを測り、断面形は逆台形を呈する。土師器・白磁・青磁片等が出土している。

出土遺物 (第120図下段中)

597は越州窯系青磁輪花碗の口縁部片である。胎土は灰色を呈し精良である。薄く施釉され色調はベージュを呈す。598は龍泉窯系青磁碗I-5類の口縁部片で、外器面に鑄蓮弁文を施す。

出土遺物から、SD-204溝の年代は13世紀前半代と考えられる。

SD-406 (第120図上)

B-2、3グリッドで検出した。切り合い関係はSE-407井戸を切り、ピットに切られる。検出面での平面形は、長さ4.3m以上、幅1.2mを測る。検出面からの深さは約0.3mを測り、断面形は逆台形を呈する。土師器・白磁・青磁・同窯陶器片等が出土している。

出土遺物 (第120図下段右)

599は中国産陶器大甕の口縁部片である。胎土は赤褐色を呈し白色砂粒を多く含む。外器面に施釉（もしくは自然釉）され色調海松色を呈す。600、601は底部糸切り離しの土師器皿で、法量は順に口径8.5cm、7.8cm、器高1.5cm、1.2cmを測る。601は同窯系青磁皿I-2類転用の打毬である。

出土遺物から、SD-406溝の年代は14世紀後半代と考えられる。

(6) 性格不明遺構

SX-012 (第121、122図)

B-4、C-4グリッドで検出した。複数の焼上面をもつ2基の土壙からなる。検出面での平面形は前段階の遺構が長さ1.7m以上、幅1.6m、深さ0.7mの隅丸長方形を、後段階の遺構が一辺約1.4m、深さ約1.2mの隅丸方形を呈する。

後段階の遺構は、下半に粘質の強い暗灰褐色土が堆積しており、上半は灰褐色砂質土層と暗赤褐色土層(焼土層)の互層状を呈している。焼土層は3面確認された。内、最下面是灰色粘土を貼って火を焚いたと考えられ、焼け方の弱い部分は赤変せず、焼土を形成していない。また上2面の上面には炭化物が薄く堆積しており、焼いた後に炭化物を焼き出したことが想定できる。各焼土面は浅い凹み状を呈する。

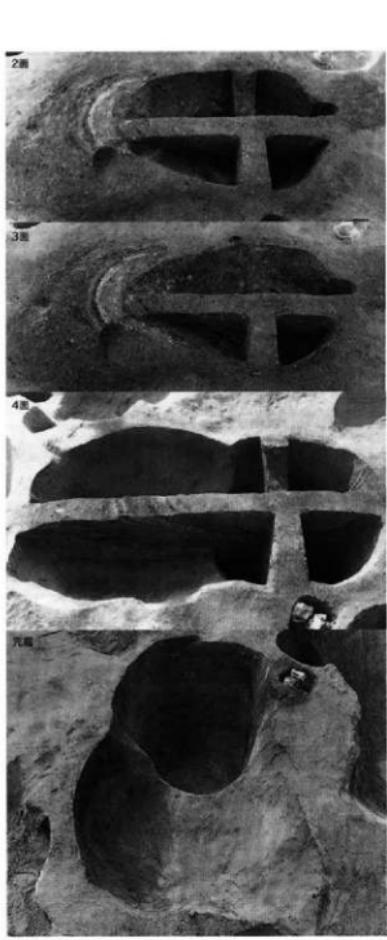
前段階の遺構は後段階のそれに切られているが、基本的な土層堆積状況は同じである。ここでは灰白色粘土層と焼土層を合わせて3面確認した。また、最も古い段階の焼土面の下層で炭化米が検出された。

炭化米の出土から、生活残滓を廃棄した廃棄土壤とも考えられるが、灰色粘土を床面に貼り付けて火を焚く等、單なる廃棄土壤とは考えがたい。今後の類例の増加を待って判断したい。

出土遺物 (第123図)

603~609は底部回転ヘラ切り離しの土師器皿で、口径8.6~9.2cm、器高1.2~1.5cmを測る。完形品を含む。610~613は底部回転ヘラ切り離しの土師器皿で、口径14.8~15.4cm、器高2.8~3.6cmを測る。完形品に近いものも含む。610は内器面にヘラ磨きの痕跡が認められる。614は瓦器碗で、復元口径15.6cm、器高5.4cmを測る。外器面に粗い横方向のヘラ磨きが施される。615は白磁碗V-4類で色調はやや緑みの白を呈す。616は白磁碗V-3-a類で色調は黄みの白を呈す。

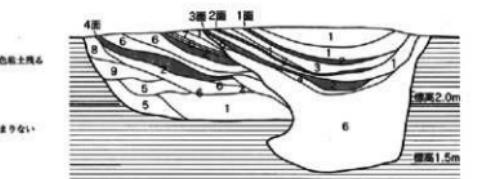
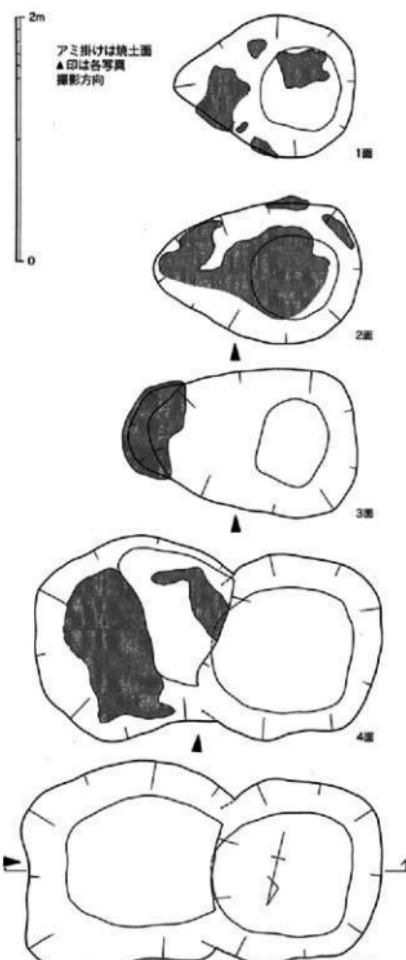
出土遺物から、SX-012の年代は12世紀前半と考えられる。



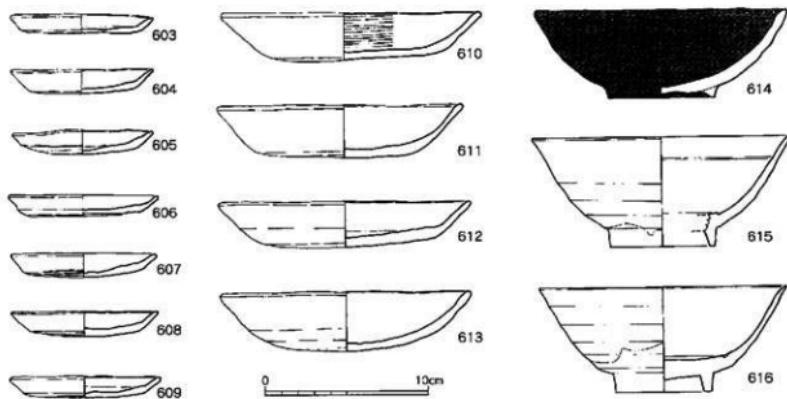
▲第121図 SX-012性格不明遺構
(北及び東から)

SX-012 土層淀記

- | | | |
|----|----------|--|
| 1層 | 灰褐色砂質土層 | 縫まりあり、粘質なし。 |
| 2層 | 暗赤褐色粘質土層 | 灰土質、非常に固く締まる。上面に炭化物層、部分的に灰色粘土層の
玄蕃に固く締まる。 |
| 3層 | 暗赤褐色土層 | 縫まりあり、粘質なし。 |
| 4層 | 黒色粘土層 | 縫まりあり、粘子質か。 |
| 5層 | 青褐色砂層 | 縫まりあり、粘質なし。 |
| 6層 | 灰褐色砂質土層 | 縫まりあり、粘質高い、炭化物片・灰土小ブロック含む
非常に固く締まる。 |
| 7層 | 灰白色粘土層 | 縫まりあり、粘質なし、混入物なし。 |
| 8層 | 暗赤褐色土層 | 縫まりあり、粘質なし、混入物なし。 |
| 9層 | 暗赤褐色粘質土層 | 縫まりあり、粘質なし、混入物なし。 |



▲第122図 SX-012性格不明遺構及び土層断面実測図 (縮尺1/40)



▲第123図 SX-012性格不明遺構出土遺物実測図（縮尺1/3）

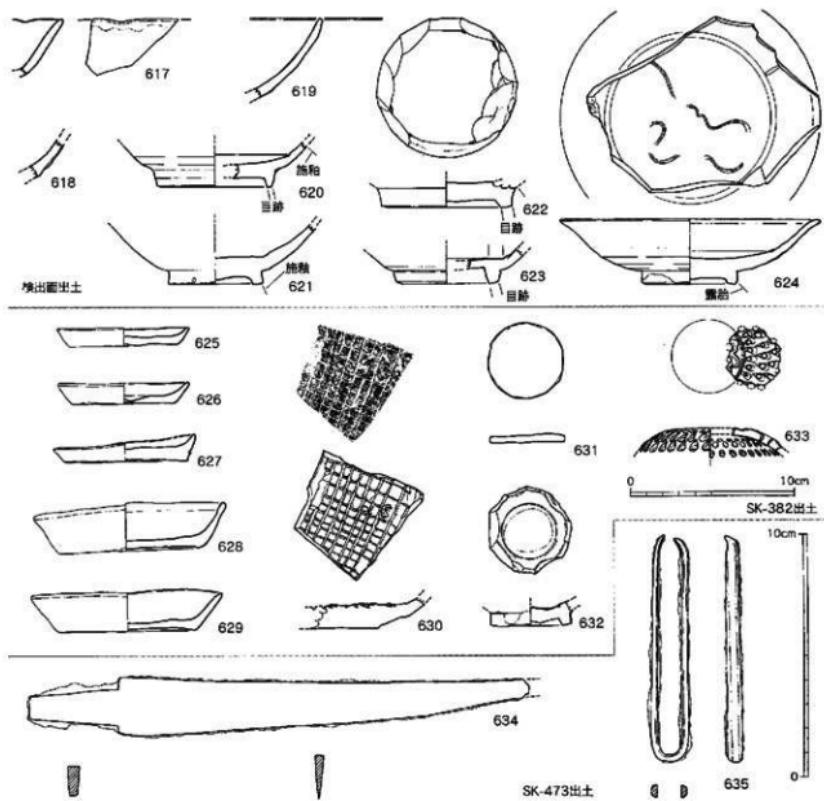
(7) その他の出土遺物（第124、125図）

617～624は遺構検出面出土の遺物である。617は越州窯系青磁輪花坏と考えられる口縁部片で、胎土は灰白色を呈し精良である。薄く施釉し、色調は鶴色。618は褐釉天目碗の細片で、胎土は灰みの白を呈し細砂を含む。色調はトープ～タバコブラウン。619～624は高麗青磁碗と考えられる。619は口縁部片で、胎土は灰色を呈し白色細砂を含む。釉調透明で色調はセージグリーン。620は底部片で、全面施釉され疊付は部分的に釉が掻き取られ跡が残る。見込みと体部の境界に圓線が巡る。胎土はオイスター色で、粗く白色・黒色粗砂を含む。色調はベージュ。621は焼成やや不良で、胎土はスカイグレイ～赤みの灰を呈す。発色不良で色調はベージュ。622は底部を転用した毬打で、胎土銀鼠～赤みの明灰色を呈し、白色細砂を含む。全面施釉され、疊付と見込みに白色耐火土目が残る。色調はベージュ。623は胎土が粗く白色細砂を含む。見込みの釉が輪状に掻き取られ、外器面底部露胎で疊付に白色耐火土目が残る。内器面はやや厚く施釉される。釉調透明性低く色調はセージグリーン。624は復元口径15.9cm、器高4.0cmを測る。口縁部はやや外反気味で、高台は低く断面四角形を呈す。底部はやや厚い。見込みに不明瞭な櫛描文が施文され、体部の境界に浅い凹

線が巡る。体部にも施文されるが明瞭でない。胎土灰色を呈し精良である。釉調透明で色調はベージュ。

625～633はSK-382出土遺物である。625～627は底部回転糸切り離しの土師器皿で口径7.8～8.6cm、器高1.1～1.3cmを測る。628、629は底部回転糸切り離しの土師器皿で法量は順に口径11.2cm、11.6cm、器高2.9cm、2.5cmを測る。630は瀬戸焼鉢皿である。底部回転糸切り離し。見込みに即口が刻み込まれ、薄く施釉され色調はベージュ。631、632はそれぞれ底部糸切りの土師器、白磁碗を転用した毬打である。633は青白磁香炉蓋である。端正な網目状の透かしがある。胎土白色を呈し精良で、色調はやや緑みの白。634、635はSK-473土壙出土。634は切先を欠く鉄製刃子で、残存長20.5cm、刃身残存長16.8cm、同元幅2.4cm、同厚0.7cm、茎部長3.7cm、同口幅1.5cm、同尻幅1.0cm、同厚0.5cmを測る。角尻で両側である。635は鉄製毛抜で、全長9.3cm、最大幅1.6cmを測る。

636～641は丸瓦、642～644は平瓦、645は、646は近世の軒丸瓦である。636はSK-478出土で凸面に格子目叩き、凹面に布目痕が残る。637はSD-406出土で、凸面に格子目叩き、凹面に布目痕が残る。638はSE-477出土で凸面に格子目叩きを施した後一部ナデ消す。凹面に布目痕が残る。



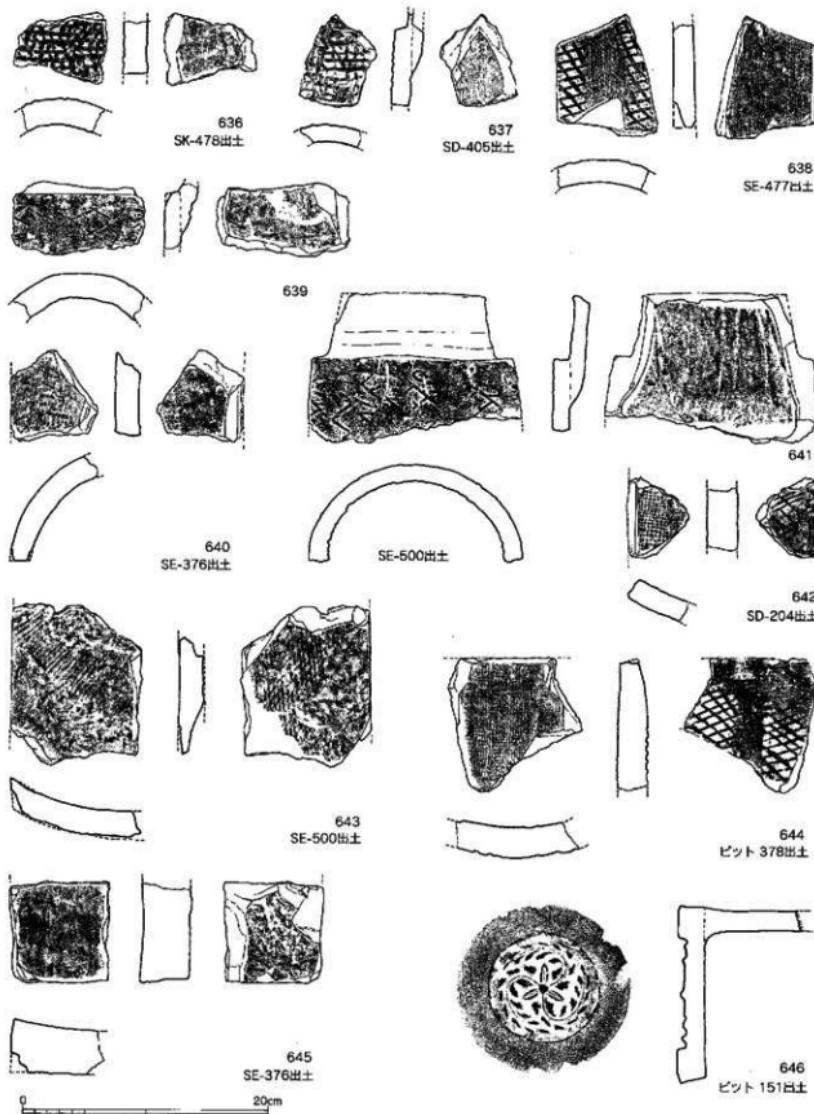
▲第124図 その他の遺構及び検出面出土遺物実測図（縮尺1/3、1/2）

639は玉縁部で凹面に格子目叩きを施した後一部ナデ消す。凹面に布目痕が残る。640はSE-376出土で凹面は叩きの後、ナデを施す。凹面の一部に布目痕が残る。641はSE-500出土の玉縁部片で凸面斜格子叩き、凹面布目痕が残る。642はSD-204出土で凸面に格子目叩きを施した後一部ナデ消す。凹面に布目痕が残る。643はSE-500出土で凸面繩目叩き、凹面布目痕を板状工具でナデ消している。胎上は白色砂粒少なく比較的精良、色調明橙褐色～灰みの赤橙色を呈す。644はピット378（主軸を真北方向に沿った東西2間分の欄間に復元できるが、元来欄列であったのか建物であったのかは不

明）出土で、凸面に斜格子叩き、凹面に布目痕が残る。645はSE-376出土の壇で厚さ4.5cmを測る。上面が磨り減っており、実際壇として長年使用されたか、もしくは磁石等に転用された可能性がある。

瓦類の総量は、コンテナケースに4箱程度である。概ね奈良時代末～平安前期の所産と考えられる。本調査区ではこの時期迄遡りうる遺構が検出されておらず、該期に瓦葺建物が存在したとは考えがたい。

646はピット151出土の藤三巴紋軒丸瓦である。苔崎宮に関連する藩主寄進の建物や、藩閥連施設等が想定されるが、現在のところ明確にしれない。



▲第125図 10区出土瓦実測図（縮尺1/4）

第4章 結語

本調査区で検出した遺構は概ね、古墳時代前期と平安時代中期～鎌倉時代にかけての二時期に大別できる。今回の報告では、時間的制約で充分な考察が行えないため、欠は今後補うこととし、ここでは遺構の時期的な変遷を追い、出土遺物と併せて若干のまとめをして結語に代えたい。

古墳時代前期の墓地

該期の遺構は6区で検出したSO-041方形周溝墓・SO-056円形周溝墓・ST-056・062・086・088雙棺墓が挙げられる。これらは庄内、布留式併行期である。北に約600m離れた箱崎遺跡第20次調査1区で検出されたSC-025堅穴住居址や、第8次調査のSC-36、58などが同時期の遺構であり、また2区や、未報告の第30次調査区でも同時期の遺構群が検出されている。既に指摘されているように、古墳時代前期の集落と墓地が砂丘東側緩傾斜面に点在していたものと推測される。

平安時代中期から中世の遺構

該期の主な遺構の時期的変遷は、以下の通りである。

6区

- 10世紀前半・・・SK-024、027方形堅穴
- 10世紀後半・・・SB-003掘立柱建物跡、SE-095、097井戸
- 11世紀前半・・・SK-098方形堅穴、SK-051土壙
- 11世紀後半・・・SK-067方形堅穴
- 12世紀前半・・・SB-001掘立柱建物跡、SK-065、072、089方形堅穴、SE-103井戸
- 12世紀後半・・・SE-015、021、083、090井戸、SK-034土壙、SR-066木棺墓
- 13世紀後半・・・SD-046溝、SX-061墓
- 14世紀前半・・・SX-081墓

9区

- 11世紀前半・・・SK-007、009、011方形堅穴
- 13世紀前半・・・SR-005木棺墓

10区

- 11世紀後半・・・SB-001掘立柱建物跡、SA-006欄列跡、SE-407、466、500井戸、SK-001、375土壙、SD-088溝
- 12世紀前半・・・SB-002掘立柱建物跡、SE-335、347、376、477井戸、SK-003、005、011、061、235土壙、SD-015溝、SX-012性格不明遺構
- 12世紀後半・・・SE-024井戸、SK-002、006土壙
- 13世紀前半・・・SK-004土壙、SD-204溝
- 13世紀後半・・・SK-008、010、017、018、019、022土壙
- 14世紀前半・・・SB-004掘立柱建物跡、SD-406溝
- 14世紀後半・・・SE-023井戸

6区で検出した最古段階の遺構は、SK-024、027方形堅穴で、10世紀前半代と考えられる。出土遺物は底部へラ切りの土師器皿、高台付环等があるが数量は非常に少ない。苔崎宮の遷座は延長元（西暦923）年と伝承され、同宮創建時期の遺構とみて大過なかろう。10世紀後半代には北側で井戸1基が廃棄される。また、2×2間の倉庫SB-003が建てられ、11世紀初頭には廃絶すると推定される。後世の遺構に切られ

時期が不明確だが、SB-002、004は上輪方位と遺構の切り合いから、SB-003と同時に倉庫群を形成していた可能性がある。11世紀前半になると、倉庫に替わり方形竪穴が占地し、更に北側の9区でも方形竪穴と考えられる遺構が確認された。この時期迄の遺物には、底部ヘラ切り十師器Ⅲ・坏に加え、托と考えられる土解器高台付皿(皿C)、越州窯系青磁碗等がある。また9区の方形竪穴やその周辺では、京都系土師器Ⅲの模倣品、桶葉型瓦器碗など畿内系の搬入品が出土している。12世紀前半から遺構数が増え始め、SB-001倉庫跡や方形竪穴群が設けられる。後半代を通じて井戸等の生活遺構が多く、集落として盛期にあつたと推定される。前半代までの出土遺物には、底部ヘラ切り・糸切りの十師器が混在し、白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類、水注等がある。また、越州窯系青磁(碗・托・巻)、初期高麗青磁、綠釉陶器、瓦片など特筆すべき遺物もある。12世紀後半代には、土師器は概ね底部糸切りを主体とし、瓦器碗、白磁碗Ⅳ・V類等に加え同安窯系青磁が出土する。この時期は多くの井戸が廃棄され、また方形竪穴も埋没したと考えられる。更に、中国產輸入陶磁器や文房具等を廻葬する木棺墓が6、9区で各1基づつ出現する。後代の墓群とは古地や副葬品に明確な差異があり、崖敷墓の可能性がある。その後、13世紀前半の遺構は殆ど検出されない。13世紀後半代の遺構は主に幕と溝で、生活遺構が殆ど検出されなかつた。副葬品を持たない墓では埋葬時期が不明確だが、SX-081の状況から概ね14世紀代まで墓地として利用されたものと推測される。14世紀後半代以降の遺構・遺物は確認されず。土地利用が終了したと推測される。

10区では11世紀後半代からの遺構が確認され、この時期に集落の範囲が北へ拡大したと考えられる。以後12世紀前半代迄の遺構が最も多く、庇付建物や柵列をはじめ、井戸・廻棄土壤清等がみられ集落の盛期と推定される。出土遺物には、底部ヘラ・糸切りの土師器、白磁碗Ⅲ・Ⅳ類、越州窯系青磁、耀州窯系青磁、初期高麗青磁、瓦片等がある。12世紀後半代に入ると遺構数は減少し、13世紀前半代まで同様の傾向を示す。集落の衰退期であろう。13世紀後半から再び盛期を迎えるようで、多數の廻棄土壤等があり、また14世紀後半には庇付と推定される掘立柱建物が建てられる。遺物には底部糸切り土師器、龍泉窯系青磁碗Ⅰ-Ⅴ類等の他、馬具、青白磁香炉等の奢侈品が出土している。14世紀代には遺構数が激減し、出土遺物には小型化した土師器や少量の中国陶磁器があり、集落としての終焉を迎えるようである。

掘立柱建物や方形竪穴等の主軸は、6区では10世紀前半代から磁北より 19° ~ 29° 東偏、もしくはそれに直行する方位を採用している。また10区では 10° ~ 20° 東偏する方位を探るが、真北直行の柱穴列も見られる。この柱穴列の性格や時期は明確でないが、糸切り上師器を含まず、12世紀中葉以前と考えられる。吉崎宮創建期から11世紀中頃の遺構には、主軸を真北にとることが指摘されており、この段階の遺構である可能性がある。現吉崎宮本殿・楼門の主軸は $N-60^{\circ}$ ~Wであるが、6区の遺構を見る限り10世紀前半代からこの主軸のものが見られ、現在の箱崎地割がこの段階から変化していない可能性がある。

以上、今回の調査成果を簡単に纏めた。複数の倉庫や方形竪穴、庇付建物等が検出され、出土品にも越州窯系青磁、初期高麗青磁、瓦・埠等の特筆すべき遺物が含まれ、一般集落とは様相を異にする。寺院もしくは屋敷地の一部である可能性もあり、本調査区の性格については周辺の調査区と併せて今後検討を重ねたい。

本調査区を概観する限り、10世紀前半と12世紀中頃~後半の二時期に大きな兩期が認められる。10世紀前半代は集落としての利用が開始される時期であり、これは延長元(西暦923)年の吉崎宮創建に起因すると考えられる。また、12世紀後半代には6区で生活遺構が消滅し、10区で集落の衰退が看取された。「宮寺縁起抄」によれば、仁平元(1151)年、大宰府檢非違所別当安清らによる吉崎・博多の大追捕が記載されている。12世紀後半における集落の衰退がこの事件に関わるかどうかも含め、周辺の調査区との成果と併せて、箱崎遺跡における集落の盛衰と史実を併せて検討する必要がある。

《参考文献》 横本義嗣 2003「福岡市所在の箱崎遺跡について」『中世都市研究会2003年九州大会資料集』

福岡市箱崎遺跡第26次調査出土人骨

中橋 孝博

九州大学大学院比較社会文化研究院

はじめに

商都、港町として古い歴史を持つ博多とその周辺域は、これまで弥生時代以降の各時代の古人骨資料が出土し、人骨形質の時代変化、居住環境と住人形質の関係など、積年の人類学上の懸案を考える上で、大きな可能性を秘めたフィールドの一つとなっている。

旧博多街区の東隣に位置する箱崎遺跡（福岡市東区）では、これまでの福岡市教育委員会による発掘調査の結果、1997年度の第7次調査では12世紀前半～13世紀初めの男性頭蓋が（中橋、1993）、1999年度の20次、21次調査では、保存不良ながら計5体の同時期の人骨が（中橋、2002）、そして2000年から翌2001年にかけての22次調査でも、5体の古代～中世人骨が出土している。

今回ここに報告するのは、同じ2001年度の第26次調査によって当遺跡から出土した、古墳時代～中世初期の人骨計9体である。砂層中に見出された当遺跡の埋葬環境のためか、やはり人骨の保存状態が悪く、残念ながら得られた情報は限られたものになったが、全国的に稀少な時代の資料であり、以下にその検討結果を報告する。

遺跡・資料・方法

今回の第26次調査も、これまでの継続として福岡市東区の、箱崎宮北側の一帯で実施され、その内埋葬遺構は主に6区と呼称される区域から出土した。計9体を数え、各1基の甕棺墓と木棺墓のほかは、いずれも土塚墓出土のものである。別項に詳述されているように、甕棺墓や土塚の多くは副葬品を持たないが、木棺墓からは青磁碗や陶製刷、刀子など多数の遺物が人骨片と共に検出された。

所属時代はこれら副葬品や層序に関する考古学的な検討から、甕棺墓については古墳時代の4世紀に過ぎず、他は概ね古代～中世初期の12世紀～14世紀のものと考えられている。

人骨の計測は、Martin-Saller（1957）に従った。また性判定には、筆者らの保存不良骨に対する方法（中橋、1998）を援用した。

表1. 箱崎遺跡第26次調査出土人骨

番号	性	年齢	時代	埋葬施設	埋葬方位・姿勢
ST062	?	幼児	4C後半	甕棺墓	不明
SR005	?	?	13C前半	木棺墓	不明
SX044	女	(熟年)	13C?	木棺墓	北向き・右側臥屈肢
SX045	男?	(熟年)	13C?	土塚墓	北向き・右側臥屈肢?
SX061	?	(熟年)	13C後半	土塚墓	北向き・右側臥屈肢?
SR066	男?	熟年	12C後半	木棺墓	仰臥伸展?
SX081-1	?	熟年	14C前半	土塚墓	?
-2	?	熟年			
SX101	男	熟年	13C?	土塚墓	北向き・左側臥屈肢
SX102	男?	熟年	13C?	土塚墓	北向き・左側臥屈肢?

結果

一部四肢骨で計測できたものについては主な比較群と共に表2 表3に示した以下各人骨について概括する。

SX-062

斐棺墓から出土したもので、左側頭骨の一部のほか歯が棺底からかなりばらけた状態で検出された。斐棺の破片も棺底に落ちており、おそらくは埋葬後、斐が何らかの要因で壊れた時に乱されたものであろう。

以下に歯式を示しておく。永久歯はまだ萌出しておらず、その歯冠、歯根部の形成状況から、4~5歳の幼児と見なされる。

(M ²)(M ¹)	(I ₁)			(C)	(M ¹)(M ²)		
/ / C / /	/ /	C	/	m ²			
m ² m ¹ / / /	/ /	C	/ /				
	(I ₁) (I ₂)			(M ¹)	() : 未萌出、/ : 欠損		

SX-005

これのみ9区で検出された土塙墓から出土した。土圧で扁平に押しつぶされた頭蓋片のほか、四肢骨の一部が確認できる。ただ、保存が悪く四肢の部位同定は困難であり、年齢、性も不明である。

SX-044

下顎骨を含む頭蓋右側部のほか、右鎖骨、左右上腕骨、左右大腿骨、左脛骨の各破片が回収された。各骨の位置関係から、頭位を北にとり、顔面を西に向けた右側臥屈肢の埋葬姿勢が推測される。四肢骨の太さからみて女性の可能性が高く、また歯の咬耗の程度から熟年以上に達した個体と見なされる。表3に大腿骨の計測結果を示したが、骨体のサイズは比較的大きく、中央部の断面示数にも現れているように粗線の発達は中世期の女性としては良好で、やや頑丈な特徴を見せている。

SX-045

やはり下顎骨を含む頭蓋骨右半の他、左右の大腸骨と左脛骨の一部が回収された。下肢骨の保存状態が不良のため明確ではないが、44号人骨と同様、やはり頭位を北にとった、右側臥で、下肢も股関節、膝関節を曲げた姿勢が推測される。外後頭隆起の発達が著名で、頭蓋サイズ（頭最大長：184mm）も大きく、一応男性の可能性が考えられる。ただ、表2に示した大腿骨の骨体諸径は必ずしもそうした傾向と一致せず、男性ならばやや華奢な人物であったろう。歯の咬耗はかなり進行しており、熟年以上に達した個体と考えられる。

SX-061

やはり頭蓋の右半と上腕骨片、左右の大腸骨、脛骨の各破片の存在が確認できる。この遺体もやはり、頭位を北に、右半身を下にした右側臥屈肢の埋葬例であった可能性が考えられる。遺存歯の歯式を以下に示す。

M ₃ / / P ₂ P ₁ / / /	/ / / P ₁ / M ² M ³ M ³		
/ / / P ₂ P ₁ C I ₂ /	/	I ₂	C / / / / /

SX-066

青磁碗や土師皿、碁石、陶製瓶、刀子など豊富な副葬品と共に木棺墓から出土した。頭蓋を始めとして、

ほぼ全身各部が出土したが、大腿骨の下半、及び下腿部は搅乱を受けて消失している。骨の位置関係から仰臥位であり、下肢は乱されているものの大腿骨の方向から判断して、伸展葬であった可能性が高い。

頭蓋は土圧により変形を受けているためその特徴を窺うことが出来ないが、眉間部の発達は比較的良好で、四肢も太い傾向が見られ、男性見なして大過なかろう。歯の咬耗からみてやはり熟年個体と見なされる。

SX-081

同一墓壙から、二セットの歯列が回収された。墓壙北半からやや若い上下顎の歯列、南半からやや咬耗の進行した右上第一大臼歯、左下顎第二小白歯、第一大臼歯が出土した。最初から二体を合葬したと考えるには墓壙が狭く、何らかの搅乱を受けた結果の可能性も否定できない。

SX-101

頭蓋の他、左右上腕骨、右桡骨、左尺骨、左右大腿骨、及び左右の脛骨と腓骨が検出された。頭位こそ同じ北向きではあるが、当埋葬は今回の他の例と異なり、身体を東に向かた左側臥屈肢の埋葬位を見なされる。右股関節は強屈して膝を胸に引き寄せ、左下肢はほぼ股関節を90度に曲げて、強屈した膝を左に倒した姿勢が推測される。

歯の咬耗、及び四肢骨のサイズから熟年・男性と見なされる。歯式を以下に示す。

/ / / / / / / / / /	/ / C / / / / /
/ / M ₁ O O C I ₂ X	X △ C P ₁ P ₂ M ₁ M ₂ /

(X:歯槽閉鎖、△:歯根のみ)

大腿骨の計測結果を表2に示したが、やや頑丈で骨体上部に扁平性が見られる他は、特に変異は認められない。

SX-102

下顎骨のほか、左上腕骨と前腕骨の一部、左右の大脛骨、及び左右いずれか不明の脛骨片が出土した。埋葬姿勢については、頭位は北で、しかも大腿骨などの位置は101号墓に類似しており、明確ではないもののやはり同じような姿勢であった可能性が窺える。計測は出来なかったものの、上腕骨はかなり太く、また表2に示すように、大腿骨の骨体もこの時代の男性として特に筋強と言葉わけではないが、現代人よりは太い傾向を明らかにしている。歯の咬耗は比較的軽微であり、成年と見なされる。

歯式を以下に示す。

/ / / / / C I ₂ /	/ I ₂ C / P ₂ M ² M ² (M ₂)
(M ₃) M ₂ M ₁ P ₂ P ₁ △ / △	X △ C P ₁ P ₂ M ₁ M ₂ /

終わりに

箱崎遺跡26次調査の出土人骨では、22次調査と同様、保存不良のためその形質については十分な情報が得られなかった。唯一、埋葬姿勢として、やはり北頭位・右側臥屈肢がその大半を占めた事実は、これが当地域の古代住民の埋葬習俗としてかなり一般的であったことを示唆している。こうした中で、北頭位は同じながら、左側臥でやや強度の屈葬位をとる遺体が散見され興味深いが、これが何を意味するのか、今後事例を増やして、人骨の性、年齢やあるいは副葬品などとの関係を探っていく必要があろう。最初に

も記したように古墳時代から中世に至る間の古代期資料は全国的に稀であり、当地域は今後なおそうした貴重な人骨資料が出土する可能性を秘めている。今後の発掘調査の進展に期待したい。

謝辞

当人骨を分析するにあたり、色々とご教示いただいた福岡市教育委員会の関係各位に深謝します。

文献

阿部英世（1955）：「現代九州人大腿骨の人類学的研究」、人類学研究2。

池田次郎（1988）：「吉備地方海岸部の純文時代人骨－時代差と地域性の成立」
『考古学と関連科学』鎌木義昌先生古稀記念論文集刊行会。

城一郎（1939）：「西日本古墳時代人人骨の人類学的研究」、人類学報。

Martin-Saller(1957) : Lehrbuch der Anthropologie. Bd.I.Gustav Fischer Verlag. Stuttgart.

中橋孝博（1993）：「箱崎遺跡群第7次調査出土の中世人骨」、福岡市埋蔵文化財調査報告書459。

中橋孝博（2002）：「福岡市箱崎遺跡群第20次・21次調査出土人骨」、福岡市埋蔵文化財調査報告書705。

中橋孝博・永井昌文（1985）：「山口県吉母浜遺跡出土人骨」、吉母浜遺跡、下関市教育委員会。

中橋孝博・永井昌文（1989）：「弥生人の形質、男女差、寿命」、弥生文化の研究1、雄山閣出版。

表2. 大腿骨計測値（男性、左）

	箱崎26次 (13C)			北部九州 ¹⁾ (弥生)		津 雪 ²⁾ (縄文)		西日本 ³⁾ (古墳)		吉母浜 ⁴⁾ (中世)		九 州 ⁵⁾ (現代)		
	45	101	102	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	
1	最大長	—	—	60	430.9	19	414.1	3	426.3	18	419.1	59	406.5	
2	自然位長	—	—	18	427.7	19	411.0	3	422.0	15	418.1	59	403.2	
6	中央矢状径	25	29	28	162	29.7	47	29.0	22	27.2	19	28.1	59	26.5
7	中央横径	25	28	26	166	28.0	47	26.0	22	26.8	19	27.7	59	25.6
8	中央周	81	87	86	161	90.8	47	87.4	21	85.9	19	87.8	59	82.4
9	骨体上横径	29	33	—	115	32.6	43	30.7	20	29.0	19	32.1	59	29.4
10	骨体上矢状径	23	23	—	115	26.2	43	25.5	17	28.4	19	24.1	59	24.3
8/2	長厚示数	—	—	—	18	21.4	19	21.2	3	20.1	14	21.2	59	20.4
6/7	中央断面示数	100	103.4	107.7	162	106.4	47	111.8	22	101.8	19	101.3	58	103.8
10/7	上骨体断面示数	73.3	69.7	—	115	80.5	43	83.1	17	98.1	19	76.1	58	82.8

1) 中横・永井(1989)、2) 池田(1988)、3) 城(1938)、4) 中橋・永井(1985)、5) 阿部(1955)

表3. 大腿骨計測値（女性、左）

	箱崎26次 (13C)			北部九州 (弥生)		津 雪 ²⁾ (縄文)		西日本 (古墳)		吉母浜 ⁴⁾ (中世)		九 州 ⁵⁾ (現代)	
	SX-044	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1	最大長	—	—	34	405.5	22	388.2	2	401.0	25	378.0	13	380.1
2	自然位長	—	—	11	403.0	22	381.7	2	401.0	24	375.8	13	375.9
6	中央矢状径	25	—	112	25.7	45	25.2	23	24.5	28	23.3	13	23.6
7	中央横径	24	—	112	26.3	45	24.2	24	24.7	28	24.8	13	23.2
8	中央周	78	—	111	81.5	45	78.0	23	78.1	28	76.1	13	74.2
9	骨体上横径	(30)	—	86	30.5	42	8.4	19	28.2	28	29.1	13	27.5
10	骨体上矢状径	(24)	—	86	23.2	42	22.2	17	26.6	28	20.9	13	21.3
8/2	長厚示数	—	—	11	20.8	21	20.3	1	20.6	24	20.4	13	19.8
6/7	中央断面示数	104.2	—	112	98.3	45	104.5	23	100.0	28	84.5	13	102.0
10/7	上骨体断面示数	80.0	—	86	76.4	42	78.2	19	72.2	28	72.0	13	77.1

報告書抄録

報告書名	はこざきにじゅういち							
調査名	箱崎遺跡第26次調査報告(1)							
調査地名	菅崎土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告Ⅲ							
調査実施者名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
調査番号	第815集							
調査責任者名	松浦一介							
調査実施機関	福岡市教育委員会							
所在地・電話	福岡市中央区天神一丁目8番1号 電話 092-711-4667							
調査年月日	平成16(西暦2004)年3月31日							
調査名	本りんご	北緯	東経	測量期間	測量面積	測定距離	測定距離	
調査場所	福岡県福岡市 東区箱崎一丁目 ・馬出五丁目	40131		33° 36' 28"	130° 26' 24"	20010401 ~ 20020326	2,100m ²	上地区画整理
調査結果	古墳時代	古式土師器、土師器(眞・坏・高台付黒色上器(碗・皿・托上坏)、瓦器越州窯系青磁(碗・皿・托)、白磁(碗・皿・水注)、中古青磁(碗青白磁(合子・香炉)、黒釉陶器(天球輪陶器(碗・皿・蓋)、褐釉陶器、新羅陶器、高麗青磁(碗・皿)、瓦、墓石、陶製鏡、銅錢、銅製飾、鉄製品(刀子・釘・櫛・火打金)人骨、動物骨、魚骨	上地区	菅崎宮	菅崎宮に道路を挟んで隣接する区画整理事業地内での調査。菅崎宮創建以降の集落遺跡。庇付建物や倉庫、方形竪穴等を検出した。出土遺物には瓦や越州窯系青磁、柿葉型瓦器碗などを含み、他の一般集落とは様相が異なる。			
箱崎遺跡	集落	古墳時代 前期 古代末 ~中世	方形溝墓 円形溝墓 壘積墓 獨立柱建物 方形竪穴 井戸 土塼 溝 土塼室 木棺墓	古式土師器、土師器(眞・坏・高台付黒色上器(碗・皿・托上坏)、瓦器越州窯系青磁(碗・皿・托)、白磁(碗・皿・水注)、中古青磁(碗青白磁(合子・香炉)、黒釉陶器(天球輪陶器(碗・皿・蓋)、褐釉陶器、新羅陶器、高麗青磁(碗・皿)、瓦、墓石、陶製鏡、銅錢、銅製飾、鉄製品(刀子・釘・櫛・火打金)人骨、動物骨、魚骨	上地区	菅崎宮	菅崎宮に道路を挟んで隣接する区画整理事業地内での調査。菅崎宮創建以降の集落遺跡。庇付建物や倉庫、方形竪穴等を検出した。出土遺物には瓦や越州窯系青磁、柿葉型瓦器碗などを含み、他の一般集落とは様相が異なる。	

菅崎土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告Ⅲ

はこ
ざき
箱 崎 21

-箱崎遺跡第26次調査報告-

福岡市埋蔵文化財調査報告書第815集

平成16年(2004年)

編集・発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8番1号

印 刷 さつま印刷株式会社
福岡市博多区古塚一丁目9番7号

HAKOZAKI 21

The Report of Archaeological Excavation

at HAKOZAKI Site; No.26(II)

in Fukuoka City, JAPAN

The Report of The Research of Burial Cultural Properties Fukuoka City vol 815

March, 2004

The Board of Education

Fukuoka City